

## 二 各校の先行事例



製糸王として名を馳せた片倉兼太郎を取り上げ、鎖国により産業や文化の面での近代化に遅れをとった日本が殖産興業を進める上で大きな役割を果たした岡谷の製糸業と、それを推進した兼太郎の歩みを通して、日本の近代化について思考・判断するようにした事例

## 1 単元設定の理由

前単元「明治維新をつくりあげた人々」において、子どもたちは、江戸時代末期の日本橋近くの様子と明治時代初めの日本橋近くの様子との二つの絵図を比較し、その変化から、「江戸時代にも外国の文化が入ってきていたんだから、洋服とか、洋風のもが少し見られてもいいはずなのに、どうしてこの20年間（1860年～1880年ころ）に、こんなに社会が変わったのだろう」という学習問題について考えた。子どもたちは、調査活動や話し合い活動に意欲を示し、新たな事実に出会った喜びや、自分の予想と事実との違いを知った驚きをノートに書いたり、発言したりするようになってきた。また、友の発言と自分の考えとを関連付けながら社会的事象をとらえることができるようになってきた。

そこで、本単元では、明治以降、日清・日露戦争から条約改正と、第一次世界大戦時の産業や日本の国力が充実し国際的地位が向上したことの関係について、製糸王国岡谷と製糸王片倉兼太郎の歩みを基に追究を進めていきたい。この時代、岡谷の生糸が日本の外貨獲得の中心を担っていたことを探ったり、今もなお、昔ながらの諏訪式繰糸器で糸を紡いでいる宮坂製糸場の糸とり体験や、学区にある蚕糸博物館の見学をしたりすることによって、歴史をより身近に感じることができるであろう。また、学習してきた事実を基に、自らが思考・判断し探究していく場面を設定することにより、片倉兼太郎と製糸業、そして、そのころの日本の歴史を関連付けて考えるようにしたい。

このような学習によって、ふるさと岡谷や日本の歴史に対する誇りと愛情を育てるとともに、子どもたちが歴史をより深く学ぶ喜びや楽しさを感じてもらうことを願い、本単元を設定した。

## 2 単元の目標

### (1) 主目標

明治から昭和初期、日本の産業が発展していったころ、日本の輸出額の6割を占めていた生糸について、その生産の4分の1を占めていた岡谷の製糸業と、日清・日露戦争や条約改正などの関係を調べることを通して、我が国の国力が充実し、国際的地位が向上していったことを理解できるようにする。また、我が国の近代化に貢献した先人の努力に思いを寄せるとともに、岡谷と日本全体の動きを結びつけてとらえ、広い視野から歴史を考える力を育てる。

## (2) 具体目標（評価規準）

A 社会的事象への関心・意欲・態度	B 社会的な思考・判断・表現	C 資料活用の技能	D 社会的事象についての知識・理解
<p>ア 明治以降の岡谷の製糸業と日本全体の動きに関心を持ち、粘り強く追究しようとしている。</p> <p>イ 国家的視野に立ち事業を推進した片倉兼太郎に関心を持ち、その生き方に学ぼうとしている。</p>	<p>ア 産業の発展や近代化への動きについて、日本全体の様子と岡谷の製糸業の様子を結びつけて考えたり表現したりすることができる。</p> <p>イ 複数の資料や既習のことがらを結びつけて、日露戦争時、兼太郎が軍資金を献納したことは必要なことだったのかを判断することができる。</p> <p>ウ このころの世界の動きや国内の動きと結びつけながら、片倉兼太郎の事業の方向や生き方を考えたり表現したりすることができる。</p>	<p>ア 教科書や資料の絵図、グラフ、文章などから追究に必要なことをがらを読み取り、まとめることができる。</p> <p>イ 資料から読み取ったり、考えたりしたことを分かりやすくまとめることができる。</p> <p>ウ めあてをもち、メモをとりながら製糸場や博物館の見学ができる。</p>	<p>ア 明治の初め、日本が近代化を推し進めていく中で、様々な会社が出てきたことや、製糸業が日本の中心産業になっていったことを理解することができる。</p> <p>イ 厳しい国際状況下に置かれていた日本が、日清・日露の戦争に勝利を収め、講和条約を締結することによって、国の安全を確保できたことを理解することができる。</p> <p>ウ 幕末に欧米諸国との間で結ばれた不平等な条約を対等なものに改める交渉を進め、条約改正に成功したことを理解することができる。</p>

## 3 単元の展開

学習問題・学習活動	指導【評価】	時	資料
<p>1</p> <p>明治になってどのような産業がさかんになったのだろう。</p> <p>○グラフ「会社の数の変化」を読み取る。</p> <p>・たくさんの会社がつくられるようになった。</p> <p>・株式会社（渋沢栄一）</p> <p>・紡績工場（大阪）</p> <p>・岡谷の製糸工場や街並みの様子</p> <p>・製糸王 片倉兼太郎</p>	<p>・グラフ「会社の数の変化」や各地につくられた工場などの写真を示し、それらから分かることを発表し合う中で、新しい産業が起こったことや発展していく様子をつかめるようにする。</p> <p>・このころの岡谷の製紙工場や街並みの様子の写真を示し、それを読み取ることから、製糸業が栄えていたことをつかめるようにする。</p> <p>・岡谷蚕糸博物館や片倉館など、今も当時の施設や建物が残っていることを確かめる。</p> <p>【A-ア D-ア】</p>	1	<p>グラフ：会社の数の変化</p> <p>写真：岡谷の製紙工場や街並みの様子</p>
<p>2</p> <p>岡谷ではどうやって製糸をやっていたのだろう。</p> <p>○宮坂製糸に行って、糸を取る体験をする。</p> <p>○このころの岡谷の製糸業の様子を、詳しく調べる。</p>	<p>・糸取りは楽しいと、今でも昔ながらの機械で糸取りを続けている宮坂製糸を見学することにより、当時の様子を想像できるようにする。</p> <p>・実際に糸取りを体験してみることににより、糸取りには高い技術が必要なことに気付けるようにする。</p> <p>・生糸は、明治から大正、昭和の初期にか</p>	2 3 4	<p>資料：</p> <p>・横浜生糸入荷相撲番付</p> <p>グラフ：総輸出額に</p>

<ul style="list-style-type: none"> <li>・中山社と諏訪式繰糸器</li> <li>・製糸結社と信州上一番格生糸</li> <li>・世界一の生糸輸出国日本の中核的役割を担った岡谷の製糸業</li> </ul>	<p>けて日本の貿易輸出の中心を占め、最盛期には6割を占めるほどであったこと、特に岡谷はその4分の1を占めるほど盛んなときがあったことが分かるようにする。</p> <p>【C-ア C-ウ】</p>	<p>対して蚕糸類輸出の占める比重</p>
<p>3</p> <p>片倉兼太郎は、どのように製糸業をやっていたのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・製糸家や労働者の努力と苦労</li> <li>・片倉兼太郎と片倉家</li> </ul> <p>○兼太郎が学校をつくった理由を考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・諏訪式繰糸器の開発や製糸結社の結成、生糸の質の向上、新しい品種（交配種）の改良など、製糸家の努力があったことや、幼いころから働きに出た女子工員などについて調べ、労働者の努力や苦労に気付けるようにする。</li> <li>・教師が学校をつくった事実に着目している児童の意見を取り上げ、片倉兼太郎が事業経営の他に、公共事業にも力を尽くしたことについて考えられるようにする。</li> </ul> <p>【A-イ C-イ】</p>	<p>5 6年2</p> <p>6 部の製糸業資料集(自作資料集)</p>
<p>4</p> <p>なぜ兼太郎は、世界一の製糸家になれたのだろうか。</p> <p>○女工さんについての調査活動と話し合い。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・十代半ばから働き、長時間、労働しなければならなかった女子工員の苦労と努力</li> <li>・集団生活による伝染病の流行</li> </ul> <p>○兼太郎について、さらに深く調べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生産量をより高く、より早く、より利益を拡大させるために、改良に次ぐ改行を繰り返した。(機械の改良、糸の品質改良など)</li> <li>・生糸価格の暴落による赤字</li> <li>・品質と生産量を高めるための、さらなる苦労と努力</li> <li>・片倉一族や製糸業で働く人々の努力(誰よりも朝早く、夜遅くまで働いた兼太郎とその奥さん、2代目兼太郎、片倉組の外務大臣と称された今井五介)</li> <li>・片倉家の家憲10ヶ条</li> <li>・道路、鉄道(大糸線開通への援助)、電話、電気などのインフラ整備</li> <li>・川岸小学校設立協力、私立尋常片倉</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・この時期の岡谷の製糸業が日本の近代化を支えたことと、そこには製糸家や製糸業で働く人たちの苦労や努力があったことをつかめるようにする。</li> <li>・出荷の大量化、糸質の統一を目的とする製糸結社(開明社)、座繰製糸から機械製糸への早期転換、結社解散後の県外進出、新品種の改良、海外進出、コンツェルンにまで成長した片倉組の先を見通す力や苦労や努力について考えるようにする。</li> <li>・岡谷の製糸業の中でも、厳しい労働条件下に置かれた労働者たちがいたことに着目し、製糸業発展の裏にある苦労や努力に目を向けられるようにするとともに、生糸の価格変動の激しさや、景気の変動による損失などについても考えられるようにする。</li> <li>・片倉家の家憲10ヶ条をとり上げ、兼太郎をはじめとする片倉家の人々の考え方や、経営精神に触れるようにする。</li> <li>・生産量の向上、利益の拡大の他に、道路や鉄道、電話や電気などのインフラ整備や、病院や学校建設などの福利事業にも力を入れたことを確かめる。</li> <li>・岡谷の製糸業が栄えた背景を考えることで、日本が列強各国の支配下に入らないように、国力を強める必要があったこと</li> </ul>	<p>7 グラフ「女子工員の年齢別集計表」</p> <p>8</p> <p>9 「片倉家の家憲10ヶ条」</p> <p>10</p> <p>11</p>

<p>小学校，現岡谷病院建設，松商学園救済，温泉浴場片倉館建設などの福利事業</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・兼太郎は日露戦争の軍資金として金一万円，恤兵費千五百円を献納</li> <li>・岡谷のすずめは黒かった。</li> <li>・製糸業が輸出の主役だった。</li> <li>・日本は国力を向上させるために外貨を獲得する必要があった。</li> <li>・兼太郎は国力を高めることを考えていた。</li> </ul> <p>○日本はどのようにして国力を強めていったのか考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・治外法権をなくす（陸奥宗光）</li> <li>・ノルマントン号事件</li> <li>・日清戦争</li> <li>・日露戦争</li> <li>・関税自主権の回復（小村寿太郎）</li> <li>・朝鮮の植民地化</li> <li>・国際社会で活躍する日本人（野口英世など）</li> <li>・工業の発展（産業革命）</li> <li>・第一次世界大戦</li> <li>・社会問題の発生…公害問題，米価の急騰</li> <li>・関東大震災</li> <li>・生活を守るための運動…民衆運動，労働運動，農民運動，選挙権を求める運動，女性の地位向上を求める運動，部落解放運動</li> </ul>	<p>をつかめるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・長年続いた鎖国による列強国からの遅れや，不平等条約を結ばされたことなどの既習内容から，日本の近代化に向けての苦勞に目を向けることで，兼太郎が自己の利益だけでなく，国力の増大に目を向けていたことを考えられるようにする。</li> <li>・調べ活動や調べてきたことを基にした話し合いにより，以下のことを理解できるようにしたい。</li> </ul> <ol style="list-style-type: none"> <li>①日本の近代化にとって，不平等条約が大変不利なものであり，それを解消するための道のりが 平坦ではなかったこと。</li> <li>②世界の多くの国々が，武力によって国力を高め，自国の領土を広げるために戦争という手段をとっていたこと。</li> <li>③日本も清（中国）やロシアと戦争をし，その後，朝鮮（韓国）を植民地にしたこと。</li> <li>④工業の発展の裏で様々な社会問題が発生したことや，国民が自分たちの生活を守るために立ち上がったこと。</li> <li>⑤産業の発展により人々の暮らしが豊かになったが，その裏で公害問題などの諸問題が起きてきたこと。</li> </ol> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本全体の様子と兼太郎の歩みを関係付けることを通して，軍事力と経済力を高めないと世界に太刀打ちできなかったことや，兼太郎は結果として戦争に手を貸すことになったことについて考えられるようにする。 【Bーア Dーイ Dーウ】</li> </ul>	<p>資料「近代化と若者の夢」</p> <p>挿絵「米騒動」</p> <p>資料「田中正造と足尾銅山」</p>
<p>5</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>兼太郎は，日露戦争の軍資金を出さない方がよかったのではないかな。</p> </div> <p>○出さない方がよかったという立場と，出した方がよかったという立場の意見の交流。</p> <p>○片倉兼太郎は，戦争のためにお金を使おうと思って製糸業をやっていたのか考える。</p> <p>○ 蚕糸博物館に見学に行って学習のまとめをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「日露戦争の悲惨さ」と「戦争に負けた国がどのような扱いを受けるのか」を一つの視点とし，戦争が及ぼす側面を考えられるようにする。</li> <li>・国力の充実と国際的地位の向上のため，経営者である兼太郎が，労働者ともに様々な苦勞を乗り越え，努力を重ねてきたことに目を向けて判断できるようにする。</li> <li>・単に岡谷の製糸業の中の出来事に留まるのではなく，国民生活の様子や国際社会の中での日本の国際的地位について考えることで，岡谷の製糸業と日本全体の歴史の動きを重ねて考えられるようにする。 【Bーイ Bーウ Cーウ】</li> </ul>	<p>12</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・</li> </ul> <p>13</p> <p>（本時）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・</li> </ul> <p>14</p> <p>資料「中央東線開通工事に関して」</p>

## 4 本時案

### (1) 主眼

片倉兼太郎は日露戦争の軍資金を出した方がよかったのかを考える場面で、これまでに学習してきた複数の資料や既習のことがらを結びつけたり、軍資金の献納とともに鉄道開通に力を尽くした事実から、兼太郎は戦争のためにお金を使おうと思って製糸業をやっていたのだろうかということ問い合ったりすることを通して、このころの世界の動きや国内の動きと結びつけながら、片倉兼太郎の事業の方向や生き方を考えることができる。

### (2) 本時の位置（全14時間中の第13時）

前時：「片倉兼太郎は、日露戦争の軍資金を出さなかった方がよかったのではないか」という学習問題に対する自分の考えをまとめた。

次時：博物館見学のためあてをもち、蚕糸博物館見学に行く。

### (3) 指導上の留意点

- ① それぞれの考えと根拠がはっきり分かり、子どもたちの発言がつながっていくように、模造紙を用いて整理する。
- ② 学習問題に対して、それぞれがどんな考えをもっているのかを事前に整理し、発言が偏っていないように配慮する。

### (4) 展開

段階	○学習活動 ・ 予想される児童の反応	指導・評価	時間	資料
問題把握	○学習問題を確かめる。 【学習問題】兼太郎は、日露戦争の軍資金を出さなかった方がよかったのではないか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 国力の充実と国際的地位の向上のため、経営者である兼太郎，労働者共に様々な苦勞を乗り越え，努力を重ねてきたことに目を向けて判断できるようにする。</li> <li>・ 単に岡谷の製糸業の中の出来事に留まるのではなく，国民生活の様子や国際社会の中での日本の国際的地位について考えることで，岡谷の製糸業と日本全体の歴史の動きを重ねて考えられるようにする。</li> <li>・ 「鉄道開通に関する尽</li> </ul>	2	学習ノート
問題の究	【出さない方がよかった】 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ それは戦争のため，人殺しのためお金だ。</li> <li>・ もっと違うことに使った方がいいと思う。</li> <li>・ そんな無意味なことにお金を使うなら，もっと自分の会社を大きくした方がいい。</li> <li>・ そのお金をとっておけば，不況になったり，糸の価格が下がったりしても乗り切れると思う。</li> <li>・ そんなところにお金を使わずに，女工さんたちの給料を増やして，労働条件をよくした方がいい。</li> <li>・ 病院や学校をつくるなどしているんだから，</li> </ul>		【出した方がよかった】 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ このお金や製糸業で獲得した外貨があったから，戦争に勝てたと思う。</li> <li>・ もちろん戦争はよくないけど，その戦争に負けていたら，今のような日本の生活はなかったんじゃないか。</li> <li>・ このとき，日本がロシアに負けてしまったら，多額の賠償金を支払わなければならないようになっていたと思う。</li> <li>・ 国力を高めるために戦争という手段に国が出たわけだから，お金を寄付して貢献するのが正しいという時代だったと思う。</li> </ul>	15

明	<p>そうやって人のためになることに使うべきだ。</p> <p>・兼太郎は戦争のためにお金を使おうと思っていただけではないと思う。</p>	<p>力」の資料を提示することにより、兼太郎がお金を使おうと思った目的は何かということを考えられるようにする。また、兼太郎が国家的視野に立って製糸業を進めていったこと、ふるさと岡谷や製糸業の繁栄を願っていたことに気付けるようにする。</p>	15	
	<p>【学習課題】兼太郎がお金を使おうと思った目的は何か、資料で確かめよう。</p> <p>・もちろん戦争のためにお金を使おうとなんて思っていなかった。</p> <p>・そんな使い方をすれば、みんなが不幸になると思う。</p> <p>・でも、軍資金を出したわけでも、何となく分かるような気もする。</p> <p>・兼太郎は自分の利益もあるけど、国全体の利益を考えていたと思う。片倉家の家憲の通り生きたと思う。</p> <p>・今、そうやって軍資金を寄付することが、自分が国のためにできることだと考えていたと思う。</p>			
／ 整理 発展	<p>【資料】日露戦争時、国に一万円の軍資金を献納すると同時に、戦争のために中断していた鉄道開通に力を注いだ事実。</p> <p>・製紙工場で一先けんめい働いていた女工さんたちも、みんな国が豊かになるように頑張っていたと思う。</p> <p>○社会科日記に学習したことのまとめを書く。</p>	<p>このころの世界の動きや国内の動きと結びつけながら、片倉兼太郎の事業の方向や生き方を考えることができたか。</p> <p>※学習ノートや授業中の発言、社会科日記からみる。</p>	10	資料 「中央東線開通工事に関して」
	<p>・兼太郎さんは日本のこともそうだけど、製糸業のことや岡谷のことも考えていたんだ。</p>	3		

## 5 教材研究

### (1) 学習指導要領の目標と内容

(1) 我が国の歴史上の主な事象について、人物の働きや代表的な文化遺産を中心に遺跡や文化財、資料などを活用して調べ、歴史を学ぶ意味を考えるようにするとともに、自分たちの生活の歴史的背景、我が国の歴史や先人の働きについて理解と関心を深める。

ク 大日本帝国憲法の発布、日清・日露戦争、条約改正、科学の発展などについて調べ、我が国の国力が充実し国際的地位が向上したことが分かること。

### (2) 児童の実態（略）

### (3) 素材研究

#### ○片倉兼太郎（初代～3代目）

嘉永2年（1849）片倉市助、ひろ子の長男として諏訪郡川岸村三沢に誕生。〔次男：光治、長女：しゅう子、三男：五助（後に今井家の養子となる）、四男：佐一（2代目兼太郎）〕

明治6年（1873）父市助、本家前に十人座繰製糸開業。明治8年（1875）岡谷に中山社が創業。諏訪式座繰器が普及する。

明治11年（1878）32人繰りの洋式器械製糸工場垣外製糸場を新設する。同時に他の製糸家9人とで製糸共同出

荷組合の深沢社を設立。その後、明治12年（1879）初代兼太郎、尾澤金左右衛門、林倉太郎ら12名で共同出荷組合の開明社を組織。この結社により、仕入れや出荷が安定し共同販売が軌道に乗る。（明治13年、生糸輸出額、群馬県を抜き、長野県が全国1位に）

明治22年（1889）川岸村村長となる。その後、松本、中国の上海と事業を広げ、明治27年（1894）360釜の川岸製糸業を三全社とする。翌28年、片倉組創立、同年、東京支店を設置。のちに各地に工場を増設し、経営難の工場を買収する。

明治37年（1904）2月、日露戦争の軍資金として1万円を献納するなど協力。日露戦争のために中断されていた中央東線の布設工事を請願、工事費の一部を負担する。明治39年（1906）村立川岸小学校へ1万円を寄付。同年、中央東線岡谷・塩尻間開通（八王子・塩尻間開通）明治43年（1910）上田蚕糸専門学校設立。

大正6年（1917）初代兼太郎永眠。四男佐一が2代目兼太郎を襲名し、片倉組組長となる。この年、蚕糸業空前の好況となる。その後も着々と事業を拡大する。

大正12年（1923）9月、関東大震災が起こる。その際、東京市へ米二千俵、横浜市へ米一千俵を寄付する。昭和3年（1928）諏訪湖畔に片倉館、温泉浴場を竣工。

昭和5年（1930）3月、繭価大暴落、岡谷の大製紙工場が次々と倒産する。岡谷製糸業救済のために丸興製糸（株）を創立する。昭和7年（1932）副社長の今井五助が貴族院勅撰議員となる。昭和9年（1934）2代目兼太郎逝去。ニューヨーク出張所取締役片倉脩一を3代目兼太郎に襲名。昭和14年（1939）富岡製糸場、片倉佐越製糸と合併。3代目兼太郎貴族院多額納税議員になる。この年、第二次世界大戦始まる。



〔初代 片倉兼太郎〕

#### (4) 素材の教材化

調べ学習や調べてきたことを基に話し合うことに意欲を示す子どもたちではあるが、その時代の人々の立場に立って実感しつつ理解する学習や、郷土岡谷の出来事が、この時代の日本の動きに大きな影響を及ぼしてきたことへの気付きは十分ではない。

そこで、明治以降の産業の発展と関連付けて岡谷の製糸業の発展に着目させ、日清・日露戦争時から第一次世界大戦のころ、日本が獲得した外貨の多くが岡谷の生糸によるものだったという事実から、このころの日本全体の出来事と、岡谷の製糸業を関連付けて考えられるようにしていきたい。具体的には、片倉兼太郎を中心とする製糸家の苦労や努力と、その下で精一杯働いた女子工員の苦労や努力、このころの日本が、国力を向上させるために戦争という手段をとったところなどを追究の中に位置付ける。それによって、地元と日本全体の出来事という複数の事象を関連付けてとらえていく力を伸ばすことができるであろう。

「生糸が軍艦になった」という言葉のように、製糸業で獲得した外貨が戦争の資金になっていったわけであるが、そのとき製糸王片倉兼太郎は何をし、何を考えていたのかを追究していくことにより、国内情勢や諸外国との関係をつかむことができるだろう。そして、調査活動で得た知識をまとめていくことで、この時代は不平等条約を撤廃するため、また、列強諸国に追いつくために、政府も国民も国力の向上に向かっていくことを理解できるようにしたい。

岡谷の製糸業については、女工哀史にもあるように、悲しい一面も否めない。しかし、兼太郎も女子工員も懸命に働いたことが日本の国力向上につながったという事実を子どもたちが学べるようにしていきたい。子どもたちが習得した歴史的事実をもとに、当時の時代背景の中で思考・判断する学びの楽しさや喜び、充実感や満足感を味わえるようにしたい。



## 6 授業記録

### 【第1～4時】＜明治期における岡谷の製糸業の様子を調べる＞

○写真「岡谷の町の様子」（明治期 岡谷市街）

隆次：煙突がたくさんある。

由香：煙突がたくさんあるってことは、製紙工場がたくさんあるってことだと思う。

浩輔：まゆを煮るときに火を使うから、煙が出ているんだと思う。

T：「岡谷のすずめは黒かった」って言われていたんだよ。

拓真：それだけ岡谷は製糸業が盛んだったってことだと思う。

○岡谷の製糸業について知っていること

浩輔：女工さんは朝早くから夜遅くまで働いていた。

隆次：ヨーロッパの機械とかを使っていた。

**早知：片倉兼太郎さんが製糸業を盛んにした。**

浩輔：岡谷市内に昔、製糸会社だったところがある。今も残っている。（イルフの駐車場の横）

**早知：鶴峯公園のツツジは、片倉兼太郎さんが寄付して公園をつくった。**

隆次：諏訪に片倉館の千人風呂がある。今でも入れる。入ったことがある。

**【学習問題】 岡谷ではどうやって製糸業をやっていたのだろう**

○現在、日本でただ一社、昔ながらのやり方で糸をとっている宮坂製糸場に見学・体験に行こう。



【製糸業が盛んな頃の岡谷】



【宮坂製糸場見学の様子】

#### 〈宮坂製糸場見学の感想〉

初めて実際にやっている製糸場に行ったけど、女工の方たちが作業を黙々とやっていて、しかも手つきがものすごい速くてビックリした。できた糸とかを見ると、あの蚕の糸からすごいキレイな糸がとれていたのすごいいいと思いました。今は盛んじゃなくなった岡谷の製糸業だけど、今回行った宮坂製糸場を見たら、「まだ続いているんだなあ」と、ちょっと安心しました。岡谷の、このすばらしい製糸業を、これかも大切にしていきたいと思います。（早知）

**《考察》** 導入後、現在も昔ながらの糸取り（諏訪式繰糸器や上州式繰糸器）を行っている宮坂製糸場を見学しました。総合的な学習の時間の『岡谷探検』で、「岡谷の偉人」について調べることにした早知さんは、岡谷の製糸業や片倉兼太郎について、多少の知識がありました。見学後の感想に何度も表現されている「すごい」という言葉から、繭糸を集めて生糸ができていく様子を見た感動が伝わってきます。また、昔は盛んだったという岡谷の製糸業に関する興味や関心が湧いてきています。宮坂製糸場の見学・体験活動は、これから学んでいく製糸業の学習に対する期待感を膨らめるものとなりました。

## 【第7時】〈女工について調べた後の話し合いから学習問題の成立〉

隆次：優秀な女工さん、100円女工さんと、そうでない女工さんとの間にとっても差があったことが分かった。

亮介：結核などの病気になっても休めない。でも、がんばって稼ごうとするすごさを感じた。

**早知：一方的な条件で働かされていたのに、家族のために一生けんめい働いていたのは本当に偉いことだと思う。**

侑希：岡谷の製糸業はよいことばかりだと思っていたけど、女工さんについて調べてからはひどいことばかり。

T：兼太郎さんは、自分のことよりもまず第一にまわりのことを考える人だとみんな言ってたよね。

由香：確かに兼太郎さんは、自分のことよりもまわりのことを考える人だったと思うけど、片倉組でも女工さんに対して辛いことをしていたのならやっぱりひどいと思う。

**早知：兼太郎さんが直接ひどいことをしていたとは思えない。私は兼太郎さんを信じたい。**

拓真：まわりのことを考えていたのなら、女工さん、もっと楽になったでしょ。でも、兼太郎さんが悪いとも言い切れない。いいこともたくさんしてきているし、努力家だし。

浩輔：とにかく兼太郎さんは業界第一位の製糸家になったわけだからすごい。だから女工さんのことも考えていたと思うよ。

T：何人もの人が、「兼太郎さんが自分の家で始めた垣外製糸場、それから開明社を組織して、その数年後に業界第1位になるなんてすごい。不思議だと思った」って社会科日記に書いてあったけど、どうですか。

C全 「確かに不思議だなあ。」と思います。

**【学習問題】** なぜ兼太郎は世界一の製糸家になれたのだろうか。

### 〈女工について調べ、話し合った後の感想〉

今までは、岡谷ってすごいところだなあと思っていたんだけど、今日の授業で女工さんのことを調べたら、岡谷ってひどい！！と思いました。先生が持って来てくれた『千本のえんとつ』を読んだら、ますますそう思いました。会社の一方的な条件で女工さんを働かせて、長い間女工さんたちを苦しめて、ひどすぎます。あまりの苦しさに耐え切れず、諏訪湖に身を投げた女工さんたちが後を断たなかったのが何よりの証拠です。でも、私は、片倉さんは直接関係してはいないと信じています。片倉さんの人柄からして、「自分が優先！！」なんてことは絶対頭のないような人だから、そうでないことを祈っています。（早知）

**【考察】** 前時まで、岡谷の製糸業の繁栄に誇りを抱いていた早知さんですが、女工さんに関する事実直面することで、その気持ちが根底から揺さぶられました。「岡谷ってひどい！！」「ひどすぎます。」という表現からは、衝撃にも似た心情が伝わってきます。しかし、それまでに抱いた、「兼太郎は自分のことよりもまず第一にまわりのことを考えている人」という気持ちを簡単に捨てることはできません。兼太郎という人物像に対し、大きなズレが生じる中で、「片倉さんは直接関係してはいないと信じてます。」「そうでないこと（女工さんを苦しめていないこと）を祈っています。」と、兼太郎に限って女工さんを苦しめるようなことはなかったと信じたいという思いを抱いています。

## 【第8・9時】〈「なぜ兼太郎は世界一の製糸家になったのだろうか」予想と調査活動・まとめ〉

明太：豪農の長男だからもともとお金持ちで、そのお金で機械を買ったり、女工さんを雇ったりしたんだと思う。

**早知：2代目や3代目との協力と、女工さんたちのがんばりがあって、片倉は有名になったのだと思う。**

隆次：豪農の長男とはいっても、普通に家族が生活できるくらいのお金しか持っていなかったと思う。

浩輔：明治のこの時代、農家にはお金がない。いくら豪農といっても、そんなにお金持ちではないと思うよ。

○調査活動と調べた内容の確かめ（模造紙掲示板に、調べた項目を書き込んでいく）

- ①10人繰製糸開業～垣外製糸場開業～尾沢金左衛門と林倉太郎の3人で開明社を組織。
- ②今井五介は蚕種の製造。これによって品質が安定し、よい糸がたくさんとれるようになった。
- ③三代の兼太郎による継承。
- ④2代目兼太郎の襲名前に片倉倒産の危機を救った佐一の活躍。

- ⑤多くの女子工員のスカウト。
- ⑥1904年（明治37年）日露戦争の軍資金として、1万円を献納する。
- ⑦日本は生糸と引き替えにした軍艦や大砲で戦争を行った。（日清戦争，日露戦争，第一次世界大戦）
- ⑧1906年（明治39年）11月に，村立川岸小学校へ1万円を寄付。敷地買収，建築の監督指揮。
- ⑨1923年（大正12年）9月に関東大震災。東京市へ白米2,000俵，横浜市へ白米1,000俵を寄付。
- ⑩第一次世界大戦の戦後恐慌（大不況）が始まった大正9年，糸価は大暴落し，製糸業者は相次いで倒産していく。片倉はそれらを次々と吸収，合併し，さらに巨大な企業へと成長する。
- ⑪昭和3年に，片倉兼太郎（2代目）は，社員のために温泉を利用した保養施設片倉館を建てた。
- ⑫片倉家には家憲（家の憲法）がある。

<片倉家の家憲10ヶ条>

- 一 神仏を崇敬し祖先を尊重するの念を失うべからざる事
- 二 忠孝の道を忘るべからざる事
- 三 勤儉を旨とし，奢侈（しゃし=必要以上の贅沢）の風に化せざる事
- 四 家庭は質素に事業は進取的たるべき事
- 五 事業は国家的観念を本位とし併せて利己を忘れざる事
- 六 天職を全うし自然に来るべき報酬を享（う）くる事
- 七 常に摂生を怠るべからざる事
- 八 己に薄うして人に厚うする事
- 九 常に人の下風に立つ事
- 十 雇人を優遇し一家族を以て視る事

○調査結果を受けての話し合い

明太：垣外製糸場をつくったとき，1万円もの赤字が出た。でもそのとき，一家で協力してその危機を乗り切った。だから，家族の強い協力があって世界一になっていったと思う。

浩輔：開明社をつくるときも結社をしてまわりの人たちと協力した。関東大震災のときの寄付による信頼もある。

**早知：製糸家としての技術や経営力もあったと思う。けど，一番は自分の損得は考えず人のことを第一にすると**  
**いう考えの人だったからみんなからの信頼も得られるわけだし，世界一になっていったんだと思う。**

侑希：明治14年に糸価が暴落したんだけど，あとで2代目兼太郎になる弟の佐一が銀行から融資を取り付けた。これが家族の協力だと思う。銀行から融資を取り付けるってことは信頼されているから貸してもらえる。

拓真：保養施設を建てたり日露戦争の軍資金を出したりして，みんなから信頼を得たと思います。

遥香：女性をスカウトして女工さんを増やすこともしていた。あと，片倉館など，女工さんのためのこともやっているのだから，女工さんたちからの信頼も集めていたんじゃないかな。

〈「なぜ兼太郎は世界一の製糸家になったのだろうか」に対する自分なりの考え〉

製糸家としての実力もちろんあったけど，やっぱり，他人のことを考えているからだと思いました。何でも自分優先で，他のところで何か困ったことがあったって他人事みたいな人だったら，いくら製糸家としての技術とか経営力があっても，気持ちが汚くて周りの人は寄っていかないし，信用とかもなくなっちゃって世界一なんかかなれないと思います。それから，片倉家の家憲なんかもあって，しかも内容が，「国のためのことを中心にする」だとか「自分のことは後まわしにして人の事を考える」とか，常に人のことを考えなさい，みたいな内容だから，片倉家自体がいい気持ちをもった家なんだなあと考えた。（早知）

**《考察》** 「なぜ兼太郎は世界一の製糸家になれたのか」という学習問題に対する予想で，早知さんは，2代目や3代目，片倉家の家族の協力の他に，女工さんの功勞を取り上げました。製糸業の繁栄が，製糸家の努力だけではなく，女工さんの苦勞や努力があったからこそであるという早知さんの気持ちがうかがえます。その後，より詳しく兼太郎や片倉家について調べていく中で，兼太郎が成した功績の大きさや，自分の利益だけに固執していない人柄や生き方に思いを寄せています。そして，兼太郎が世界一の製糸家になった理由を，経営力や技術力に加え，人間性の豊かさによって人々から信用されていたからととらえました。

## 【第10・11時】 <当時の日本や世界の様子調べから新たな学習問題へ>

○このころの日本全体の出来事について調べ、調べたことを発表しながら歴史的事実を確かめていく。

不平等条約の改正 → 日清・日露戦争 → 韓国併合 → 第一次世界大戦 → 足尾鋳山鋳毒事件  
→ 労働運動・農民運動 → 部落解放運動 → 普通選挙運動 → 女性解放運動 → 関東大震災

○その後の話し合い

明太：やっぱり兼太郎さんは国のことを考えていたから軍資金一万円を払ったと思う。日本は戦争をやっている、勝てば国のためになるけど、負けると大変なことになる。

京子：生糸をたくさん輸出して国の利益になれば、信頼を得ることができる。

亮介：それに関東大震災のときも米を寄付している。これも人々からの信頼を集めたと思う。

祐司：軍資金も米もそうだけど、片倉家の家憲にも国のために尽くすってある。だから片倉さんはいろいろな人からの信頼を集めて世界一の製糸家になっていったと思う。

一也：やっぱり日露戦争のときの軍資金が一番信頼につながるんじゃないかな。

**早知：でも、生糸と引き替えに軍艦や大砲とか、戦争のために軍資金とか、使い道が間違っていると思う。**

侑希：軍資金を出しても戦争に勝てば賠償金として戻ってくるから、使い道は間違っていないと思う。

【学習問題】 片倉兼太郎は、日露戦争の軍資金を出さなかった方がよかったのではないかな。

《考察》 「なぜ兼太郎は世界一の製糸家になれたのか」を考えていくためには、そのころの日本や世界の動きが分からなければ深まっていけないと感じ始めた子どもたちは、それらを調べる学習に入っていました。学習問題に対する話し合いでは、生糸がもたらす国益や兼太郎が献納した日露戦争の軍資金に子どもたちは着目していきました。この軍資金により国からの信頼を得た兼太郎という意見に対し、「そんなの使い道が間違っていると思う」と反論したのが早知さんでした。自分の損得は考えず、人のことを第一に考えた兼太郎が、戦争に手を貸したことに納得できなかったのでしょう。

## 【第12・13時】 <「片倉兼太郎は日露戦争の軍資金を出さなかった方がよかったのではないかな」についての話し合い>

**早知：戦争にお金を出すということは、他国の兵士を殺せということだと思う。それは今まで言ってきた信頼ということには全くつながらない。もし、お金を出すなら飢えや生活に苦しんでいる人に出すべき。そして、戦争をやめる努力をするべきだと思う。**

浩輔：苦しい人を助けたとしても、軍資金を出さなければ戦争に負けてさらに日本は苦しくなる。それに、国はもう戦争をする方向で動いている。片倉さんは、国に戦争をやめさせるような権力はもっていない。

隆次：もし戦争に負けてしまったら、ロシアが日本を植民地にする。この方が日本国民にとっては苦しい生活になるんだから。

悠梨：何で、戦争に負けたら植民地になるって分かるんですか。

隆次：植民地になるって決まっているわけではないけど、そうなる可能性が高いってことだと思う。

T：日清戦争後の中国や朝鮮がどんな道を歩んだか考えてみて。それを考えると、もし日本が負けたら植民地になっていた可能性はものすごく高いよね。

彩華：戦争に勝って賠償金をもらっても、それは国や政府のものになって貧しい人の生活は変わらないと思う。

**早知：戦争を起こそうって考えの政府なんだから、国民のために思って賠償金を使うかなんて信用できない。**

幹恵：疑問なんだけど、そもそも政府は戦争がいいと思っていたんですか。

浩輔：政府は、日本を守るために戦争をやると考えたでしょ。日本が植民地にされたら、それが一番大変なことなんだから。

T：兼太郎さんはどうなのかな。

隆次：兼太郎さんは、戦争のためにお金を使おうと思っていたかってこと？

T：そうだね。**兼太郎さんがお金を使おうと思った目的は何か考えてみよう。**

遥香：兼太郎さんは、国のためにお金を使おうと思っていた。国が、日本が強くなるために戦争をやると決めてしまったので、結果的に戦争のためにお金を使ったってことになったと思う。

浩輔：片倉さんは、戦争のためにお金を使ったり使われたりするのはいやだと思っていた。でも、戦争に負けて

国民の生活が苦しくならないように戦争のためにお金を使ったんだと思う。

俊彦：本当は兼太郎さんは戦争のために製糸業をやっていたわけではない。でも、植民地にならないように、戦争のためにお金を使うしかなかった。そういう時代だった。

○資料提示

鉄道中央東線の布設工事が、日露戦役に際し中止せられし時、率先有志の諸氏と相謀り、費用出途方法を講じ其の筋に請願し、工事費の若干を負担して、其工事を完成せしめたることあり。

T：日露戦争の時、国に一万円の軍資金を献納すると同時に、戦争のために中断していた鉄道開通に力を注いだんだね。この事実から何を感じましたか。

**早知：岡谷の産業の発展のためにお金を使っていたんだ。**

侑希：戦争のためではなく、岡谷のこと、諏訪や地元の地域のことを考えていた。

隆次：岡谷の人々のことや、岡谷の産業のこと、特に製糸業のことを考えているんだ。

浩輔：兼太郎さんは戦争のためではなく、製糸業の発展のためや、国民のために尽くしたかったんだと思う。

T：みんなが、ひどい待遇を受けてあまりにもかわいそうだと言っていた女工さんはどうだったの。

隆次：女工さんも、みんな、国が豊かになるように一生けんめい頑張っていたと思う。

修：国を豊かにするために、政府も、兼太郎さんも、女工さんたちも、日本中のみんなが努力していたと思う。

〈授業後の早知さんの感想〉

私は、片倉さんが軍資金を出したのは間違っていると思っていたけど、今日の討論で、私と違う意見の人は、そういう考えだったんだあと感心しました。本当のことはその時代の人じゃなきゃ分からないけど、今日みたいに、自分の意見で検討するのもいいなあと思いました。戦争の中で、岡谷の産業の発展を考えた兼太郎さんはすごいと思いました。

**《考察》** 軍資金を出さなかった方がよかったと考えた早知さんは、戦争にお金を使うことは決して信頼にはつながらないと主張しました。しかし、「兼太郎がお金を使おうと思った目的は何か考えてみよう」という学習課題について考えていく中で、日露戦争の時、国に一万円の軍資金を献納すると同時に、戦争のために中断していた鉄道開通に力を注いだという事実に触れた早知さんは、「兼太郎は、岡谷の製糸業のためにお金を使っていたんだ」という考えにたどり着きました。授業後の感想からも、自分と違う考えに納得し、戦争の中で岡谷の産業の発展を考えていた兼太郎に共感する様子が見えられました。

〈この単元を終えての早知さんの感想〉

私は、この学習をしてきて、いろんなことを学んだけど、片倉さんが日露戦争の中、岡谷の製糸業の発展を願って鉄道を開通させたというところが一番印象に残ったし、すごいと思いました。それに私は、岡谷がいかに製糸業で有名だったかというのを、岡谷に住みながらも分かっていませんでした。それも、この学習をしたら、片倉さんはじめ、2代目や3代目、女工さんの協力があった岡谷が有名になったんだということが分かりました。戦争をしてしまうような日本だったけど、片倉さんは家憲にそむくことなく、国のことを考えていたのは、本当にすごいことだと思いました。



〔蚕糸博物館見学の様子〕

**《考察》** 早知さんは、製糸王国岡谷と製糸王片倉兼太郎について考えることから、この時代の日本や世界の動きを学んでいきました。そして、追究を進めていく度に新たな事実に出会い、疑問が生じ、考えが揺さぶられていく中で、製糸家も女工も、この時代の誰もが国力向上のために苦難を乗り越え、努力を重ねていった姿に思いを寄せていきました。早知さんが何となく知っていた岡谷の製糸業は、この学習により、ふるさと岡谷の歴史を物語る製糸業へと変わっていったことでしょう。



## 5 学年 単元名『わたしたちの生活と工業』

➡ 「指導要領解説 P.62~65」「県手引書 P.154~161」

### 小単元名『超精密部品の命 熟練職人が支える金型作り』（20時間）

- 3・4年生で身近な地域の学習をしてきた子どもたちは5年生になると日本全体に目を向けた内容を学習します。「我が国の工業生産」では新たに「価格や費用」の取り扱いが加わりました。「製造の過程で様々な費用がかかること原材料の確保や製品の輸送のための費用がかかることやそれらの費用が価格に影響を与えていること」などを取り上げます。
- 社会科の学習は単元構想の練り上げが重要です。単元展開が筋の通ったものになれば指導案の大枠は完成したと言えるでしょう。その際教師がもっとも考えなければならないことが「子どもの意識の流れを大切にすること」です。事実認識から思考・判断まで子どもたちが「どうしてだろう?」「なぜだろう?」と社会的事象に対する疑問やズレを感じてそれを解決していくことができるような単元構想にしたいものです。
- 調査活動の方法は様々ですがなかでも社会的事象やそこに関わる人々に寄り添うことができる調査活動は「見学・体験活動」です。見学・体験活動を盛り込んだ学習は子どもたちの目の色を変え思い入れの深いものになるでしょう。
- 工業生産の学習と言っても製品の生産について学習しただけでは「共感」には至りません。子どもたちが社会科授業にのめり込むにはそこで働く人々の工夫や努力に迫っていくことが大切です。小学校の社会科は「人」です。人々の工夫や努力を通してその思いに打たれるような学習体験を積み重ねていけるように支援しましょう。
- 全教科の中でもっとも教材研究に手間のかかる教科が社会科かもしれません。確かに教材研究は大変ですが教師が教材研究を重ねた分だけ子どもたちの学習活動が充実したものになります。教師が惚れ込んで教材研究をした熱い思いは子どもたちに響きます。以下の事例は調査先の社長さんに嫌がられるくらい教師が何度も足を運び教材研究を行って取り組んだ事例です。

#### 1 小単元の設定にあたって

##### (1) 子どもたちの意識のつながり

子どもたちは、5年生に入って日本の農業、水産業について学習してきた。岡谷市の農業、水産業について調べ考える中で、岡谷市は、地形・気候・環境の変化などの理由から農業も水産業も盛んに行っておらず他の地域に頼っていることを知った。また、そのような諸条件の中で工夫や努力をして米作りをしているKさんや様々な水産業の問題をかかえながら「うなぎの町岡谷」の各お店に送られてくるうなぎを養殖している愛知県一色町のEさんの工夫や努力にふれてきた。このように農業も水産業もあまり盛んではない岡谷。「では岡谷の特徴は何か」と考えた子どもたちは「蚕が盛んだったって聞いたことあるよ。」と言ったT児の声をきっかけにして製糸工業から精密工業へ変わっていったことや「東洋のスイス」と呼ばれ外国から視察団が来るほどの「工業都市」であることを知り岡谷市で作っている工業製品について興味を抱いていった。そして私たちの生活を支えている様々な工業製品や岡谷市の工業関係の会社について調べていくうちに、「工業都市」でありながら日本の工業地帯や地域に位置づけられていないことや、完成品ではなく小さい部品をつくらせている会社が多いこと、地形や気候を利用して物づくりを行っていることなど岡谷市の工業の特徴について気づいていった。グループ毎に調べた近所の工場調査で、もってきた小さな部品を見た子どもたちは、「どうやってこういう部品を作るのだろう。」と疑問をもち、子どもたちが見つけた工場の一つである「OS工場」に見学へ行くことになった。

##### (2) OS工場を教材化することの価値

子どもたちは、超精密を売りにしている「OS工場」で作る0.01mm~0.5mmの部品を見て、「どうやってこんなに小さいものを作るのか」「こんな小さい部品が何に使われるのか」と疑問をもち興味をもって調べ始めるだろう。また様々な製品を作るためには正確な金型作りが命であること、その金型作りは熟練職人の技が必要であるという事実を知るであろう。金型作りに焦点をあてて調べていく中で、その金型作りに関わっている人々の苦労や工夫、課題、部品を注文してくる大手会社との関係を理解していくことが期待できる。

そして、それらの様々な苦労や工夫が、OS工場のモットーである「良質、低価格、早い納品」につながっていること、『熟練の職人技を生かした金型作り』と『大量生産の部品作り』の両方を行うことが、たくさんのライバル会社があるレベルの高い日本の製造業界で生き残り、複数の大手企業からも注文がくるほどの工場になっていることを考えていくことができるであろう。

## 2 小単元展開の概要 ( ) …時数

学習問題	○学習活動 と ●子どもの意識
<p>①工業都市岡谷ではどんなものを作っているのだろう。(7)</p>	<p>○家の周りの工業関係会社を調べてみよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・何をどのように作っているか調査（電話・ネット・訪問）・工場マップ作り</li> <li>・OS工業の特徴を考え合う。(全国の工業地帯地域との比較)</li> </ul> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・工場が固まっていなくてバラバラしている。 →広くて平らな土地が少ないからかな。</li> <li>・いろいろな種類の工場があって協力し合っている。</li> <li>・従業員も少なく小さい会社が多い。 →大きなものを作る場所がない。</li> <li>・部品など小さいものを作っている。 →運送しやすい。(岡谷JCがある。)</li> </ul> </div> <p>●（訪問でもらってきた小さな部品を見て）こんな小さい部品をどうやって作るのだろう。実際に見てみたいな。</p> <p>○超精密部品を作っているOS工場に見学に行こう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・わかったこと見てきたことを確認しながら思ったこと考えたことを語り合おう。</li> </ul> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・農業や水産業よりもお金がかかりそう。</li> <li>・顕微鏡で見てやっとわかるくらいの0.01～0.5mmの部品を作るなんてすごいなあ。</li> <li>・いろいろな工夫がしてあるんだな（作業しやすく持ちやすくなど）</li> <li>・たくさんの機械が動いていてびっくり。高そうな機械だな。</li> <li>・全国から注文が来ていてすごい。交通機関が止まってしまったら大変。</li> <li>・職人がいなくなったら金型は作れないからあとつぎを作らなきゃだな。</li> <li>・最後は職人技で作る高価な金型はすごく貴重なんだろうな。その金型を売ればもうかるんじゃないのかな。売ればいいのに…売ってないんだ。</li> <li>・もったいないよ。自分でもっていれば何度も使えるじゃん。</li> <li>・OS工業の秘密がばれてしまうと困るんじゃないかな。</li> </ul> </div>
<p>②金型は高く売れるんだしそれを売ってもうけている会社もあるんだからOS工場は金型自身を売ればいいんじゃないか。(6)</p>	<p>○学習問題について各自の予想を交流し合う。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; width: 45%;"> <p style="text-align: center;">＜売ればいい＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・もうけが5%で少ないから金型を売れば一気に金が入る。</li> <li>・お金が入ってくると今は35人の小さい会社が大きくなっていい。</li> <li>・いろいろな会社にOS工場の金型が広まってまた改良を重ねていってもっといい金型ができるようになるよ。</li> <li>・いい金型がない会社は助かる。</li> <li>・真似されるのが心配だったらOS工場と協力している会社にだけ売ればいいんじゃない。</li> </ul> <p>●協力会社って存在するのかな？どのくらいの数があるのかな？どういう関係なのかな？</p> </div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; width: 45%;"> <p style="text-align: center;">＜売らないほうがいい＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・金型を売ってしまえば部品を注文してきた会社に部品がいくのがおそくなって信頼が失われてしまう。そしてもうけが減る。</li> <li>・OS工場の技術が真似されて売った会社に部品の注文が行ってしまう。</li> <li>・もっとすごい金型を作ってもうけてしまったらずるい。</li> <li>・他の会社のために金型を作っていたら1～2月も作るのにかかるんだからすごい時間がかかってしまうよ。</li> </ul> </div> </div>





- OS工場に携帯の部品を注文している大手企業S社に聞いてみよう。
- 携帯を分解していくつの部品で出来ているか調べてみよう。(体験活動)
  - ・1つの携帯に関わる工場は600社 約100日で携帯が完成

○学習問題について話し合う。

＜売ればいい＞	＜売らないほうがいい＞
<ul style="list-style-type: none"> <li>・金型職人がいないところならいい。とにかくお金がもうかるからいい。</li> <li>・ぼくの親戚のおじさんは精密工場に勤めているんだけど金型は作ってないから買っているんだって。だから金型だけを買う会社があるんだからOS工場もそうすればいい。</li> <li>・いい金型がない会社は助かる。</li> <li>・真似されるのが心配だったらOS工場と協力している会社にだけ売ればいいんじゃない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・70個くらいの部品があるんだからたくさん会社を回って携帯ができるんだからいちいち作っていたら時間がかかる。</li> <li>・1つの金型を作るのは1、2ヶ月もかかるしOS工場には職人が5人しかいないんだから金型まで売っていたら大変になる。</li> <li>・分解したらみんな大きさも違うし形も違う部品の注文がこなくなってしまう。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>●金型を売っている会社があるのになぜOS工場は売らないのかな。</li> <li>●5人の職人の中で超熟練職人は2人だけなんだな。すごい。どんな技なんだろう。</li> </ul>	

③金型を売らないOS工場の職人技はどのようなものだろう。  
(4)



- もう一度OS工場へ行って見たり聞いたりしてこよう。
- 分かったこと見てきたことを確認しながら思ったこと考えたことを語り合おう。

- ・顕微鏡と砥石だけを使って、職人のカンだけで0.001mmを削っていく。削りすぎたらすべてやり直し。ほとんど失敗はない。人数が足りないから大変だろうな。
- ・すごい金型を作るには手で調節することが大切なんだ。集中力がいるだろうな。完全に体にしみついてないとだめだな。米作りのときのKさんも「農薬の量は長年のカン」って言うんだけどやっぱりそういうカンは、どこの世界でもすごいな。しかも、上下ぴったり合わせるのもカンでやるからすごい。
- ・職人技の獲得には10~20年以上かかる。後継には、仕事をしながら教えていくから大変。
- ・Mさんのような熟練職人はこれから急には増えていかないだろうな。職人への道は長い。そんなに続けてやっているってことは、よっぽど金型作りが好きなんだな。
- ・あとつぎの育成は、仕事をしながら教えている。やりづらだろうな大変そう。
- ・現在金型作りは5人でぎりぎり。しかも最近は納品が早くなってきているので2週間で完成させなければならないこともあって残業が増えている。忙しいし簡単には職人は増えていかない。もっと増えるといいのにな。
- ・金型を作っても部品の注文がくるとは限らない。部品をたくさん作って利益をあげている。少ない職人でやっているんだから、時間を有効に使わないといけなないな。
- ・1分間で400個の部品を作るプレス機短い時間でたくさんできて楽だな。
- ・指が1本なかったNさん超熟練職人の一人なのに、金型を作るとき不便だろうな。けがしても作り続けていてすごいな。
- ・部品270種以上金型はそれ以上作るってことだからすごい大変なことだな。
- 金型を売るとOS工場の金型作りの技術が出てしまうって言うんだけど 長年の研究で得た技術(超精密・9個同時に部品ができる金型)が出ていっても、伝達するのが難しく20年以上もかかる職人技は、簡単には真似されないんじゃないかな。
- 職人がいる工場に売ってしまえば同じものやそれ以上のものが作れてしまうよ。
- じゃあ、金型専門に売っている会社は、技術が出て行くことは困らないのかな。
- OS工場は部品も作っているからだね。
- なぜOS工場は、大変なのに金型と部品の両方を作っているんだろう。





④なぜOS工場は職人さんの人数が少なく大変なのに金型と部品の両方を作っているのだろう。(2) 本時 ●OS工場は、金型を生かして超精密部品を大量生産し、メーカーのニーズに応えようとしているんだな。					
⑤長年の技術と職人技を合わせた金型を生かして部品を作っていることは分かったけど最新の機械を入れれば職人さんの負担は軽くなるのだからOS工場も最新の機械を使っ て金型を作ればいいんじゃないか。 (1)	○学習問題について話し合う。 ● OS工場は、金型を作る最新の機械を使っていないんだ。なぜだろう。  <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; text-align: center;">           &lt;最新の機械を使えばいい&gt;         </td> <td style="width: 50%; text-align: center;">           &lt;使わない方がいい&gt;         </td> </tr> <tr> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>・最新の機械を使えば、熟練職人が2人しかいないんだから、楽になるよ。</li> <li>・モットーの1つである『早い納品』がもっと早くできるんじゃないかな。</li> <li>・後継を作るのに時間がかかるから、最新の機械があれば、それを心配する必要がないんじゃないかな。</li> </ul> </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>・職人が必要じゃなくなっちゃうじゃん。</li> <li>・最新の機械を買ったら、その分部品が高くなっちゃって、『低価格』にならなくなるよ。</li> <li>・OS工場は、部品を作る会社で、部品を作るためのすごいプレス機があるんだから金型を作る機械にはお金をかけたくないんじゃないかな。</li> </ul> </td> </tr> </table> ●職人技こそが3つモットーを支えているんだよ。そこには自信と誇りがある。だから信頼される。MさんとNさんが世界に認められているってことなんだな。すごいぞ。岡谷市にそんな人がいたなんてうれしいな。 ●だからこそ益々職人技を若い人に受け継いでもらいたいな。	<最新の機械を使えばいい>	<使わない方がいい>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最新の機械を使えば、熟練職人が2人しかいないんだから、楽になるよ。</li> <li>・モットーの1つである『早い納品』がもっと早くできるんじゃないかな。</li> <li>・後継を作るのに時間がかかるから、最新の機械があれば、それを心配する必要がないんじゃないかな。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・職人が必要じゃなくなっちゃうじゃん。</li> <li>・最新の機械を買ったら、その分部品が高くなっちゃって、『低価格』にならなくなるよ。</li> <li>・OS工場は、部品を作る会社で、部品を作るためのすごいプレス機があるんだから金型を作る機械にはお金をかけたくないんじゃないかな。</li> </ul>
<最新の機械を使えばいい>	<使わない方がいい>				
<ul style="list-style-type: none"> <li>・最新の機械を使えば、熟練職人が2人しかいないんだから、楽になるよ。</li> <li>・モットーの1つである『早い納品』がもっと早くできるんじゃないかな。</li> <li>・後継を作るのに時間がかかるから、最新の機械があれば、それを心配する必要がないんじゃないかな。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・職人が必要じゃなくなっちゃうじゃん。</li> <li>・最新の機械を買ったら、その分部品が高くなっちゃって、『低価格』にならなくなるよ。</li> <li>・OS工場は、部品を作る会社で、部品を作るためのすごいプレス機があるんだから金型を作る機械にはお金をかけたくないんじゃないかな。</li> </ul>				

### 3 本時案

(1) 小単元名『超精密部品の命 熟練職人が支える金型作り』

(2) 本時の主眼

OS工場はなぜ金型と部品の両方を作っているのか考える場面でOS工業のモットー（高品質・低価格・早い納品）と大手メーカーがOS工業を選んだ理由が一致していることや最新の機械を使わず職人技と組み合わせて金型を作っている事実を関連させて話し合うことを通して、OS工業は、長年の研究の成果で得た技術と長年の経験から身につけた熟練職人技が合わさってできた金型を生かして、超精密部品を大量生産し、メーカーのニーズに応えようとしていることを理解することができる。

(3) 学習の展開

過程	学習活動	予想される子どもの動き	時間	指導と評価
OS工業は、がんばって研究してきた技術と20年以上のやり続	1. 学習問題について話し合う。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <b>【学習問題】</b> OS工場は、職人さんの人数が少なく大変なのに、なぜ金型と部品の両方を作っているのだろうか。         </div> <p>○ OS工場は、がんばって研究してきた技術と20年以上やり続けて身につけた職人技の両方をつまんだ金型でいい部品を作ろうと頑張っているんだな。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・金型を買うより自分で作っていた方がお金がかからなくていい。</li> <li>・金型作りは5人でぎりぎりだって言っていたから金型専門会社になる余裕はないんじゃないかな。</li> <li>・熟練職人のあとつぎはすぐには作れないから、部品も作っていかないとやっていけないんだ</li> </ul>	15	○学習問題について話し合う場を設け、今までみんな考えを交流させてきたことや調査・見学により分かった事実とつなげて考えられるように支援する。 ・「職人の人数の少なさ」に注目している子を第1発言者として指名しまずは仕事の大変さに着目して

けて身につけた職人技の両方がつまった金型でいい部品を作ろうと頑張っているんだな。3つのモットーにもっとヒントがありそうだな。

OS工場は、がんばって研究してきた技術と20年以上やり続けた職人技の両方がつまった金型でいい部品を作ろうと頑張っているんだな。

と思う。  
 ・長年の研究の結果である技術が出るから金型でもうけることはできないなら部品でもうけるしかないと思う。  
 ・すごい金型さえ作ってしまえば、後は1分間に400個も一度に作れるプレス機があるから、いい部品がどんどんできるよね。  
 ・自分のところで金型を作って、すぐ部品を作れば、早くメーカーに届くよ。  
 ・3つのモットーは、すべてメーカーの希望に合うようなものだな。OS工業はメーカーのことをよく考えているんだな。金型と部品の両方を作っているヒントがありそうだ。

考え合えるようにする。  
 ・OS工業の3つのモットーに関わる考えが出始めたら資料（OS工場の3つのモットー）を提示し金型と部品の両方を作っていることと3つのモットーを関連させて考えていくようにする。

2. 3つのモットーとつなげながら学習問題について話し合う。

【学習課題】OS工場の3つのモットーと関連させて考えよう。

○3つのモットーのためには、金型と部品に両方を作ることが大事なんだな。  
 ・0.0001mmの調節をしてまで正確な金型を作ることとは部品の品質がよくなるってことなんだな。  
 ・残業を増やしてまで2週間で金型を作ることもあるって言ってたから、メーカーは早く部品がほしいんだな。  
 ・他の会社に作ってもらっていたら、本当にいい品質か分からないもんね。  
 ・超精密部品を作るには、正確な金型を作らないとできない。そのために0.0001mmを削る職人技がすごく大切なんだな。  
 ・他の会社の作った金型だと信頼できないし、もしいい部品ができなかったらまたやり直して手間もかかるんじゃないかな。  
 ・金型を自分で作るから、安くできるんじゃないかな。他で買っていたら高くなってしまいうよ。  
 ・自慢の金型にお金をかけないかわりに部品の価格を下げて、メーカーの希望に応えようとしているんだな。  
 ・自分のもうけが減ることを考えるのではなくて、まずメーカーのために安くしているなんてすごいな。  
 ・だから遠くから注文が来るくらい信頼されているんだね。  
 ・自慢の金型を一番高くしたいだろうにメーカーは部品がほしいから、メーカーの希望に応えているんだな。  
 ・低価格にすればメーカーも喜ぶけど、OS工場は大量生産できるんだから、もうけにはつながっていくからいいんだな  
 ・メーカーの希望に応えることができると、OS工場への信頼につながってくるからいっぱい注文がくるようになって、OS工場にとってもいいんだな。  
 ・3つのモットーのために部品と金型の両方を作っているんだな。

20

○3つのモットーとつなげながら考え合う場を設け、金型と部品の両方を作っている理由がメーカーのニーズに応えるためであることに気づくように支援していく。  
 ・高品質な超精密部品と熟練職人技の関係を明確にしていく。  
 ・「熟練職人技の意味」を再認識し「低価格」に注目した意見が出たら資料①を提示する。

【資料①】最新の機械を使わず職人技と組み合わせることで金型を作るという事実

・3つのモットーはメーカーのニーズに応えるためのもので、それが金型と部品の両方を作る理由につながっていることが分かってきたら資料②を提示する。

【資料②】OS工場のモットーと大手メーカーがOS工場を選んだ理由が一致していること（大手メーカーからの返信メール）

	<p>3. OS工場について、今思っていることを学習カードに記入する。</p> <p>○メーカーの希望につながるモットーのために、金型と部品の両方を作りながらいろいろな工夫や努力をしてがんばっている会社なんだな。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自慢の金型のコストを下げるなんて悲しいだろうな。</li> <li>・お客さんは部品がほしいから、その注文に応えるために、一生懸命考えて工夫しているんだな。</li> <li>・すごい技術と職人技を持っているOS工場はすごいな。こんなすごい会社が岡谷市にあってうれしいな。</li> <li>・小さい会社でも、こうやって工夫をしているからびっくりした。</li> <li>・だから大阪とか遠くから注文が来るんだな。</li> <li>・長年やり続けて得た技術と職人技はすごいもの。やり続けることが大事なんだな。</li> <li>・それでも最新の機械を導入すれば職人さんの負担は軽くなるんじゃないかなあ。</li> </ul>	10	<p>○今感じていることを学習カードに記入しこの時間の学習内容を振り返るようにする。</p> <p>-----</p> <p>長年の研究の成果で得た技術と経験から身につけた熟練技が合わさってできた金型を生かしてメーカーのニーズに応えようとしていることが分かったか。</p> <p>発言の様子や吹き学習カードに記入してある内容からとらえる。</p> <p>-----</p>
--	--	----	--

#### 4 実際の授業から

資料②を提示し、OS工場の3つのモットーが大手メーカーに受け入れられている事実を知って心から喜び、OS工業を誇りに感じていった子どもたち

<p>&lt;資料② 大手メーカーからの返信メール&gt;</p>	
<p>&lt;質問1&gt;</p>	<p>なぜ大阪にある貴社がわざわざ長野県にまで部品を注文するのか。</p>
<p>&lt;回答&gt;</p>	<p>現在の産業は世界的な視点で動いています。当社においても同様に部品一つとっても日本はもとより世界の魅力あるメーカー様と取引させて頂いております。</p>
<p>&lt;質問2&gt;</p>	<p>近くの阪神工業地帯には超精密部品を作っている会社はないのか。</p>
<p>&lt;回答&gt;</p>	<p>阪神工業地帯にも同様の部品を作られている会社はありますが、魅力あるメーカーであれば地理（距離）的な条件は問題ではございません。</p>
<p>&lt;質問3&gt;</p>	<p>OS工場に何か魅力があるのか。</p>
<p>&lt;回答&gt;</p>	<p>OS工業様の部品は品質もよく納期も早く低価格であり総合的に見て優秀であると判断し発注しております。</p>

<p>&lt;学習カードより&gt;</p>
<p>◆OS工場は、たくさんある世界の会社の中から選ばれていてすごい。しかも、こんなに小さい会社だってことの方がもっとすごい！！OS工場の大事にしていることがお客さんに分かってもらっているなんてむずかしいことなのにすごい。それにお客さんに「優秀」なんて言われるなんてすごく信頼されているし、特別だと思われているってことだからすごい。OS工場はどう考えてもすごすぎる！！</p>
<p>◆OS工場が世界の中で選ばれたってことは、OS工場働いている人たちが大事にしていることがしっかり全部できていてことだからすごくうれしく思っているだろうな。</p>
<p>◆OS工場は、お客さんの信頼を大事にしているし職人技もあるからもうかっているのかな。</p>

○子どもたちは、資料の「返信メール」を読みながら、拍手をする子、「お～」と歓声を挙げる子、「すごい！」と感嘆する子など、様々な反応を見せた。今まで友だちとともに学習問題について追究し、2回の見学で熟練職人のMさんとNさんと修行中のYさんの苦労を知り、職人技のすごさに触れてきた積み重ねがあるからこそ、心を動かし、OS工場のすばらしさをより深く感じる事ができたのではないかと。自分たちの住んでいる岡谷は農業も水産業もあまり盛んではないと学習してきた子どもたちが日本の工業との関連の中で今度は胸をはって誇れる学習になったのではないかと。

単元名 「火災からみんなを守れ」

【内容(4)ア イ】

地域社会における火災の防止について、関係諸機関として消防署の他に消防団に着目させ、自分の地域にとっての消防団の重要性に目を向けるようにすることを通して、人々の安全を守るために、関係機関がどのような働きをしているのかを考えるようにした事例。

単元展開については、消防署の数や中心司令室からの連絡系統の違いなどにより、三つの展開例を示した。

### 1 単元設定の理由（略）

### 2 単元の目標

#### (1) 主目標

消防署や消防団の訓練などの見学、警察署や電力会社などへの調査を通して、火災発生時は近隣の消防署だけではなく警察や電力会社、ガス会社、消防団などが駆けつけることを知り、地域の様々な機関や人々が協力するとともに、関係の諸機関相互が連携して未然の防止と緊急時の対処を行い、火災から私たちを守るための工夫や努力をしていることが分かる。

#### (2) 具体目標（評価規準）（略）

### 3 単元の展開

#### (1) 展開例① <消防署が遠く、数が少ない地域の場合>（下伊那などの山間僻地）

学習問題	学習内容 学習活動	指導	時	資料
1 119番に連絡したらどこにつながるのだろう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・火災時、どこに電話をするか考える。</li> <li>・119番に電話をしたらどこにつながるかを予想し、話し合う。</li> <li>・消防署ではなく、通信司令室につながることに疑問をもつ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「消防署につながる」という子どもの考えと、通信司令室につながる事実とのずれから、その背景・要因を追究する学習問題を設定する。</li> </ul>	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・携帯電話</li> </ul>
2 消防署に直接連絡が入った方がすぐに出勤できるのに、なぜ通信司	<ul style="list-style-type: none"> <li>・消防署を中心に、警察、電力会社、ガス会社、消防団などの関係機関が相互に連携して、火災が発生したときには一刻を争って対処していることを調べる。</li> <li>・自分の地域には消防署が少ないので、</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関係諸機関の一つとして消防団に着目させ、自分の地域にとっての重要性に目を向けるようにする。</li> </ul>	2 3 4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・近隣の消防署（調査）</li> <li>・火災が起きたときの連絡体制</li> </ul>

令室につながるのだろう。	消防団に早く連絡する必要があることや、消防団は、消防署と協力して重要な働きをしていることを知る。		5	・消防署数
3 なぜ、電力会社やガス会社、消防団は火災の時に、すぐに行動できるのだろう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・諸機関が普段から施設・設備の整備や点検，訓練，広報活動などに取り組み，火災の予防や発生時に対する備えをしていることを調べる。</li> <li>・消防団の入団人数が年々減少していることを知り，その中で訓練がどのように行われているかを調べる。</li> </ul>	・調査活動から，緊急時における素早い対応は，火災の予防や発生時に対する日ごろの備えによるものであることを理解できるようにする。	6 7 8 9 10 11	<ul style="list-style-type: none"> <li>・電力会社，ガス会社（調査）</li> <li>・消防団員数の変化</li> <li>・消防団訓練（調査）</li> </ul>
4 団員が減っている中，消防団は本当に火災に備えたり，火災時の被害を最小限に防いだりできるのだろうか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・効率よく動くための消防団の訓練，消防団を中心とした地域住民の防災訓練，消防団による設備の点検，地域の見回り活動，火災時における消防団の動きなどを関連付けて考え，話し合う中で，消防団の存在意義，地域の安全は互いに協力したり助け合ったりして守ること，自分も地域社会の一員として自分の安全は自分で守ることが大切であることに気付く。</li> </ul>	・消防団の重要性という子どもの認識と，団員減少という事実とのずれから生まれた学習問題を追究する場を設け，関係諸機関の連携と，地域の人々との協力について理解できるようにする。	12 13 14 15 16	<ul style="list-style-type: none"> <li>・火災時における消防団の動き（ビデオ）</li> <li>・地域の防災訓練（ビデオ）</li> </ul>

**(2) 展開例② <消防署が近く，数も多い地域で，火災時には中央司令室からの連絡系統によって，多くの消防署が駆けつける地域の場合>（現在の岡谷広域消防）**

学習問題	学習内容 学習活動	指導	時	資料
1 119番に連絡したらどこにつながるのだろう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・火災時，どこに電話をするか考える。</li> <li>・119番に電話をしたらどこにつながるかを予想し，話し合う。</li> <li>・近隣の消防署につながるという予想に反し，通信司令室につながることに疑問をもつ。</li> </ul>	・「近くの消防署につながる」という子どもの考えと，通信司令室につながる事実とのずれから，その背景・要因を追究する学習問題を設定する。	1	・携帯電話
2 消防署に直接連絡が入った方がすぐに出動できるのに，なぜ通信司令室につながるのだろう	<ul style="list-style-type: none"> <li>・消防署を中心に，警察，電力会社，ガス会社，消防団など関係機関が相互に連携して，火災が発生したときには一刻を争って対処していることを調べる。</li> <li>・火災発生時は，消火するだけでなく，人や車の整理，ガスや電気，水道を止めることなど，相互間の連携が必</li> </ul>	・調査活動から，消火活動には，消防署を中心とした関係諸機関の連携が必要なことを確かめるようにする。	2 3 4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・岡谷消防署調べ</li> <li>・火災が起きたときの連絡体制</li> </ul>

う。	要なことを知る。			
3 なぜ、電力会社やガス会社、消防団は火災の時に、すぐに行動できるのだろうか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 諸機関が普段から施設・設備の整備や点検，訓練，広報活動などに取り組み，火災の予防や発生時に対する備えをしていることを調べる。</li> <li>・ 地域には消防団があり，消防署と協力して重要な働きをしていることを知る。</li> <li>・ 消防団の入団人数が年々減少していることを知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 調査活動から，緊急時における素早い対応は，火災の予防や発生時に対する日ごろの備えによるものであることを理解できるようにする。</li> </ul>	5 6 7 8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 電力会社，ガス会社調べ</li> <li>・ 消防団員数の変化</li> </ul>
4 実際にどのようにして火を消しているのだろうか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 岡谷は近隣の消防署が多く，出火時にはたくさんの消防署が集まって消火活動を行っていることを調べる。</li> <li>・ 大きな火災や災害時は近隣の消防署がすぐに駆けつけて火災に対処していることを知り，消防団の存在意義について疑問をもつ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 関係諸機関の一つとして消防団を見だし，消防署と協力して消火活動を行っていることに着目させる中で，消防団の存在意義を考えていくようにする。</li> </ul>	9 10 11	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 消火内容調べ</li> <li>・ 消防署数</li> <li>・ 消防団数</li> </ul>
5 こんなに消防署が多くて火を消してくれているのだから，消防団の人数が減っていても大丈夫じゃないか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 効率よく動くための消防団の訓練，消防団を中心とした地域住民の防災訓練，消防団による設備の点検，地域の見回り活動，火災時における消防団の動きなどを調べる。</li> <li>・ 調べたことと，それまで学習してきたことを関連付けて考え，話し合う中で，消防団の存在意義，地域の安全は互いに協力したり助け合ったりして守ること，自分も地域社会の一員として自分の安全は自分で守ることが大切であることに気付く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 都市部は消防署の数が多く，出火時にはたくさんの消防署から消防士が来るといいう子どもの認識と，消防団の団員減少という事実とのずれから生まれた学習問題を追究する場を設け，関係諸機関の連携と，地域の人々との協力について理解できるようにする。</li> </ul>	12 13 14 15 16	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 消防団の訓練や活動内容の調査</li> <li>・ 火災時における消防団の動き</li> <li>・ 消防団の訓練（VTR）</li> </ul>

**(3) 展開例③ <消防署が近く，数も多いが，中央司令室がそれぞれの消防署内にあり，火災時には一つの消防署が駆けつけ消火活動を行う地域の場合>（かつての岡谷消防署）**

学習問題	学習内容 学習活動	指導	時	資料
1 火災のとき，119番に連絡したら，	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 火災時，どこに電話をかけるかを考える。</li> <li>・ 119番に電話をしたら，どこにつな</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「近くの消防署だけから駆けつける」という子どもの考えと，</li> </ul>	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 携帯電話</li> </ul>

<p>誰が来てくれるのだろう。</p>	<p>がり誰が来るのかを予想し、話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・近隣の消防署だけが駆けつけるという予想に反し、警察、電力会社、ガス会社、消防団なども駆けつけることに疑問をもつ。</li> </ul>	<p>消防署だけではなく関係諸機関の人たちも駆けつける事実とのずれから、その背景・要因を追究する学習問題を設定する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・資料集『わたしたちの岡谷』</li> </ul>
<p>2 消防署の他に、どうして警察、電力会社、ガス会社、消防団などが来るのだろう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・消防署を中心に、警察、電力会社、ガス会社、消防団など関係機関が相互に連携して、緊急事態が発生したときには一刻を争って対処していることを調べる。</li> <li>・火災発生時は消火するだけでなく、人や車の整理、ガスや電気、水道を止めることなど、相互の連携が必要なことを知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・調査活動から、消火活動には、消防署を中心とした関係諸機関の連携が必要なことを確かめるようにする。</li> </ul>	<p>2</p> <p>3</p> <p>4</p> <p>5</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・岡谷消防署調査（見学）</li> <li>・火災が起きたときの連絡体制</li> </ul>
<p>3 なぜ、電力会社やガス会社、消防団は火災の時すぐに行動できるのだろうか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・諸機関が普段から施設・設備の整備や点検、訓練、広報活動などに取り組み、火災の予防や発生時に対する備えをしていることを調べる。</li> <li>・地域には消防団があり、消防署と協力して重要な働きをしていることを知る。</li> <li>・岡谷を含む諏訪広域消防では、緊急司令室がそれぞれの消防署内にあり、個々に出動するのに対し、松本など他の都市部では、広域消防の通信司令室からの連絡により、たくさん消防署が駆けつけて消火活動を行っているという事実から、遠い場所で火災が起きた場合の消火活動はどうなっているのか疑問をもつ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・調査活動から、緊急時における素早い対応は、火災の予防や発生時に対する日ごろの備えによるものであることを理解できるようにする。</li> <li>・調査活動から、諏訪広域消防では、他の都市部の広域消防とは違い、それぞれの市町村内で発生した火災に、遠い場所であってもほとんど一つの署で対処しているという事実を確かめるようにする。</li> </ul>	<p>6</p> <p>7</p> <p>8</p> <p>9</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・電力会社、ガス会社調査</li> <li>・消防団訓練の様子（VTR）</li> <li>・松本広域消防の消火活動体制</li> <li>・岡谷市全図</li> </ul>
<p>4 すぐに駆けつけてくれるとはいっても、火を消してくれるプロは岡谷消防署だけなのだから、遠いところはこ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・効率よく動くための消防団の訓練、消防団を中心とした地域住民の防災訓練、消防団による設備の点検、地域の見回り活動、火災時における消防団の動きなどを調べる。</li> <li>・地域の消防団について調べたことと、それまで学習してきたことを関連付けて考え、話し合う中で、岡谷は特に消防団の存在が大きい地域であることに気付く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・岡谷消防署は、日ごろの備えにより、火災が起こるとすぐに対処してくれるという子どもの認識と、まわりの消防署も駆けつける松本などは違い、岡谷は一つの消防署しか来ないという事実のずれか</li> </ul>	<p>10</p> <p>11</p> <p>12</p> <p>13</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・消防団調査（分団長さんの話）</li> <li>・火災時における消防団の動き（VTR）</li> <li>・消防団員数の変化</li> </ul>

れで本当に大丈夫だろうか。	・消防団の入団人数が年々減少していることを知り、消防団にかかる負担の大きさを考える。	ら生まれた学習問題を追究する場を設け、消防団が果たす役割と存在意義を考えていくようにする。	14	
5 こんなに消防団の人数が減っているのだから、消防団は負担が大きすぎるんじゃないか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域を火災から守るために、消防署や消防団、地域に住む人々が協力したり、助け合ったりしていることを考える。</li> <li>・調べたことと、これまで学習してきたことを関連付けて考え、話し合う中で、消防団の存在意義、地域の安全は互いに協力したり助け合ったりして守ること、自分も地域社会の一員として自分の安全は自分で守ることが大切であることに気付く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・岡谷は消防団の存在が重要で、団員もそれに応えようと訓練し活動しているという子どもの認識と、団員減少という事実とのずれから生まれた学習問題を追究する場を設け、関係諸機関の連携と地域の人々との協力について理解できるようにする。</li> </ul>	15 16	<ul style="list-style-type: none"> <li>・消防団員のお話</li> <li>・地域の防災訓練の様子</li> <li>・学校の避難訓練の様子</li> </ul>

#### 4 本時案（単元展開例③の場合）

##### (1) 主眼

消防団への負担から、その存在意義を考える場面で、分団長さんが消防団を続けてきてよかったと感じているわけを確かめたり、自分たちの学校の避難訓練や地域の防災訓練の様子を見たりすることを通して、地域社会の一員として自分の安全は自分で守ることが大切であることが分かる。

##### (2) 本時の位置（全16時間中の第16時）

前時：学習問題を設定し、自分の考えをノートにまとめた。

##### (3) 指導上の留意点

- ・これまでに学習してきたことを想起したり、自分の発言の根拠を指し示したりすることができるように、今までの授業での板書の模造紙を教室の壁に掲示しておく。

##### (4) 展開

段階	○学習活動 ・予想される児童の反応	指導 評価	時間	資料
問題把握／	○学習問題について話し合う。 【学習問題】こんなに消防団の人数が減っているのだから、消防団は負担が大きすぎるのではないか。		10	学習問題に対する自分の考えをまとめた学習ノート
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・岡谷は消防署が一つしかなくて消防団の存在が大切なのに、消防団員の数が減っていたらとても大変だと思う。</li> <li>・消防団は自分の仕事があって、その中で消防団をやっているんだから大変だ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時に設定した学習問題と自分の考えを確かめるようにする。</li> <li>・これまでに学習してきたことを基に、自分の判断の根拠を</li> </ul>		



問 題 の 究 明  ／ 整 理 発 展	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どんなに大変でも、消防団がなければ困る。だから訓練して頑張っていると思う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>伝え合うことで、消防団の存在意義を確かめるようにする。</li> </ul>	10	
	<p>【学習課題】消防団の人たちはどんなことにやり甲斐を感じているのか、話し合ったり調べたりしよう。</p>			
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・消防署も自分たちを守ってくれるけど、自分たちの地域を一番近くで守ってくれるのは消防団だ。</li> <li>・消防団は大変だけど、自分たちが地域を守るんだという強い気持ちでやっていると思う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・分団長さんが消防団を続けてきてよかったと思っている理由を確かめ、大変な活動だがそれ以上にやり甲斐を感じて取り組んでいる分団長さんの思いに触れるようにする。</li> </ul>	10	分団長さんへのインタビュー VTR
	<p>○分団長さんが、消防団を続けてきてよかったと思っているわけを確かめる。(VTR)</p>			
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仲間との絆や、地域とのつながりが深くなったんだ。</li> <li>・消防団の人たちも、地域の人たちから力ももらって頑張っているんだ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・消防団は地域を知り、地域から学び、地域の人々とかかわり合う中で地域の安全を守っていることが分かるようにする。</li> </ul>	10	避難訓練 VTR
	<p>○自分たちの避難訓練、地域の防災訓練の様子をみる。(VTR)</p>		5	地域の防災訓練 VTR
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分たちもしっかり訓練をして、備えておくことが大切だと思う。</li> <li>・火災を起こさないように、日ごろから気をつけることも忘れちゃだめだよ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○社会科日記に学習したことのまとめを書く。</li> </ul>		

## 5 教材研究

### (1) 学習指導要領の内容

(4) 地域社会における災害及び事故の防止について、次のことを見学、調査したり資料を活用したりして調べ、人々の安全を守るための関係機関の働きとそこに従事している人々や地域の人々の工夫や努力を考えるようにする。

ア 関係機関は地域の人々と協力して、火災や事故の防止に努めていること。

イ 関係の諸機関が相互に連携して、緊急に対処する体制をとっていること。

### (2) 児童の実態 (略)

### (3) 素材研究

#### ①岡谷消防署への聞き取り調査

##### 諏訪広域消防 岡谷消防署への聞き取り調査

○119番に電話をすると、どこにつながるか。 → 通信司令室 (岡谷消防署内)

○諏訪は、6市町村の消防署内にそれぞれ通信司令室がある。その後、ガス会社、電力会社、警察、消防団、市役所の福祉課 (一人暮らしの高齢者がいる場合) などに連絡。(全て電話による連絡)

○消防団は、連絡網を使って電話で流す。(11分団+消防本部)

- 防災メールは消防署員が打つが、出動を優先するので、すぐに情報を流すことはできない。
- 防災ラジオは市役所が流す。だから夜間は流せない。
- 携帯電話からの119番だけは、全て諏訪消防署の通信司令室に入る。その後、それぞれ近隣の消防署に配信される。
- 電話会社の都合で、携帯の配信箇所は各地区一カ所にしてほしいということで、諏訪地方はたまたま諏訪消防署になっている。連絡にタイムラグが生じてしまうため、他の諏訪広域の消防署にとって、携帯の119番が諏訪消防署に入るメリットはない。本来なら、それぞれの消防署に連絡が直接入った方が早く出動できる。

**○諏訪広域消防の岡谷消防署、下諏訪消防署、諏訪消防署、富士見消防署、原消防署は分署を一つも持っていない。茅野消防署は山を抱えているので分署が二つある。**

- 本当は、分署があった方が火災現場に早く駆けつけることができる。しかし、各市町村とも、財政的にも分署をつくって人を雇用し、機材を備える余裕はない。
- 本当は、通信司令室も諏訪広域で一本化した方がよい。

<一本化のメリット>

- ・ガス、電力、警察、消防団への連絡系統が整う。
- ・各消防署の中間地点付近で火災が発生した場合、より近い方の署が出動できる。また、同時に出勤し、倍の機能で消火ができる。加えて、こちらの署は梯子車を用意し、そちらの署はポンプ車を用意するといった役割分担ができ、効率化につながる。(人材、資材の効率的な利用)

**○分署もなく、通信司令室も一本化していない諏訪広域消防はどうしているのか。**

- 率直にいうと、諏訪はこれで何とかなっているということ。
- 諏訪の平は山に住宅地が少ないので、各消防署ともに、一番端の地区であっても15分程度で到着することができる。岡谷消防署でいえば、川岸地区の一番外れまで15分で着く。(出動は常に1分以内) 全国平均の到着時間は7分だが、岡谷は一つの消防署でこれを保つことができている。
- 岡谷で一番遠い場所は、山を含めれば諏訪湖の森と高ボッチ。諏訪湖の森までは30分以上、高ボッチまでは40分以上かかってしまう。諏訪湖の森は、諏訪消防署から向かって同じくらいの時間がかかってしまうが、高ボッチは明らかに塩尻の消防署が行った方が近い。

<マイナス面を補うための工夫>

- ・各署からの距離を考えると、赤砂の辺りは岡谷署よりも下諏訪署の方が近い。大和も諏訪署より下諏訪署の方が近い。木落とし坂の辺りはバイパスが開いたので、下諏訪署よりも岡谷署の方が近くなった。そういう場合は広域連合ということで、連絡を取り合い、近い方が向かうようにしている。
- ・諏訪という場所は、消防団の存在は大きい地区だといえる。
- ・長野県は通信司令室の一本化を図ろうとしている。どこに本部をもっていくかは様々な問題があるため、一本化ないしは二～三本化になるだろう。
- ・広域化を進めて、より迅速な、より効率的な消火活動をしようとして工夫している。

**○消防団には、どんな協力をしてもらっているか。**

- ①放水②鎮火後、再び火の手があがらないように、現場に残って警戒活動をしてもらう。③交通整理は、本来警察の仕事。
- 消防団はボランティアでやってもらっている。消防団は地元のことをよく知っている。現場に行くと、地元の人しか知らないようなこともある。細かいことは消防団に聞く。地元を知り尽くしている強み。
- 消防団はとにかく地域密着。(人が分かる。火災が起きた家に誰が住んでいるか、どんな家族構成か。年寄りがいるか、子どもがいるか。隣近所の住民は誰か、どんな人か。) だから、放水までの安全確認は消防団は長けている。
- 消防署員には人数の限りがある。また、機材も限りがある。消火は一分一秒を争う。消防署だけ

で消すよりも、消防団にも協力してもらった方が、多くの人数、多くの機材で迅速に消すことができる。

- 消防団は、普段から防災のための訓練や勉強をしてくれているので、いざというときに役立つ。これがいい加減ならば、協力してもらうことはできない。
- 消防団は他地区の消防団との交流があり、ネットワークや協力体制が整っている。

### ○火災防止のために

- 「消火栓、防火水槽の位置確認・点検整備」「車両機材の点検、整備」「24時間の勤務態勢」「日ごろの訓練」「広報活動」「立入検査」「学校や企業の避難訓練」「救急救命法講習」

## ②消防団への聞き取り調査

### 岡谷市消防団第二分団部長への聞き取り調査

#### ○消防団の日ごろの活動

- ①防火のPR活動…火災予防の広報 ②消火栓の安全確認 ③一人暮らしの老人宅の火気点検
- ④降雪時の消火栓、防火水槽の雪かき ⑤河川の氾濫に備えた土嚢（どのう）作り
- ⑥お祭りの警備 ⑦操法大会に向けての練習 ⑧地区によっては少年消防団を組織

#### ○火災が発生すると？

- 市の防災無線が流れる。 → それを聞いた団員から分団所に行く。同時に団員に電話連絡。  
→ 4名集まったところで、ポンプ車出動。 → 現場に向かう。

#### ○消火現場での活動

- ①消防署と協力して消火活動をする。 ②警察と協力して交通整理。
- ③火が鎮火しても、しばらくは現場に残る。火が再び燃え上がらないかどうかをずっと確認する。
- ④怪我をした人の応急処置。大怪我を負えば救急車で搬送。（消防署は火を消すことに集中）

#### ○火災以外の災害時は？

- ①河川の氾濫、家屋の床上浸水…土嚢積み、水のせき止め ②豪雨災害…避難の広報活動
- 岡谷の豪雨災害の際は、湊地区で消防団員が亡くなってしまった。「避難してください」と一軒一軒呼びかけてまわっている最中に、土石流に飲まれてしまった。

#### ○その他の仕事

- ①冬場の雪かき ②行方不明者の捜索…警察→消防署→消防団 ③山の遭難者の捜索

#### ○消防団員の苦労と努力

- ①いつでも出動できるように気持ちと身体を整えておく。  
火災は時間を選んでくれない。いつでも出動できる態勢を整えておく。
- ②みんなが自分の仕事をもちながら活動している。  
昔は自営業の人が多かったが、今はほとんどが会社員。火事の時、会社が出してくれる場合もあれば、出してくれない場合もある。
- ③いろいろな種類の訓練  
例えば、土嚢を作るにも作り方がある。ヒモを縛るにも縛り方がある。それを身に付ける。  
・操法訓練      ・ロープワーク訓練      ・中継訓練（市の訓練、各分団の訓練）  
また、操法練習などは、みんなが会社に行く前の朝早い時間から始める。練習のための早起きも辛いことの一つ。
- ④土日返上で活動  
お祭りの警備は、ほとんどが土日。多くの土日休みを消防団活動に当てている。

#### ○どうして消防団をやっているのか。

- 一番は仲間とのつながり。一緒にやっていて楽しいという人間関係のつながり。
- 消防団に入っている、さぼって出ないことだってできるわけだから、やはり、よい仲間がいる

からやっつけられる。

### ○消防団の問題点

#### ○団員の減少

名簿上はあまり減少していないが、実際に出てきて活動できる人がとても少なくなっている。新しい人が入らないので、団員の年齢が高くなってきている。是非、若い人に入ってもらいたい。

## (4) 素材の教材化

関係機関は地域の人々と協力して、火災の防止に努めていることと、関係の諸機関が相互に連携して、緊急に対処する体制をとっていることが理解できるように、消防署の通信司令系統に着目した。すると、地域によって連絡系統に違いがあることが分かった。なかでも諏訪広域消防のように、通信司令室が署内にある地区では、火災時に駆けつける消防署数が少ないことから、消防団の存在が大きいことが見えてきた。そこで、関係諸機関の一つとして消防団に着目させ、自分の地域にとっての重要性に目を向けるようにする。

子どもたちは、消防団について調べ、団員の努力や苦勞に触れることで、消防団の重要性を認識するであろう。しかし、それだけ重要な役割を担う組織であるにもかかわらず、どの地区の消防団も団員の減少という問題を抱えている。消防団はその地域に根付いた組織であり、地域や人を熟知している。消防団の方々に話を聞いてみると、その地域ならではの様々な工夫や努力に出会う。

関係諸機関の一つとして消防団を取り上げることは、地域の安全は互いに協力し合って守ることや、自分も地域社会の一員として自分の安全は自分で守ることが大切であることを考えることにつながるであろう。

## 6 授業の記録（単元展開例③）

### 【第10時】＜岡谷消防署と松本広域消防の通信系統の違いから見いだした学習問題について考える＞

T : 堯士君は、感想で「通信司令室はハイテクだと思っていたけど、そうでもなかった」って言ってたよね。これは松本広域消防局の通信司令室だよ。(渚の通信司令室の写真を見せる)

堯士 : 岡谷の通信司令室に比べると、松本はすごいね。すごいハイテク。

稜治 : 一度に二カ所で火災が起きたときとか、岡谷は大丈夫かな。

勇斗 : 消防団がいるよ。だから消防団が大切なんだよ。

駿太 : 火災の場所が、消防署から遠いときだって困るよ。

T : 高ボッチまでいくには40分以上かかってしまうんだよ。

尚昭 : 大火災のときだって大変じゃない。

T : 消防署や消防団、ガス会社や警察などが、すぐに駆けつけてくれるけど、火を消すプロは誰なの。

大輝 : プロは消防署だけだよ。

蒼 : 消防団も火を消すよ。

堯士 : でも、消防団はみんな他に仕事を持っている人たちだから、プロじゃないよ。火を消すのが仕事なのは消防署だけだよ。



[消防署の場所を確かめている様子]

【学習問題】すぐに駆けつけてくれるといっても、プロは消防署の人だけなのだから、大火災のときや一度に二カ所火災が起こったとき、火災の場所が消防署から遠いときは、本当に大丈夫なのか。

蒼 : 大丈夫じゃないと思う。消防団も手伝いに行くけど、それでも人数が足りなくて困ると思う。

太：岡谷は消防署が一カ所しかないんだから、遠いところは大丈夫じゃないよ。  
 優季：大火災や山火事は、大人数で消さなければ消えないと思うよ。  
 大輝：消防団に活躍してもらわなければいけないよ。  
 礼子：たとえ火災が小さくても大丈夫じゃないよ。火災は時間がかかれば広がっちゃうし。  
 稜治：僕は大丈夫だと思う。災害が大きいときは、他の消防署にも来てもらうから。  
 駿太：でも、他の消防署から来たんじゃないよ。  
 堯士：他の消防署は自分の地域が優先だからさあ。  
 T：みんなが一番心配していることは何。  
 加奈：人が少ないってことです。  
 T：でも、今現在、岡谷や諏訪は、これでやってるんでしょ。  
 勇斗：みんな本気でやっているから、やれていると思う。  
 大輝：全力なんだよ。消防署の人も消防団の人も、他の電力会社の人もベストを尽くしているんだよ。  
 蘭子：火を消すってことは、遊び半分な気持ちでやっていたら、自分の命もなくなってしまいます。  
 優季：人の命にも自分の命にもかかわることだと思う。  
 大輝：岡谷には消防団が11分団あるから、助けてくれる。  
 駿太：うん。手伝ってくれるっていうか、協力してくれる。  
 T：よし、じゃあ、消防団についてもっと調べようか。  
 駿太：消防団がどのような働きをしているか、調べるってことだ。

〈社会科日記〉

○今日分かったことは、松本は消防署がいっぱいあって、火災があってもいっぱい駆けつけるけど、岡谷は消防署が少ないから大変だと分かりました。(勇斗)  
 ○今日は、一度に二カ所で火災が起きたら大丈夫？と考えました。ほとんどの人は大丈夫じゃないけど、勇斗君は、消防団が11分団あるんだから大丈夫と言っていました。(堯士)

**《考察》** 火災が起きたとき、消防署だけではなく関係諸機関が相互に連携をとって対処していることや、それぞれが火災を未然に防ぐための努力をしていることを知った子どもたちは、自分たちの生活が守られていることに安心感を抱きました。そこで、より最新の通信指令システムで火災に対応している地域があることを伝え、子どもたちの認識を揺さぶりました。すると子どもたちは、自分たちの地域では消防団の存在が大切なことに気付き始めました。消防団活動についてより詳しく追究していくことが必要だと感じた子どもたちは、意欲的に調査活動へと向かっていきました。

**【第11～13時】〈消防団の取組についての調査活動〉**

- 岡谷市の消防団について調べる。
  - ①岡谷市3分団合同訓練兼子ども体験学習（小学校の校庭で実施してもらった）のVTRを見る。
  - ②女性消防団員として活躍しているの蒼君のお母さんが作ってくれた手作り資料を配り、蒼君に内容を発表してもらおう。
  - ③それらのVTRや資料から分かったことを付箋に書き、模造紙に貼っていく。
  - ④次の時間に学区の第3分団長さんを授業にお呼びすることを伝え、自分たちで調べてみても分からなかったことや、質問したいことをグループごとにまとめる。



〔市3分団合同訓練 子ども消防団体験〕

○岡谷市消防団第3分団長をお呼びし、消防団活動についてお聞きする。

**子どもたちが分団長に聞いたことと、答えていただいたこと（抜粋）**

Q：岡谷市の消防団は、全部で何人ですか。

A：定員は549名で、実員（実際に入っている人）が538人です。だから、11人足りないということです。

Q：出動してから現場までは、速く行けるんですか。

A：出動してから火を消すまでは、いつも訓練をしているので時間はかかりません。

T：いつも訓練をしているとおっしゃいましたが、どんな訓練をしているのか教えてください。

A：ポンプ操法といって、競技大会があります。どれだけ速く正確に水を当てるかを競う大会です。その大会に向けて、4月～6月の朝4:30から小学校の校庭で練習しているんですよ。

Q：消防団をやっていて大変なことは何ですか。

A：夜でも、何か起こったら出て行くことが大変ですね。みんな仕事をもっているのに、訓練や練習は、朝早くにやります。早起きも辛いですね。

Q：仕事を抜け出して怒られたことはありますか。

A：たくさんあります。でも、火災を消しに行くのは大切な消防団の仕事なので、「ごめんなさい」と会社に謝って許してもらっています。

Q：近くの消防団と協力していますか。

A：岡谷市の消防団はもちろんですが、市や町が違っても協力しています。

Q：消防団も24時間ですか。

A：24時間いつでも出動できるように準備しています。

Q：火を消すこと以外に、どんなことをしていますか。

A：パトロールや警戒活動をしています。夜警といって、夜、消防車で火災を起こさないように地域に呼びかけています。

C：朝早い練習に遅れる人はいないんですか。

A：たくさんいます。みんな仕事をもっているから辛いんですよ。

辛いといえば、平成18年の岡谷の大災害のときは、もうパニックでした。消防団はみんな1週間以上、被災地に泊まり込みました。

Q：消防団は、火災以外も行くってことですか。

A：水害や行方不明者の捜索が、とても多いんです。今朝も、行方不明者の捜索要請があったんですよ。でも、出ようとしたら見つかったということなので、結局出ませんでした。

T：平成18年の岡谷の災害のとき、消防団の方が亡くなってしまったんですよ。

A：消防団員が、土石流という土や石に巻き込まれて亡くなってしまいました。私も現場に行きましたが、家も人も何もなし。跡形もありませんでした。



【第3分団長をお招きした授業】

**《考察》** 地区の消防団にお願いして実施していただいた合同訓練（兼 子ども体験学習）は、消防団の仕事と団員の真剣さを子どもたちに伝えてくれました。女性団員として長年活躍してきた蒼君のお母さんは、熱い気持ちで消防団の活動内容を記した資料を作ってくれました。分団長さんをお招きしての学習では、消防団の仕事内容に加え、この地域ならではの苦労や努力についてお聞きすることができました。また、ここまでの調査活動の中で疑問として残ったことを直接質問することができたので、子どもたちは、要点的に消防団活動についてまとめていくことができました。

**【第14時】＜学習問題について、学習してきたことを活用して考え合う「話し合い」＞**

【学習問題】すぐに駆けつけてくれるといっても、プロは消防署の人だけなのだから、大火災のときや一度に二カ所火災が起こったとき、火災の場所が消防署から遠いときは、本当に大丈夫なのか。（第10時から続き）

直樹：別々の場所で同時に火災が起きたときだって、消防団長の指示で分かれて行って言ったし、大丈夫だと思います。



蒼 : 消防団も11分団あるし、近い消防団が行くんだから大丈夫です。

勇斗 : でも、遠ければ遅れると思います。

大輝 : 付け足しで、遠ければ遅れて燃え広がってしまうと思います。

駿太 : 消防団は、火災の現場が遠くても全力で行って全力で消しています。それに、消防団と消防署は丸になっ  
ています。

尚昭 : 消せない火はないって言ってました。

T : 大丈夫じゃないって人たちは、山火事や遠いときは、消防団の到着が遅くなって燃え広がってしまう  
ってことだね。大丈夫だって人たちはどういうこと。

駿太 : 遠くても山火事でも消しているし、近くに土がなくても砂を使って消している。それに協力が来るし、県  
のヘリコプターも来る。

T : 協力って？

C : 他の地区や市町村からも応援が来るってこと。諏訪の6市町村。岡谷の11分団も。

堯士 : こんなに対策がとれているんだから大丈夫でしょ。

C : だから、消防署や消防団の人が協力して、えっと協力し合っただよ、岡谷市を守ってくれているってこと。

駿太 : 消防署と消防団だけじゃないよ。

C : そうそう、警察やガス会社や電力会社や、いろいろなところの協力がある。

T : 大丈夫じゃないって考えていた人たちはどうだろう。

大輝 : 平成18年のときの災害で消防団の人が亡くなってしまったのも、人の命を助けるためだったんだよね。

勇斗 : やっぱり守られていると思う。

駿太 : みんなを守るのは大変な仕事だなあ。

T : 駿太君は、特にどんな人たちが大変だと思うの。

駿太 : 消防署も消防団も警察もガス会社も電力会社も大変だと思うけど、やっぱり僕は、消防団が一番大変だと思  
う。

T : どうしてそう思うの。

駿太 : だって、消防団は他の仕事をやっているのに岡谷市を守っているんだから。

堯士 : 夜も、24時間で守っているんだもん。

大輝 : 自分の地域も、みんなの命も守っている。

勇斗 : 仕事を抜けて行かなきゃいけないし、命がけで助けているんだから。

加奈 : 疲れているのにね。

駿太 : それにねえ、消防団の人はプロじゃないけど頑張っているよ。

大輝 : 自分の命も大事だけど、人の命も大事にしている。

#### 〈社会科日記〉

岡谷は消防署が一カ所しかないから、遠くで火事が起こったときは大丈夫じゃないと思っていたけど、消防団の活躍について調べたら、僕たちは守られているなって思いました。消防団は火を消すプロじゃないけど、自分の仕事があるのに火事が起きたら来てくれるし、一番大変だと思いました。(駿太)

**《考察》** 火災の際、松本などの広域消防とは違い、岡谷は一つの消防署で対応していることから、自分たちが本当に守られているか不安を抱いていた子どもたちでしたが、調査活動を通して、地域の消防団の役割や苦勞、努力を知ること、関係諸機関が協力し合い、災害から人々を守ってくれていることを強く感じるようになりました。中でも子どもたちは、消防団が自分の仕事をもっているのに、それでも消防署と協力して地域を守ってくれていることや、地域の人々の命を守ってくれていることに対し、本当に大変な仕事だと感じていました。消防団が地域にとって欠くことのできない存在であることは、どの子の目にもはっきりと映り始めました。

【第15時】＜資料から、新たな学習問題を設定＞

T : 実は昨日の授業が終わった後で、分団長さんが、消防団は困っていることもあるって言ってたんだ。何が困っているのか、話してくれているところをビデオに撮ってきたから見てください。

【岡谷市消防団第3分団長さんのお話】(VTR)

- ・岡谷市の消防団は定員549人に対して実員が538人なので、形の上では11人足りないだけだが、実際に出てきて活動しているのは、その半以下である。
- ・なかなか若い人が入団してくれないので、消防団員の年齢が高くなってきている。本当は主力が20代であってほしいが、実情は30代～40代が主力になっている。
- ・みんなには、大人になったら是非、消防団に入ってほしいと願っている。

優季：え～、本当なの。本当に大丈夫なの。

大輝：だけど、少ない分、訓練して頑張っているから。

勇斗：来ない人の分まで、来ている人が頑張ってる必死になってやっているんだよ。

駿太：ちゃんとみんな来てほしいね。

大輝：疲れとか早起きとか仕事が遅くまで眠いとかが、ストレスとかが原因じゃないの。

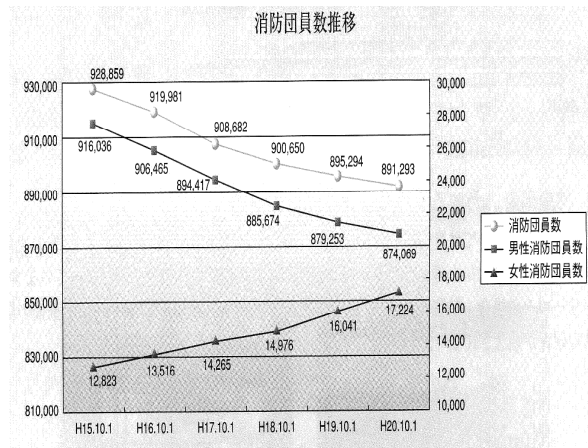
T : 第3分団の定員は何人だったか。

C : 35人。

T : 実際に入っている人は何人か、このプリントを見てください。

3 消防団の情勢 (平成21年10月1日現在) (人)

種別	所属	分団											合計	
		本部	第1分団	第2分団	第3分団	第4分団	第5分団	第6分団	第7分団	第8分団	第9分団	第10分団		第11分団
定数		39	35	35	35	35	45	55	55	45	70	60	40	549
実員		34	35	35	35	34	45	55	50	45	70	60	40	538
	うち女性団員	17		5	3	2				5	5	3		40
	うち機能別団員		1	1		6	10		1	10	13			42



出典：『守れわがまち』21年度版 (財団法人日本消防協会)

堯士：実員も35人だ。第3分団は大丈夫だ。

T : でも、この前の市3分団合同訓練のとき、第3分団長さんは、消防団長に参加何名って報告してた。

C : あっ、9名だ。35人中、9名しか練習に来なかったってことかあ。

C : 日本中、消防団の数も消防団員の数も減っているね。

T : みんな思うことは？

C : 訓練が朝早くて眠すぎる。自分の仕事もあって疲れている。

C : ストレスもある。年齢が高くなれば体が弱る。

C : 大人は仕事がいっぱいある。訓練も厳しい。病気になっちゃう。

T : 今、みんなが言ったことをまとめて言えはどうなる。

C : 大変すぎる。苦勞しすぎる。

T : まとめて学習問題にしてみよう。

【学習問題】実際に活動している消防団の人数が減っているし、年齢が高くなってしまっているのだから、消防団は大変すぎるのではないか。

○学習問題に対する自分の考えをノートに書く。



【考察】 子どもたちは、これまでの学習の中で、岡谷の消防団は消防署をはじめとする関係諸機関と連携し、命がけで地域を守ってくれていますが、それだけに本当に大変な仕事であると感じていました。そこに、消防団の実働員数が定員の半以下になっていることと、団員が高齢化している事実を提示しました。すると、活動が大変な上に人数が減少しているなんてどうなってしまうんだという驚きと不安の声が子どもたちの中から湧いてきました。子どもたちは、消防団にかかる負担に着目し、消防団の存在意義をもう一度考えていこうと動き出しました。

### 【第16時】＜学習問題について、学習してきたことを活用して考え合う「話し合い」②＞

【学習問題】 実際に活動している消防団の人数が減っているし、年齢が高くなってしまっているのだから、消防団は大変すぎるのではないか。(第15時からの続き)

蘭子：消防団は大変すぎると思うけど、頑張らないと火災になったときに、火が消せなくなるから頑張っているんだと思います。

駿太：だから、消防団は体に気をつけなきゃいけないね。

C：消防団だけじゃないよ。消防署の人も警察も。ガス会社も電力会社も。

T：蘭さんが、消防団は大変すぎると思うけど、頑張らないといけなくて言ってくれたね。消防団は大変すぎるけど、それでも地域の安全のために頑張っていることについて考えてみよう。

大輝：頑張らないと、怪我人が出てしまうよ。

蒼：人を助けなければいけないんだから、それに人の命を助けるのも消防団の仕事なんだから、その気持ちがあるんだから。

堯士：自分の命のことも考えて、気をつけないといけないと思う。火災現場は危険なんだから。

T：この前の分団長さんのお話の中で、もう一度みんなに聞いてもらいたいことがあるんだ。(VTR)

【VTR】 分団長さんは、どうして消防団に入ったんですか。(たかや)

→ 強引に入れられたんです。でも、今は入ってよかったあとと思っています。

<理由> ・まず、区のいろいろな人たちと友達になれた。

・先輩も後輩もたくさんできて、仲間がたくさんできた。

・岡谷の地域のことを、とてもよく分かるようになった。ここにはこんな道があった、ここにはこんな人が住んでいたってね。

・他のいろいろな所の人と友達になれる。長地の人や、もっと遠くの諏訪の人とかね。仲間が増えるってことですね。

○VTRの中で、分団長さんが言っていたことを子どもたちに復唱させ、黒板にまとめる。

駿太：消防団をやっていて嬉しい、楽しいって感じだね。

蒼：消防団の仕事は大変なんだけど、仲間ができたりするのがいいんだよ。

駿太：それに地域のことを知ったり、辰野さんは、やっていてよかったなあと思っている。

T：やり甲斐って分かる？

加奈：分かる。消防団の仕事はやり甲斐があるんだと思う。

駿太：苦しいときもあるけど、続けていてよかったなあって思っていると思うよ。

稜治：大変すぎても、仲間と一緒にうれしいし。

T：消防団の仕事ってどう。

駿太：消防団の仕事はすごい。

蒼：人を助けることは、かっこいい。

T：ここでもう一つ、見てほしいVTRがあります。

○岡谷小学校避難訓練のVTRを見る。

T：これは何をしているところ。

悟：いつ火災が起こってもいいように、自分たちが訓練をしているところ。

T : 岡谷市の防災訓練が、この前あったね。

C : 知ってる、知ってる。小学校の校庭でやってた。

T : 今、悟君が自分たちが訓練をしているって言ったけど、自分たちって誰のこと。

C : 僕たち、子ども。市の防災訓練は、大人も子どもも。地域の人。

C : 消防団や消防署の人も、防災訓練、一緒にするよ。お年寄りもする。

堯士：備えることが大事ってことだよ。

優季：自分たちもしっかり訓練して、いつ火災が起きてもいいようにすることが大事だと思う。

加奈：自分の命を自分で守るってことが大切です。

T : 備えるって、火災が起きたときのために備えるだけかな。

優季：火災を起こさないようにする。

T : 誰が。

C : みんなだよ。自分たち一人一人。

蒼 : みんなが普段から気をつけて生活することで、火災は減ると思う。

大輝：消防団や消防署の人に頼ってばかりじゃいけないと思う。自分たちで、できる限りのことをしないとけないと思います。

稜治：消火器や消火栓の使い方を、もっと勉強したい。

勇斗：自分たちで何とかしようと努力しなきゃいけないと思う。

蘭子：消防署も消防団も、命を助けなきゃいけないし24時間だし、忙しいから、自分たちでできることはしなきゃいけないと思う。

優季：みんなで火災を起こさないように協力するとか、勉強するとかしたいです。

#### 〈社会科日記〉（本単元を通しての感想）

○この勉強をして思ったことは、消防団や消防署の人たちは、僕たちの倍疲れていたり、努力していたり、苦労している。だけど、分団長さんは人と友達になれていい、地域の道が分かっていると言っていました。それで、火を消すことは難しいし疲れるし大変だけど、いくら疲れていても、火の中に人がいたら休んでられない。頑張って火を消さなきゃ、そういう気持ちがあるからこそ、人を助ける仕事が好きになったり、自分の命がなくなるかもしれないのに、人の命を助けることができると思いました。あと、消防団の人たちや消防署の人たちは疲れているから、なるべく自分たちの近くで小さい火災が起きたら、消防団の人や消防署の人たちが来る前に、なるべく自分たちで消さなきゃいけないと思いました。見学に行ったりみんなと考え合ったりして、本当に楽しかったです。（蒼）

○消防団や消防署は大変だけど、頑張っていてすごいカッコいいと思いました。でも、それでも大変だと分かりました。だから、僕たちは、なるべく火災を出さない努力をしたいです。でも、もし火災が起きたら消火器で火を消して、なるべく消防団を出さないようにしたいです。そのためには、避難訓練や、火災を出さないためにはどうすればいいのかを考えないといけないと分かりました。（尚昭）

**《考察》** 負担のかかる消防団の活動に加え、消防団の人数が減少していることや、高齢化の事実に触れた子どもたちは、消防団はあまりにも大変すぎるのではないかと考えていきました。そこで、分団長さんがおっしゃった、「消防団に入ってよかったと思っている」ということの意味を考え合うことにしました。そこには、大変なことであっても、地域のため、地域の人々のため、その命を救うために活躍している消防団に、「カッコよさ」を感じる子どもたちの姿がありました。その後、「自分たちの避難訓練の様子」のVTRを見た子どもたちは、自分たちもしっかりと訓練をして火災に備えることが大切であることに気付き始めました。お母さんが女性消防団員として頑張ってきた姿を見てきた蒼君は、単元の最後に、命の現場に身を置いて真剣に取り組んでいる消防団員の思いを想像し、ノートに書き留めました。


## 【ロボット体験学習】

- 1 単元名 「それいけ カニロボちゃん」
- 2 ねらい


テクノプラザ岡谷で、たわしやゴムなどの身近な材料を使ったロボット製作体験をした子どもたちが、多脚ロボット（カニロボちゃん）の部品の金属板を、自身がペンチを使って曲げたものと工場で成型加工されたものの曲がり方の比較をしたり、様々な大きさのねじ締め体験をしたりすることを通して、多脚ロボットがパソコン上のプログラミングにより遠隔操作で動くおもしろさや不思議さを感じ、ふるさと岡谷の特色である工業やものづくりに対する興味や関心を抱くことができる。

### 3 学習の実際

学習活動	子どもたちの様子
<p>1 カニロボちゃんと出会う。</p> <p>①事前に教師がプログラミングしたコマンドの通りにパソコン上の遠隔操作で動く多脚ロボットと出会う。</p> <p>2 身近な材料でお掃除ロボを製作する。 【材料】たわし、モーター、電池ボックス、電池、導線、ゴムチューブ、ねじ、セロハンテープ</p> <p>①説明書を見ながら製作の手順を確かめる。 ②手順に沿って製作する。 ③完成したら、電池を入れて動かしてみる。 ④感想を聞き合う。 ⑤片付けをする。</p> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「わあ、動いた！」と声を上げ、遠隔操作で手を振って動く多脚ロボを、身を乗り出すようにして見ている。</li> <li>・「たわしでロボットが作れるの？」と、材料を見て驚き、本当に完成するのか疑問を持ちながらも、にこやかな表情からはどんなロボットが完成するのか期待を抱いている。</li> <li>・「動いた！うわ～変な動き」、「クルクル回っておもしろいね」とつぶやき、電池を入れると回転するねじの働きで、机の上を様々な動きで走り回るお掃除ロボの様子をうれしそうに眺めている。モーターの位置などによって動き方が違うため、友だちのロボと動き方を見比べたり、真っ直ぐ走らそうと熱心に位置の調節をしたりする。</li> </ul>
<p>3 お掃除ロボと遊びながら、ロボットの仕組みを考える。</p> <p>①お掃除ロボはどんな部品からできているか考える。 ②お掃除ロボとカニロボちゃんを比較し、対応する仕組みを考える。 ・特に取り上げる部品：電池、モーター、フレーム</p> <p>4 金属板を手で曲げたり、道具（万力）を使って曲げたりする。</p> <p>①カニロボちゃんの複雑な形状の部品は、もともとは平らな金属板だったことを確かめ、どのようにして複雑な形状にしたのか予想する。</p> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「カニロボちゃんもこのお掃除ロボと一緒になんだね」と、自分が作ったお掃除ロボと、精密なカニロボちゃんのが、同じような仕組みで作られていることに気づく。</li> <li>・「叩いて曲げたと思う」、「熱を加えて曲げたと思う」と、これまでの経験をもとに予想をする。</li> </ul>
<p>②自分の素手で金属板を曲げることができるか試す。 ③万力で固定した金属板をペンチを使って曲げることができるか試す。</p> <p>④道具を使って曲げた金属板とカニロボちゃんの部品との曲がり方を比較し、その違いを考える。</p> <p>⑤こうした部品を作る工場が岡谷市内にあることを知り、その加工の様子をビデオ映像で見る。 ・大きな金属板から必要な分をレーザー技術で切り取る工程 ・何トンもの圧力で固い金属板を曲げる工程</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の力だけで曲げようと張り切って取り組んだが、「固い。全然曲がらないよ」と、金属板の想像以上の固さに驚き、人の力だけでは曲げることは難しいのではないかと考えている。</li> <li>・ペンチを使うことでぐにゃっと曲がる金属板の様子やその手応えを感じ、「すごい。ぐにゃって曲がったよ」とつぶやく。</li> <li>・「カニロボちゃんはカクカクしてるけど、自分たちの丸いよ」と、金属板が曲がったことは同じでも、その曲がり方に大きな違いがあることに気づく。</li> <li>・普段見たことのないレーザーで必要な金属片を切り取る様子や、平らな金属板をあっという間に角を立てて曲げる様子を見て、「あっ、曲がった」と声を上げる。</li> </ul>

<p>⑥機械の圧力かける実際の刃の部分を持つてみる。</p> <p>5 カニロボちゃんで実際に使われている部品同士を、ねじを使って接続する。</p> <p>①カニロボちゃんの部品同士はどのようにして接続しているのか予想する。</p> <p>②カニロボちゃんの接続方法であるねじ止めによって、金属板同士を接続する。</p>  <p>③カニロボちゃんです実際に使われている部品同士をねじ止めして接続する。</p> <p>④カニロボちゃんを組み立てるために、細かなねじ止めを実際にはどれくらい行うのかを確認する。</p> <p>6 パソコン上でプログラミングし、カニロボちゃんを遠隔操作する。</p> <p>①操作方法を確認する。</p> <p>②3人グループで、パソコン上でプログラミングし、カニロボちゃんを遠隔操作する。</p> <p>③感想を伝え合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実際に圧力かける刃を持ち、「うわっ、重たい」と声を出した子どもたちは、非常に大きな力、重さを加えることによって、カニロボちゃんの角が立った部品が作られていることに気づく。</li> <li>・「このイスみたいに熱でくっつけている」、「ボンドみたいなものでくっつけている」、「ねじでくっつけている」と、これまでの経験や身の回りの工業製品の様子を根拠にしなが予想を立てる。</li> <li>・「簡単にできたよ」と、子どもたちは、ねじ穴にねじが入っていく手ごたえを確かめながら、比較的スムーズにねじを締めていく。</li> <li>・直前のねじ止め体験のねじの大きさとカニロボちゃんです実際に使われているねじの大きさを比較し、「ねじが小さすぎだよ」と、その細かさに驚きを感じる。うまくねじが入らなくても何度でも挑戦し、細かいからこそ付けてみたいという意欲が高まっていく。</li> <li>・「そんなにも多いんだ」と、細かいねじ止めを実際に経験したからこそ、カニロボちゃんの精密さに対する驚きを強く感じていく。</li> <li>・「こんにちは」と、カニロボちゃんに語りかけ、目の前のロボットを「もの」ではなく、「新しい友だち」にも似た存在として捉えていく。</li> <li>・「じゃあまたね、カニロボちゃん」とつぶやきながら手を振り、名残惜しそうに教室を去る。</li> </ul>
---	---

#### 4 活動後の子どもの振り返り

<p>最初にカニロボちゃんを見て、手をふったりして、「かわいいなあ」と思いました。でも、次にやったおそうじロボも、「かわいいなあ」と思って、持ち帰ることができると言われてうれしかったです。名前は、「ハリー」にしようと思います。ハリネズミみたいだからです。カニロボちゃんが、こっちに来たり、『ダンス〜』したり、見ていておもしろかったです。この授業で、「工業についての見方が少し変わったな」と思っています。岡谷はすごいなあ、またあらためて感じました。またあると思うと、すごく楽しみです。ありがとうございました。今後の授業も楽しみに待っています。(Sさん)</p> <p>ねじどめは本当に小さくて手がふるえてしまったけど、鉄まげはぐによっとまがってとても楽しかったです。カニロボちゃんは、思いどおりに動かしてとても楽しかったです。岡谷にそんな工場があるとも思いませんでした。とてもびっくりしました。このものづくりが未来へつづいてほしいです。私は機械作りなどが大好きなので、とても楽しかったです。またすぐやりたいです。またこういう授業をやりたいです。(Yさん)</p>	
--	---

#### 5 考察

工業製品に囲まれて生活をしているにも関わらず、工業へのなじみや関心が高くはない子どもたちであるが、身近な材料(たわし)を用いたお掃除ロボットの作製や鉄板曲げ、ねじ締め体験を楽しみながらすることで、ものづくりや工業技術の一端を手ごたえや感触から鋭敏に感じ取っていた。その上で、精密な多脚ロボットを自身のプログラミングによって遠隔操作したことで、岡谷の工業技術の凄さというものへの気づきが生まれた。このようにして、工業自体や高い工業技術を有する多数の企業を抱える岡谷市に対する一人ひとりの見方が変わり、ものづくりへの興味・関心が生まれ、心の距離感が近づいたことは、多脚ロボットを「もの」ではなく、「もの以上の存在」と見て語りかける児童の姿が物語っていた。

## ■ コラム 遠足での地図活用

「国土地理院の地形図」を活用して遠足を楽しもう！！

### フィールドで「地図記号」「縮尺」「等高線」を習得しよう！！

- 児童が理解しにくい「等高線」・「縮尺」だが、定着させる最良の方法は実際にその場に行き体感し、使用して有効性を知ることである。
- 地図記号を活用した4学年の「諏訪湖一周遠足」を紹介する。
- 「国土地理院発行地形図」の活用で地図を学ぶとともに遠足をより充実した行事にすることを提案したい。

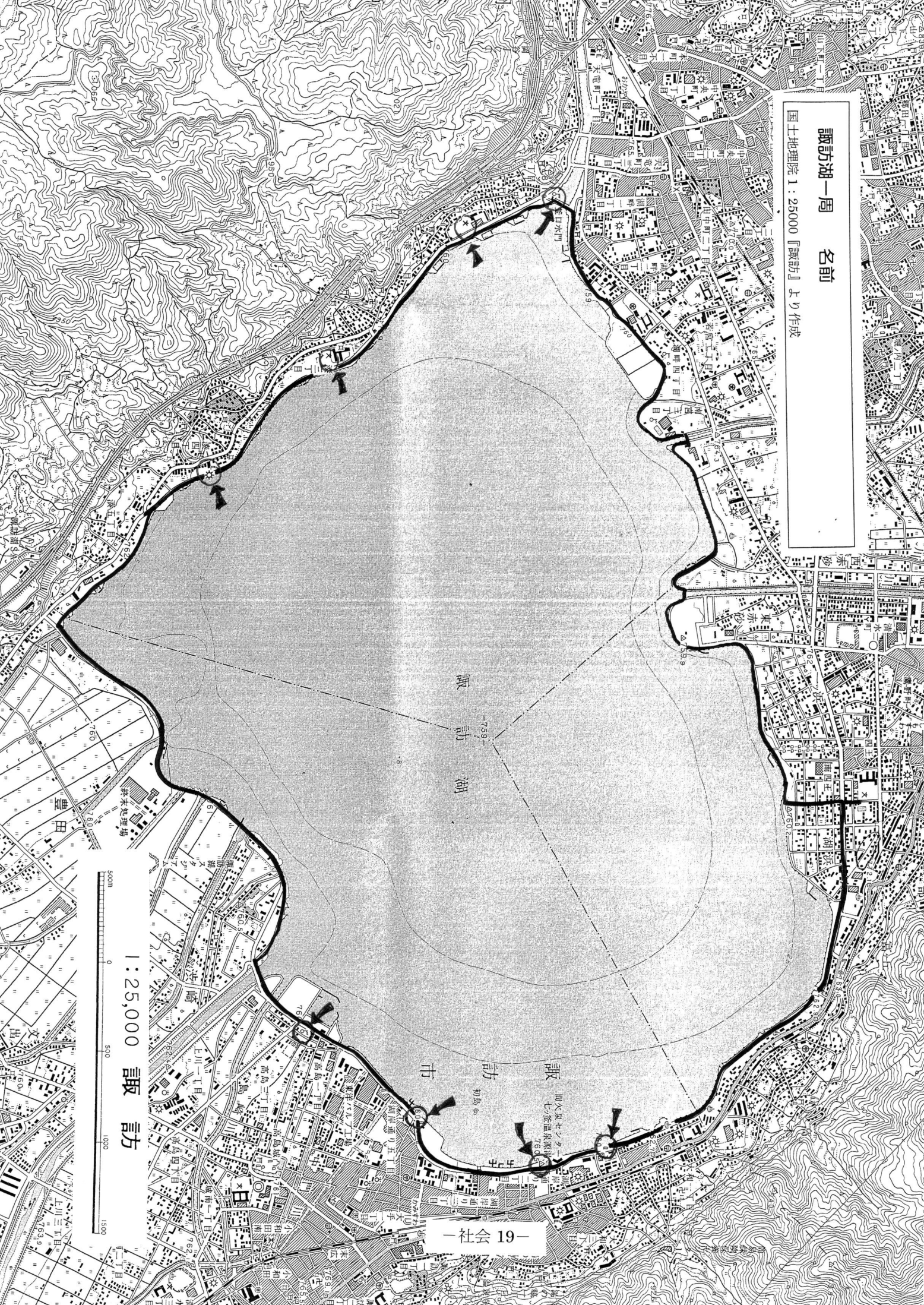
### 事例「地図記号」を利用し、自分の位置を確認して歩いた『諏訪湖一周遠足』

【4学年】 使用地形図 1：25000 『諏訪』

- ◆ 諏訪湖の一周約 16km は起伏が無く変化に乏しいコースのため無目的に歩くだけで終わってしまう。だが 1：25000 地形図を使い3学年で学んだ地図記号から現在地を確認することで児童は楽しく一周できた。
- ◆ 事前学習で児童にコースに赤線を引かせ、コース上にある目標物をチェックさせた。児童が着目したのは「学校」「煙突」「電波塔」「石碑」の地図記号だった。遠足で実際に歩くと「電波塔」は格好の目標物だった。諏訪建設事務所釜口水門・SBC 放送局の高いアンテナは遠くからも見通せた。また「旧味澤製糸」の「煙突」は道中で一番高い目標物だった。こうして児童は目標物を手がかりに自分の現在地を認識した。また、湊小学校や岡谷南部中学校、三角点の場所を確認し、石碑をも手がかりにした。さらに児童は地図記号だけでなく諏訪湖に流れ込む川にも着目し、限られた地形条件から現在地を読み取るスキルを身に付けた。



諏訪湖一周 名前  
国土地理院 1 : 25000 『諏訪』より作成



1 : 25,000 諏訪 方

社会 19-1

# 【生活科 「わたしたちの北庭」から（2年生）】

## 【子どもたちの姿のとらえ】

1年生時から継続的に北庭での活動を続けてきた。春夏秋冬、四季折々の北庭で活動を重ねていく中で、子どもたちにとって、北庭は思い入れのある大切な場所になっていった。また、2年目は、1年生のときには気がつかなかった自然のよさを感じている姿や、北庭の自然を生かした遊びをつくり出す姿などが現れてきた。

## 【教師の見通しと願い】

子どもたちは、楽しさを実感できたときに動き出すであろう。ここまでの活動の積み重ねの中で、北庭は自分たちの居場所であり、放っておいてもものめり込める場所になっている。自分たちの北庭に冬が来た。そこで、冬の北庭のよさやそこでの遊びの楽しさを味わってほしいと願い、冬の北庭遊びを計画した。

### 子どもたちの様子

2月に入り、朝の会から2時間目休みまで北庭で過ごす時間をとった。

野球に夢中になっているF男とU男は、前の日から野球の道具を持ってきていいか担任に尋ね、北庭で野球をすることを楽しみにしていた。当日、朝の会が終わったあとも、太い枝を拾ってきてバットの代わりにし、ボールを使って広場で野球を楽しんでいた。

担任が、しばらく他のグループとともに山の中で遊びを楽しんでいるとK子が氷を見せにきた。

K子：「見て、ここが七色になってるでしょ！特別な氷なの！」

見ると、欠けた部分が光の具合で七色に光っていた。まだまだたくさん氷があるから見に来てほしいとのことだったので、担任もK子のところへ行くことにした。

K子は、M子・R子・H子とお家ごっこをしていた。それは、F男・U男が野球をしている広場と隣合わせになっている。広場に行ってみると、担任も予想できないほどの数の氷が置いてあった。

担任がただただ驚いていると、そこへU男が大きな氷を誇らしげに運んできた。聞くと、北体育館の裏で採っているとのこと。

見に行くと、野球をしていた男子や他の遊びをしていた女子、クラスの4分の3が集まって氷を採っていた。H子・K子・M子・R子でお家ごっこをする中で、お料理の材料がほしくなり、前回、氷が採れた場所へ行って見たようだ。

すると前回とは違って、屋根に積もった雪の固まりが落ちたものが何個もあり、さらにそれが凍りついていて。その中でも採りやすいものを採ってステーキに見立て、お家ごっこをしていたのだが、それを見た男子も加わり、「いかに大きい塊の氷を採るか」という遊びに発展していったようだった。

### 教師の思いと立ち位置

担任としては、もう少し「北庭らし遊び」や「自然」へ目が向くといいと思いつつも、その遊びでこの長い時間を遊びきれぬのか見届けたいという気持ちもあり、そのまま野球を続けさせた。

男の子たちは、きっと自分たちの思い入れのある北庭に、今、夢中になっている野球をもち込みたいのだろう。

氷とは、冬らしい物を見つけてきたなあ。欠けた部分の光り具合が特別と言うK子に感心し、「きれいだね。すごい発見！！」と気持ちを伝えた。

先生を遊びに巻き込みたくなるK子と、子どもたちの遊びに興味を抱く教師

こんなにたくさんの、しかも大きな氷をどうやって、どこから入手したのか？4人の女の子たちだけで運べる量ではない。

「なるほど。前回、僅かな氷が採れた場所を覚えていて、そこに行ってみたんだ。」「野球をしていたはずの男子も氷採りに加わっているぞ。」

大きな氷を誇らしげに運ぶ様子にU男の動き出す姿を見る。

はじめは野球をしていた男子も、お家ごっこをしていた女子も、氷採りの面白さに触れて遊びが変わっていった。冬の北庭の楽しさを感じ、自分たちの遊びをつくり上げている様子を見る。

### とらえ

子どもの意欲と意識を教師が大切にする。

子どもの感覚のよさに感心した教師が、そのよさを認める声がけをする。

子どもたちの活動に教師が驚かされる。

既習の経験を生かしていることや、友との関わりが広がったことを教師がとらえる。

子どもたちが、教師が見通したねらいを子どもたちが達成していく。



足で蹴って氷を採る子、太い枝を使って氷を採る子、採り方も様々だった。採った氷は必ず K 子のところへせっせと運ぶ姿がおもしろい。なぜだか「氷を採る子」や「運ぶ子」と役割も決まっていた。その中でも、F 男は氷を採る係で、先ほど野球でバット代わりにしていた枝を使って、氷を採っていた。

担任が、「さっきまでバットにしていた棒を氷を割るのに使っているんだ。」と F 男に話しかけると、「この棒ね、とっても便利なんだよ。」と嬉しそうな表情で答えてくれた。

この遊びの中では K 子がリーダー的存在になっている。リーダーができて、その中で役割が生まれていることを感じる。

F 男の満足そうな表情に嬉しくなり、担任も近くから棒を見つけてきて、F 男といっしょに氷採りをした

邪魔はしないけれど、そこにある教師の立ち位置、存在を感じるけれど、感じない教師の立ち位置

役割分担など、活動の中から関係性が生まれる。

教師自身も動き出し、活動に加わる。

【子どもたちと共に創る授業をするために、教師が自分の中でゴーサインを出す】  
＜教師が自分自身の中でゴーサインを出すためには＞

子どもたちが活動の見通しをもてば動き出すように、教師が、「ねらい」を持ち、子どもと共に活動する立ち位置の中で、「めりはり」をつけ、教科や単元、その時間の目標を達成したことを「見とどけ」る。

北庭にはたくさんの「材」があり、その「材」は季節によって、または日によって姿を変える。今回の北庭の学習では、前回までなかった「大きな氷」という材が生まれた。子どもたちは、採れた氷の割れ目が七色に光る不思議さや、いかに大きな氷を採るか、採った氷を何に見立てて遊ぶか等、「自然の持つ材」に触れることや、自分たちで楽しさを発見したことの喜びから、氷採りに夢中になっていった。そこには一つの動き出しがあった。

また、自然に役割分担が決まっている様子、採った氷は必ず K 子のところへ運ぶ姿を見てみると、個々の遊びの楽しさも味わいつつ、「たくさんの友だちと関わり合いながら遊ぶことの楽しさ」を感じているように思えた。協力しながら氷を採り、運んでいる子どもたちは、とても生き生きとして楽しそうだった。担任が驚くほどの数や大きさの氷を採るほど遊びに夢中になった陰には、「子どもたちが楽しさを実感したこと」、「友のよさや友と活動する楽しさに気づいたこと」があるように思う。

子どもの動き出しは連続した意識の流れや課題意識の中にある。活動に関わってみることで、その活動のよさに気づき始めたと同時に課題が見えてくる。その課題を解決する方法を考え、行動し、達成できたことにより、満足感を得る。また同時に、次の課題が浮かび上がってくる。

このような連続した課題意識や、単元全体、あるいは一時間の授業における子どもの意識の流れを教師が自分の中にもち、日々の授業改善を行っていくことで、教師が「子どもが動き出す姿」をイメージできるようにしていきたい。



担任も驚くほどの数と大きさの氷たち



枝で氷を採ろうとするU男



## 生活科学習指導案

1 単元名 「元気にそだって ぼくのおかいこさん、わたしのおかいこさん」

2 単元が生まれるまで

2年生の生活科を始めるにあたって、子どもたちに今年はどうな活動をしてみたいかと問いかけた。その際、「虫を探したい。」「春探しをしたい。」という子どもたちの意見が出てきた。そこで虫という発言につなげて「蚕って知ってる？」と尋ねると約半数の子どもたちが手を挙げた。「保育園のときに飼ったことがある」という子どもも数名いた。しかし子どもたちから「蚕を飼ってみたい」という積極的な声は聞かれず、北庭に虫探しに出かけていく子どもたちであった。

蚕のまち「岡谷」なので、蚕を容易に手に入れることができる環境にある。この蚕の飼育から、生き物に心を寄せる活動はできないかと考えた。そこで子どもたちが蚕や繭に触れるような環境を設定した。読み聞かせの時間に暗くした会議室に移動し、まず繭の糸で作られたランプシェードの灯りをつけた。子どもたちは「わー」「きれい」とランプから漏れるほのかな光の美しさに声をあげた。ランプシェードの説明は特にせず、暗くした部屋のまま、『かいくんと虹色のまゆ』という蚕が主人公の絵本の読み聞かせをした。読み聞かせ中、主人公の蚕が繭を作ろうとする場面では、「そうだよ。蚕って繭を作るんだよ。」というつぶやきが子どもたちから聞かれた。蚕の特徴に触れた展開を予想しながら物語を楽しんで聞く姿が見られた。読み聞かせの後、ランプシェードを指さして「実はこのランプの周りのこの部分は蚕の糸で作っているんだよ。」と話すと、「えー」「本当？」と声をあげて、ランプに近づいて行き、よく見たい、触れたいと考える子どもたちの姿が見られた。また、用意していた繭で作った人形や繭工作の作品を見たり触れたりする時間をとった。人形を手にとつて、転がるおもちゃを転がして遊ぶ姿が見られた。

最後に感想を聞く場をとったところ、「繭ってきれいだな。」「自分たちで蚕を飼ってみたい。」「繭でいろいろ作ってみたい。」という声が上がった。

3 単元設定の理由（素材の教材化）

(1) 子どもの実態

2年2部の子どもたちは、北庭など自然の中で遊ぶことが好きな子どもたちが多い。1年生の頃より、進んで外に出て、お尻が泥で汚れても気にせず、体全体で遊ぶ姿がたくさん見られた。そのような中、外でいろいろな虫やカエルなどの小動物を捕まえてきて、飼育しようと試みるが、自分本位の関わりとなってしまう、結果としてその生き物の命を失ってしまう姿がたびたび見られた。

春の遠足で出かけた公園では、下着が濡れることも気にしないほどカエル採りに夢中になり、カエルとともにカエルの卵も採って袋に入れて帰ってきた。「この水槽で飼いたい」と言うので、学校の水槽に入れてやった。翌日から教室の水そうで飼育を始め、2日目に孵化してオタマジャクシとなった姿を見て、それまで以上に心にとめて関わろうとする子どもが増えた。しかし、大きくしてあげたいと考え、たくさん食べさせたいと、多くの子が餌を次々と上げた結果、水質を悪化させてしまい、オタマジャクシになって3日後に全て死んでしまった。「あーあ」と、死んでしまったことを残念がってはいるが、オタマジャクシについて悲しいという気持ちを持つまでに至っていないように感じられた。

## (2) 素材としての価値

### 関わりが持ちやすい

- 大きな動物と違い，“自分のお蚕さま”という1対1の意識を持って関わるができる。
- 自分の働きかけ（桑の葉をやる）に対して、餌を食べてくれるなどの働き返しがすぐある。また、成長のスピードも速く、「育てている」「蚕が喜んでくれている」という実感や愛着を持ちながら世話ができる。
- 触ったり、葉を食べる音を聞いたり、匂いをかいだりといろいろな感じ方で触れ合うことができる。
- 人に危害を与えず、飛ばない、動かないので虫が苦手な子どもにも、愛着を持ちやすく、比較的、飼育が簡単である。動きが少なく、餌をあげたり、糞を始末したりすることも2年生の子どもが自分の力で十分に行うことができる。

### 命について考えることができる

- 脱皮を繰り返し成長していく姿、繭をつくる姿などを近くで見ること、生命の不思議さやすごさを感じることができる。
- 繭をつくってさなぎになった蚕の命を止めて繭を残すか、そのまま蛾にするか、さらに交尾をさせて卵をうませるか、という決断を子どもたち一人一人が迫られる。大切に育ててきたものの命を止めなくてはいけない矛盾した状況に自分なりに折り合いをつけていく中で、命について、深く考える機会を持つことができる。

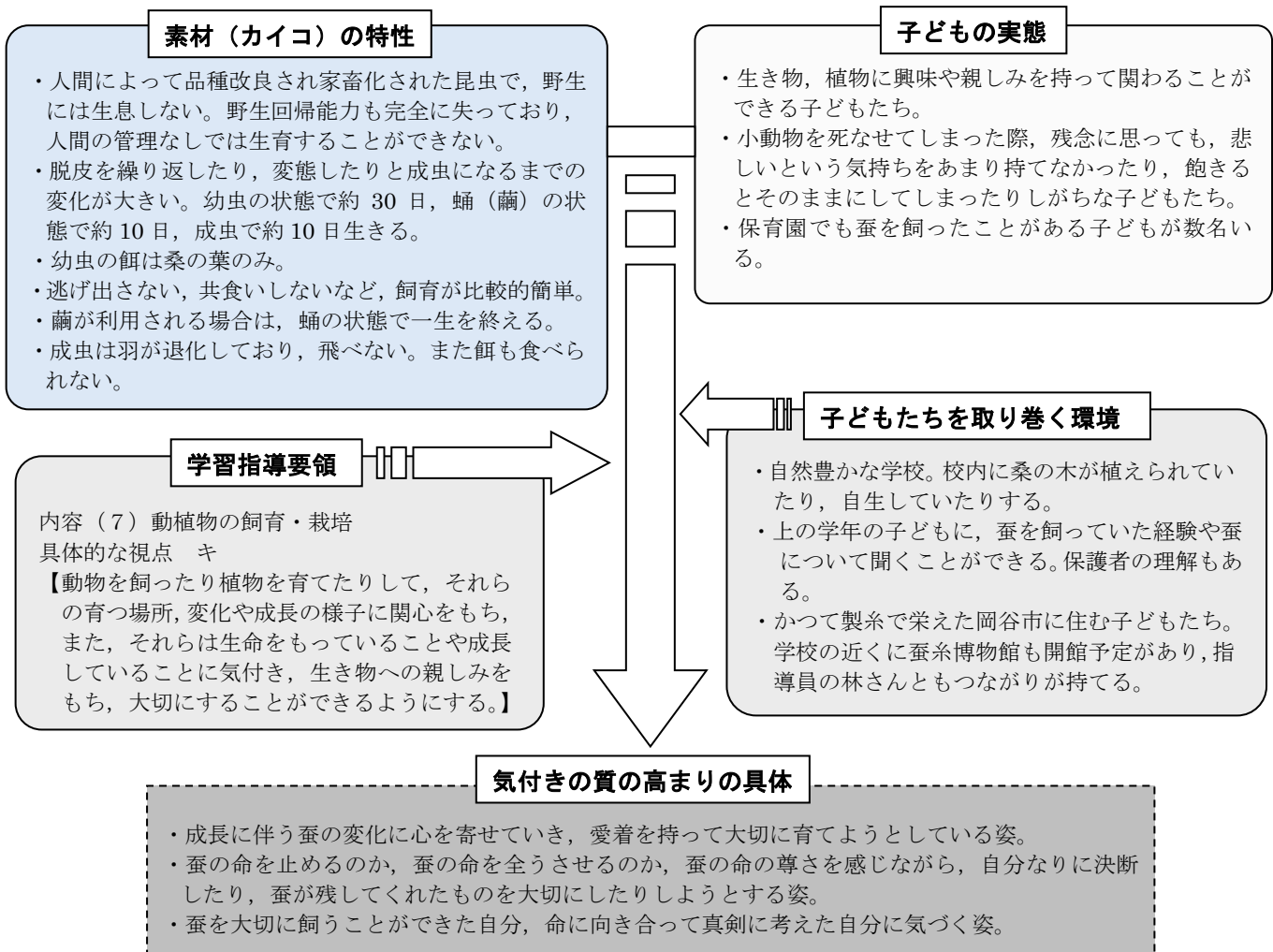
### 子どもたちを取り巻く環境のよさ

- 蚕と深いかかわりのある岡谷市の学校であり、蚕の餌となる桑の木も校内に数本植えられていたり、自生したりしているので、容易に餌を用意できる。
- 兄弟が本校で蚕を飼育した経験があり、飼育の助言を得られる。保育園、幼稚園で蚕を飼育した経験を持つ子どもがおり、蚕を飼うことに対して保護者の理解や協力も得られやすい。
- 自分たちの地域が、蚕と関わりが深いことを知り、自分たちの住む地域に目を向けていくきっかけとなる発展性がある。
- 学校の近くに蚕糸博物館があり、指導員の林さんに教えていただくことで、飼育についての困難点を乗り越えることができる。また、地域の人である林さんと蚕を通じて積極的に関わっていくことができる。

## (3) 教師の願い

生き物に興味があっても、自分本位の関わりになってしまいがちな子どもたちが、自分がお父さん、お母さんとなってお蚕さまを育てることを通して、お蚕さまに心を寄せて関わり、命と向き合ってもらいたい。

#### (4) 素材の教材化



#### 4 単元の目標

##### (1) 主目標

蚕に出会った子どもたちが、自分の「お蚕さま」を飼う中で、餌やりや糞、食べ残しの始末などの世話をしながら、日々の変化を見ることによって、蚕が成長していることに気付き、蚕への思いを深め、大切にしようとするすることができる。

##### (2) 具体目標

- ①「ぼくがかいこだったらうれしいな」と蚕に自分を重ねながら、自分から親しみを持って蚕の世話をすることができる。
- ②蚕の成長に合わせた世話の仕方を考えたり、調べたりして、蚕にとって居心地のいい環境を考え、関わっていくことができる。
- ③蚕の成長の変化を見たり、蚕の命をどうするかを考え合ったりすることを通して、家族に囲まれて成長してきた自分と重ねながら蚕の命を考えることができる。
- ④繭や繭からとり出した蛹に対して、自分が育ててきた蚕に思いをよせながら、大切に育ててきた自分自身の成長に気付くことができる。

	A 生活への関心・意欲・態度	B 活動や体験についての思考・表現	C 身近な環境や自分についての気付き
本単元の評価基準に盛り込むべき事項	動植物やそれらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもち、生き物に親しんだり、大切にしようとしたりしている。 キ	動物を飼ったり植物を育てたりすることについて、自分なりに考えたり、工夫したり、振り返ったりして、それを素直に表現している。 キ	生き物は生命をもっていることや成長していること、生き物と自分との関わりに気付いている。 キ
単元の評価基準	進んで蚕に関わり、蚕の立場に立って世話をしようとしている。	蚕の成長に合わせた世話の仕方や、蚕にとって居心地のいい環境を考え、丁寧に世話をしている。	蚕の成長の変化や、蚕にも生命があることが分かり、その関わりから自分自身の成長に気付いている。
学習活動における具体的評価基準	<p>①蚕を育てる環境を整えようとしている。蚕の成長を楽しみしながら世話を続けようとしている。餌やり、糞の始末などを積極的にして、大切に育てようとしている。</p> <p>②蚕に思いを寄せて、一緒にやってみようことをしたり、蚕について感じたことを書きとめたりしようとしている。</p> <p>③蚕の変態（繭作り）に合わせて、必要な世話の内容を調べたり、よりよい環境をつくろうとしたりしている。</p> <p>④蚕の命と向き合い、自分なりの結論を出そうとしている。</p> <p>⑤繭から出した蛹となった蚕や蚕が残してくれた繭をしっかりと見つめ、大切にしようとしている。</p>	<p>①蚕の変化や成長に合わせて、餌である桑の葉の量や質を変えたり、飼育場の環境を整え、糞の始末をこまめにしようとしていたりしている。</p> <p>②蚕が喜んでくれそうなことを、蚕の立場に立って考え、行動しようとしている。蚕に思いを寄せて感じたことを書きとめている。</p> <p>③調べたことや分かったことを記録したり、よりよい環境を作ったりしている。</p> <p>④自分と蚕との関わりを思い起こしながら、蚕の命を止めるかどうかを悩み、考え、自分なりの結論を出している。</p> <p>⑤蚕の気持ちを考え、大切に蛹を扱ったり、繭を使ってストラップなどを作ったりしている。</p>	<p>①蚕が脱皮をしながら、だんだんと大きくなっていく様子の変化に気付いている。餌の食べ具合や蚕の様子から餌のあげるタイミングや量に気付いている。</p> <p>②蚕の様子をよく見たり、触れて遊んだりすることを通して、蚕が大事な存在であることに気付いている。</p> <p>③蚕が繭を作って蛾（成虫）になる準備をすることに気付いている。成虫が子孫を残すことや、そのまま飼育を続けることの困難さに気付いている。</p> <p>④蚕から繭（蛹）になる成長を喜んだり、死を悲しんだりすることを通して、蚕も生命を持っていることに気付いている。</p> <p>⑤繭から出てきた蛹や繭の様子から、蚕が懸命に生きようとしていたことに気付いている。蚕を繭にするまで親代わりとなってやさしく育てられた自分に気付いている。</p>

6 単元展開の概要 (全26時間)

意識の流れ	学習活動	学習内容	○支援 ◇評価	時数
<p>蚕ってどんな生き物なのかな。どうやって飼うのかな。</p> <p>早く一人一人て飼いたいな。</p> <p>自分のお蚕さまを元気に育てたいな。</p> <p>お蚕さまって不思議だな。</p>	<p>林先生からお蚕さまについて教えてもらおう。</p> <p>お蚕さまをどうやって育てていくか考えよう。</p> <p>お蚕さまの世話をしよう。</p>	<p>○蚕がどんな生き物なのか、実際に見たり、お話を聴いたりして知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>蚕は昔から大事にされてきたんだ。</li> <li>思ったより小さくてかわいいな。</li> <li>早く大きくしたいな。</li> </ul> <p>○100匹以上いるお蚕さまをどうやって飼っていくか考えよう。</p> <p>○一人一人て飼うか、みんなで飼うか、グループで飼うか考えよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>お父さんやお母さんになったつもりで、一人一人飼いたい。</li> <li>グループで助け合いながら一緒に飼いたい。</li> <li>虫が苦手だからクラスのみんなで飼いたい。</li> </ul> <p>○世話をしている気付いたことを出し合おう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>食べるスピードが速くなった。</li> <li>いっぱい食べるようになった。</li> <li>糞も大きくなった。</li> <li>“眠”をしているのがいた。</li> </ul> <p>○脱皮する映像を見て感じたことを発表しよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ビュッと頭が出てきてびっくりした。</li> <li>お蚕さまがすごくがんばっていた。</li> </ul>	<p>○蚕についてのお話を聞いたり、子どもたちがもつ疑問や不安を聞いてもらったりできるように蚕糸博物館の林さんとの出会いの場を設定する。</p> <p>○えさのやり方や糞の始末など、蚕の飼い方の基本を子どもたち全員で共通理解し、経験を積んでいけるよう、蚕がまだか弱い3歳の段階ではクラスみんなで飼う。</p> <p>○家に持ち帰ってもしっかりと世話ができるように、学年通信、学級通信でお家の方にお知らせし、サポートしてもらえる環境を作っておく。</p> <p>○知りたくなかったことをすぐに自分で調べることができるよう蚕に関わる本を教室に置いておく。情報交換が活発にできるようにワンプレートホームワークなどで、自主的に調べてきた子どもがいたら、クラス全体に紹介し広める。</p> <p>○子どもたちが、蚕の生き物としての不思議さに興味を持てるように、写真や図、映像を用いて、蚕の生態を紹介する。</p> <p style="text-align: right;">A-① B-① C-①</p>	8
<p>お蚕さまともっとくなくないかな。</p> <p>お蚕さまが食べている桑の葉っておいしいのかな。</p> <p>桑の葉が無くなったのでどうしよう。</p>	<p>お蚕さまとやってみよう。</p> <p>お蚕さまがおいしい桑の葉を食べてみよう。</p> <p>桑の葉がもっとないか探そう。</p>	<p>○お蚕さまと一緒にやってみよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>外に連れて行ってあげたい。</li> <li>岡谷小のいい景色を見せてあげたい。</li> <li>体に乗せて遊びたい。</li> </ul> <p>○おいしい桑の葉を見つけて、お蚕さまに食べさせてあげよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>おいしい桑の葉を食べてくれてうれしいな。</li> <li>ぼくも食べてみたくなった。</li> <li>クワの葉って人間も食べられるんだ。</li> <li>栄養満点なんだね。</li> <li>お蚕さまのおいしく食べている気持ちがわかったな。</li> <li>新鮮な桑の葉をいっぱいあげたいな。</li> </ul> <p>○自分たちでとれる桑の葉が足りなくなってきた。もっと他に桑の木がないか探そう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>この葉っぱの形はきっと桑だ。</li> <li>知らなかったけど、学校にはたくさん桑の木があるね。</li> </ul>	<p>○お蚕さまの気持ちに寄り添って考えられるように声掛けする。振り返りの場面では、それぞれがどんなことをお蚕さまにしてあげられたのか、情報交換する場を設定する。</p> <p>○お蚕さまが食べている桑の葉っておいしいのかなと興味をもった子どもがいたら、桑の葉は人も食べられることを投げかけてみる。</p> <p>○桑の葉の素材の味が分かるように、簡単な桑の葉の料理を作って素材をじっくり味わう機会をもつ。</p> <p>○蚕の気持ちを共有できるように桑の葉を食べてみた感想を語り合う場を設定する。</p> <p>○葉が足りなくて困っている場合には、校舎外で、桑の木を一緒になって探す。</p> <p style="text-align: right;">A-② B-② C-②</p>	4

<p>5 齢にな ったお蚕 さまは、こ のあとど うなるの かな。</p>	<p>繭をつく り始める お蚕さま への世話 を考えよ う。</p>	<p>○繭を作る準備をするお蚕さまにして あげられることを考えよう。 ・眠のときは触っちゃいけない。 ・トイレットペーパーの筒があるとい って聞いたよ。 ・林先生に聞いてみたい。 ○林先生から繭を作るお蚕さまにつ いて話を聴き、知りたいことを質問し よう。 ・いつから糸を吐き出すのかな？ ・お部屋にはいつ入れてやればいいか な。</p>	<p>○今後の見通しがもてるように、繭作り について心配している子どもやす でに繭作りについて調べている子 どもの意見を伝え合う場を設定す る。 ○繭を作り始めるお蚕さまにどのよ うな変化があるのか、どんな準備が 必要なのか調べたり考えたりする 場を設定する。 ○情報交換しながら自分たちで準備が できるように支援する。 ○林先生にお話を聞く場を設定する。 A-③ B-③ C-③</p>	<p>4</p>
<p>お蚕さま の命、どう したらいい のだろう。</p>	<p>お蚕さま の命をどう するか 考えよう。</p>	<p>○繭になったお蚕さまはこれからどう なるのだろう。 ○繭をつくったお蚕さまの命をどうす るか考えよう。 ・繭工作をつくりたいから命を止める。 ・このまま飼いつづけて、蛾になら せる。 ・蛾にして卵を産ませる。 ・大切に育ててきたぼくのお蚕さま の命を止めることはできないよ。 ・お父さんやおかあさんは子ども の命を奪ったりしないよ。</p>	<p>○林先生にお話を聞く場を設定する。 ○繭で命を止めずに蛾にするという子 どもに対して、最後までどのように責 任を持つのか、問いかける。 ○交尾をさせずに命を全うさせるた めの方法など、子どもたちの必要感 に応じて、林先生に相談する機会 をもつ。 ○どの選択をしても、命を大切に考 えた子どもたちなりの結論を受け とめ、声掛けをする。 A-④ B-④ C-④</p>	<p>4</p>
<p>お蚕さま の残してく れた繭を 大切に したい。  お蚕さま との思い出 を大切に したいな。</p>	<p>繭からお 蚕さまを 出そう。 (本時)  繭で思い 出に残る ものを作 ろう。  お蚕さま にお手紙 を書こう。</p>	<p>○繭からお蚕さまの蛹を取り出し、よ く見て、感じたことを語り合おう。 ・繭の中でもお蚕さまはがんばって 蛹になっていたんだな。 ・きれいな繭を一生懸命作ったんだ ね。 ・蛾になって出てきたかったのに、 ごめんね。 ・見晴しのいい所、お蚕さまとの思 い出の場所に埋めてあげたいな。 ○お蚕さまが命の代わりに残してく れた繭を使って思い出に残るもの を作ろう。 ・お蚕さまが残してくれた、ストラ ップ、大切にしたいな。 ・お蚕さまにお手紙を書こう。 ・ごめんね。大事にするよ。</p>	<p>○繭をどうするか話し合う場を設定し 、子どもたちの希望に合わせて林 先生に講師として来ていただく。 ○写真やそれまでの学習カードをも とにお蚕さまと過ごした日々を振 り返えられるように、お蚕さまと 一人一人の記念写真を事前に撮 っておく。 ○お蚕さまと自分との関わりを振 り返ることができるように、最後 に振り返りの場を設定する。  A-⑤ B-⑤ C-⑤</p>	<p>6</p>

## 7 本時案

### 1 本時のねらい

繭を切って蛹を取り出し、お蚕さまとの思い出に残るものを作りたい、蛾になるお蚕さまの準備をしたいと願っている子どもたちが、繭から出てきた蛹やカイコ蛾、繭の中を見つめたり触ったりすることを通して、自分の育ててきたお蚕さまの新たな一面に気付くことができる。

### 2 本時の位置 26時間中第21時

(1) 前時：繭で作りたいものを考え、どのように繭を切るか考えた。(繭工作)

蛾となったお蚕さまの部屋やお家を考え、作り始めた。(蛾のお部屋作り)

(2) 次時：自分のお蚕さまが、一番喜んでくれると思うことを考え、自分のやりたいことをやっていくだろう。

### 3 指導上の留意点

- ・一緒に過ごしてきた日々を思い返すことができるように、学習の過程が分かる教室掲示しておく。
- ・個人の願いを大事にして、決めかねている子どもには、どうしたいのか問いかけながら願いに沿うように助言する。

### 4 展開

	学習活動	○学習内容・予想される子どもの反応		○支援 ◇評価	時
願いをもち	○やりたいことを確認しよう。	○どんなことをしたいか確かめよう。 ・お蚕さまを傷つけないように、気をつけて繭を切りたいな。 ・繭をきれいなままで切りたいな。 ・中の蛹はどうなっているのかな。 ・僕は全部蛾にすることにしたけど、蛹ってどんな感じのかな。見てみたいな。 ・上の階を付け加えてお蚕さまの蛾の家を大きくするぞ。 ・蛾が過ごしやすい部屋を作ってあげたいな。		○危険がないように繭の切り方、鉋の使い方を確認する。 ○蛾と一緒に過ごしたいと決め出した子どもには、やりたいことを確認し、必要に応じて、やりたいことをできる場を保障する。	5
		繭を切ってお蚕さまを出そう		蛾になるお蚕さまの準備をしよう	
自分のやりたいことに取り組み	○繭から取り出したお蚕さまをじっくり見よう。	○繭からお蚕さまの蛹を取り出そう。 ・中からお蚕さまが見えてきた。 ・茶色くって思ったよりちっちゃいな。 ・蚕の時と全然体が違って、小さくなっている。 ・体がプニプニしている。 ・体が伸びたり縮んだりするよ。 ・脱皮した皮が入っていたよ。がんばって中で蛹になっていたんだ。	○蛾になるお蚕さまのためにお家作りの続きを作ろう。 ・蛹ってあんな体になっているんだな。びっくりしたな。 ・僕のお蚕さまも今はあんな蛹になっているのかな。 ・僕はやっぱりお蚕さまを死なせなくてよかったな。早く蛾になって出てきてほしいな。	○繭から出てきた蛹に対する子どもたちの心の動きに寄り添い、共感する。 ○うまく切れない子どもには、一緒に切るなど援助する。 ○蛾のお部屋やお家を作っている子どもたちには、お蚕さまを意識して活動できるように「お蚕さま喜ぶかな」と声をかける。	25
気付いたことを伝え合い		○自分の気付いたことを伝え合おう。 ・茶色くなっている。 ・蛹にかおができていた。 ・さわったらプニプニしていた。 ・体が曲がったり、伸びたりしたよ。 ・お蚕の時にあった息をする場所が残っている。 ・体が曲がるのは前のお蚕さまと同じだね。 ・おなかが大きくてメスだとわかった。 ・繭の中も白くてきれいだった。 ・思ったより繭が厚くてびっくりした。 ・お蚕さまは、形は変わったけど、残っているところもあるね。		○お蚕への気付きを伝え合う場をつくる。 ○新しい一面に対する具体的な気付きした子を紹介したり、具体的な気付きを問いかけたりする。 ◇自分の育ててきたお蚕さまの新たな一面気づくことができたか。(発言・繭の切り方・蛹を見つめる様子より)	10

活動を振り返る	○今日の活動を振り返り、お蚕さま日記を書く。	○今日のお蚕様日記を書こう。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・お蚕さまが残してくれたきれいな繭を使って繭工作を作りたいな。</li> <li>・お蚕さまをうまく出してあげられてよかったな。</li> <li>・お蚕さまの蛹をどうしようかな。</li> <li>・蛹を土に埋めてあげたいな。</li> <li>・いつ蛾が出てきても大丈夫だよ。</li> <li>・もっと蛾になったお蚕さまが楽しく過ごせるお家にパワーアップさせたいな。</li> </ul>	○蛹をどうしたいかについて考えている子どもの発言を取り上げ、次時にやりたいことを問いかける。 ○蛾と過ごした子どもや蛾のために準備した子どもにも今日したことやその感想を問いかけ、他の子どもたちに活動や思いを広める。	5
---------	------------------------	--	--	---



## 1 「元気にそだって、ぼくのおかいこさま、わたしのおかいこさま」(2年2部)

### (1) 教師としての自分自身の変容を願い、自ら学びの主体として探究し続ける教師の姿

生活科の研究を進めるにあたって、授業者の武田教諭が考えたことは、「生活科の研究を通して、教師としての自分を成長させ、学級の子どもたちとの関係性を変えてきたい」という思いである。2年2部の担任の武田教諭は、この学級を1年次から担任している。子どもたちが目を輝かせて探究するような授業を願い、日々の授業づくりには相当の時間を費やし、そのための労力は惜しまずに取り組んできた。しかし、その教師の思いとは裏腹に、教師の願いと子どもの思いとに少しずつずれが生じ、「先生は分かっている」という子どもたちの意識が膨らみ始め、思うような学級経営ができずに悩んでいたのである。そこで、この生活科の授業研究を、教師自身が変容していくための機会と考え、授業研究をスタートさせたのである。

まず、武田教諭が取り組んだのは、毎日の子ども姿や出来事を記録し、そこで教師がどんな働きかけをし、何を感じたのかを綴った「ぼくと 子どもと おかいこ日記」の蓄積である。この記録を通して、教師自身が自分の行為を内省し、子ども観を編み直しながら自身の変容を具現しようと考えたのである。そういう武田教諭の教師としてのものがきを、単元の展開を追いながら読み解いていきたい。

「ぼくと 子どもと おかいこ日記」は、次のような内容から始まった。

5月27日(火)

朝から、航介君がたんぼぼの根を掘って持ってきていた。業間休みに、京汰君が誘いに来て、たんぼぼの根を掘りに行く。近くにいた敬君も一緒に行こうと誘って北校舎横の庭に行く。タンポポはすぐに見つかるが、スコップを誰も持っておらず、二人は木切れで掘ろうとする。あまりうまく掘れないが、それほど本気になって掘り起こそうという感じでもなく、根の方を木切れで叩いて楽しんでいる様子。敬君が私に木切れをくれ、「ここに指をかけるとちょうどいい」と握り方を教えてくれる。私自身もその木切れで掘ろうとしてみるが、根っこがすぐ切れてしまいうまく掘れない。次がダンスの連学年練習だったので、「あと10分だ」と言うと、「時間のことを言うと楽しくないじゃん。言わないで」と京汰君に注意を受ける。まさしく京汰君の言う通りで自分も次のことが気になって十分に楽しんでいない。その後、泥と水で泥だんご作りを始めていた峻司君、拓也君、空君、航介君のグループと合流して、みんなで泥水遊びが始まる。私も一緒に土を練っていたが、また、「これで手を洗ったり、片づけたりしていたら・・・」と時間が気になり、時計をちらっと見た。すると、こちらが何を言ったわけでもないのに京汰君が、それをしっかり見ていたようで、「先生また時計見ている」と厳しい突っ込みが入る。一緒になって遊びこんでいない私をよく見ていることに驚かされた。

自分自身が子どもたちと遊びを共有しているように動いているながら、ともに活動に浸りこむことなく、逆に、子どもたちが「浸りこむ」ことを邪魔している存在であることを改めて感じる。ともに浸りこむとはどういうことなのか。時間を忘れて、遊びに熱中し、子どもたちと一緒に「あっ、いけねえ。遅れちゃう！」といっしょに慌てるようになってはいけないのだと反省する。が、そう簡単に自分の大人の見方、とらわれている枠を取り外せそうもないことも感じている。

日記を綴り始めた武田教諭は、思いのずれが大きかった数人の男子とのかかわりを取り上げて、その出来事を記している。武田教諭は、この出来事の振り返りを通して、「一緒にいるようで一緒にいない」自分自身への気付きから、子どもたちと自分との間にある距離感に気付いた。そして、「大人の見方をしている自分」「取り外せない枠をもっている自分」という自分の内にある既成の枠組みに気付き、まず、それを受け入れようとするところから動き始めていった。

翌日の5月28日の日記には、次のような言葉が綴られている。

5月28日(水)

2 時間目の体育のダンスの練習の休憩時間に、峻司君が幼虫を発見して持ってくる。桑の木の近くの体育館の壁にくっついてたのを発見したのだそうだ。5分もない休憩時間の中で見つけてくるところがさすが虫好き、生き物好きの峻司君だなと感心させられる。幼虫の正体はクワコか？クワコだったらお蚕さまの学習にもつながるという下心もあり、丁重に預かる。生活科の授業を構想中でない、今までの私なら峻司君が幼虫を見つけてきた時点で、「今は虫を見つける時間じゃない！」と言って、幼虫には目もくれず、捨てさせていたように思う。生活の中のいろいろな場面で活動の芽があるんだということを改めて感じる。教師がアンテナを張っておくと、活動の幅を広げることができることを感じる。

武田教諭の、子どもたちへのまなざしが変わり始めていく。「今までの私なら」という言葉からも分かるように、これまでの自分の見方が少しずつ変容し、「さすが虫好き、生き物好きの峻司君だな」と、教師が子どもに関心をもち、もっと子どもを知りたいとその触手を伸ばそうとしていることが分かる。

この日記の中に「生活科の授業を構想中」という言葉が出てきているが、このとき、教師は生活科の授業で取り組む素材として「蚕」に注目し、教材研究を進めていた。「蚕」にかかわる本を集めて読んだり、生活科の授業で実践した経験のある小林教諭に「蚕」という素材や、素材としての価値についていろいろな話を聞いたりしていた。さらに、蚕糸博物館で指導員をしている林久美子さんから「蚕」についての話を聞いたり、学校の敷地内を歩き回り、「蚕」の餌となる「桑の葉」のある場所を探したりしていた。武田教諭が「蚕」という素材に関心をもち、「蚕」に入り込み始めていたことも、教師が子どもに関心をもち、対象との接点を見いだせないかという願いをもって子どもと向き合うことにつながったと考えられる。教師が素材を求め、素材に入り込んでいくことは、素材との間柄を変えていくことにとどまらず、同時に子どもに関心を向け、その接点を探ろうとする教師のからだをつくっていくのである。

5月30日。いよいよ教師は、素材を「蚕」に決め、子どもたちの思いが「蚕」に向いていく場をしつらえた。「しつらえ」とは、千利休が大切にした利休七則にある言葉で、客人と気持ちよく茶のひとときを過ごせるために、万全を期して準備をするという茶道の理念となる言葉である。相手に思いを寄せ、心を尽くして準備をするというこの言葉の意味を踏まえ、子どもをみようとする教師の繊細なまなざしと、実感のある教材研究のもとに位置付けられた活動の場を「しつらえ」と考え、特別な意味をもたせている)

5月30日（金）

子どもたちの気持ちを「お蚕さまを飼いたい」という気持ちに向けることができるか不安に思いつつも、昼の読書の時間に会議室で読み聞かせを行った。暗くした部屋でランプシェードを点灯させると「うわーきれい！」と声が上がった。プラネタリウムを期待した子もいたが、虹色に光るシェードのあかりの近くに来て触ろうとする空君。蒼士君は「アトラクションみたい」とつぶやいた。絵本「かいくんと虹色のまゆ」を読み始める。反応しながら、よくお話を聴いている。かいくんが糸を吐くところで、みんなが「すごい！」と言うと、峻司君が「そうだよ、アゲハも吐くよ」と言っている。まゆになったところで話は終わっているが、「さがしてみたい」と京汰君が言う。ランプシェードの糸はお蚕さまの糸を巻いたものであることを伝える。「えー」「すごい!」と声上がる。「他にも、お蚕さまのまゆからこんなのできるんだって」と言って、まゆの人形や、キーホルダーやおもちゃを見せる。みんなが集まってきて順番にそれぞれを見たり触ったりする。「お兄ちゃんもつくっていた。」「これつくってみたい」という声が聞かれる。

京汰君は「お蚕さまを飼ってみたい、おじいちゃんやおばあちゃんに聞いてみたらいい」、峻司君は、「アゲハとかと一緒に飼いたい!」と発言。空君は「ぜったいぜったい飼う!」と力強く宣言する。加世子さん、愛佳さん、寛太君からは「虫をあんまり飼ったことがないから飼ってみたい」と発言がある。朝、「お蚕さまとか気持ち悪いから飼いたくない」と言っていた蒼生さんも「飼ってみたい」との発言がある。みんなの意見に「そんなに見つかるかな?」と京汰くんが心配そうにつぶやく。「なかなかみんなの分を探すのは難しいよね。お蚕さまの赤ちゃんをもらえるところがないか聞いてみるね」「この土日でお家の人に聞いたり、本で調べたりしてみてね」と伝える。

以前、話題に上った時には、飼ってみたいという積極的な声が上がらなかったが、ランプシェードやまゆ工作の作品などのお蚕さまを飼うことによって得られる魅力的な産物、そしてお蚕さまが登場する物語の読み聞かせといった環境を設定したことが、子どもたちが「お蚕さま」により近づき、飼ってみたいという思いをもつことにつながったのではないかと。

武田教諭は、読み聞かせの場での「蚕」に関心をもって向かってこようとする子どもたちの姿に手応えを感じ、「飼ってみたい」という思いが醸成されていくことに期待感をもった。しかし、この日の日記の後半には、次のような省察も述べられている。

子どもたちに「どうしたらお蚕さまを手に入れられるかな。」というように問いかけ、子どもたちが調べてくる時間を取りたいところであったが、時間を十分にかけることができなかった。出会いの部分をもう少し丁寧に時間を取って、子どもたちが「自分たちががんばってお蚕さまに出会えた」という思いをもてるようなかわりが必要だったが、教師のほうで準備してしまうだけになってしまった。まゆでいろいろ工作をしたいという気持ちと、お蚕さまを飼ってみたいという気持ちのどちらが子どもたちの中で強いのかと後で振り返ってみて思った。子どもたちの発言には、「作ってみたい」ではなく、「飼ってみたい」という言葉が出ているが、一部の子どもの声で「飼う」という流れに何となく乗っている子どもたちもいるのではないかと思った。

確かに「飼ってみたい」という声は聞かれたが、本当にそうか、本当にそれだけの思いの高まりを子どもの内に生み出すことができたのか。武田教諭は、そう自分自身に問いかけている。教師の思惑に乗ってくる都合の良い子どもだけの姿をとらえて、「よし、子どもの期待感が高まってきたぞ」とはしていない教師の姿を読み解くことができる。心底やってみたいという思いになっているのかどうか、本当に子どもが動き出そうとしているのかと、子どもの姿に関心を寄せ、子どもを理解しようとする教師のからだになってきているからこそ、このような言葉が綴られていくのではないだろうか。子どもの姿に関心を向けていく教師は、目で見て分かる表面的な姿からだけでなく、その子の内に目を向け、どんな思いが生まれ、何を求めようとしているのかにまで思いを巡らせていくのである。

6月上旬。教師と「蚕」との間柄が変わっていく出来事が綴られている。

6月7日（土）

この週末は私自身にお蚕さまの命がかかっているのに、「しっかりと世話をしないといけない」と気が引き締まる。餌の桑の葉を多めに取って箱ごと自宅に持ち帰る。「餌は朝昼夕の1日3回でいい」と林先生から教えてもらっていたが、お蚕さまがボーっとしている様子を見ていると餌が足りていないのではないかと不安になり、ついつい餌をやってしまう。

6月8日（日）

お蚕さまがさらに大きくなっているのを感じる。灰色っぽかった体が、青白く、お蚕さまらしい色、形になってきている。すでに2齢から3齢への脱皮をしてしまったのか。気持ちがいい食べっぷりで、入れた桑の葉がまたたく間に食べつくされていく様子をついつい見てしまう私がいる。桑の葉を食べるときのクツクツツツというような爽快感が何とも言えない。



6月10日（火）

放課後、帰宅間際に「眠」の状態を写真にしっかり撮っていないことに気付き、教室に戻る。見てみると何頭も脱皮を完了している。ビデオで脱皮の瞬間を撮れるチャンスかもと、ビデオを用意して目星をつけたお蚕さまの撮影を試みる。粘っているとついに、脱皮を始める。皮を脱ぐ姿は少しグロテスクでもあるが、お蚕さまのがんばりが伝わる。頭の殻が取れる瞬間も撮ることができ、見せてくれたお蚕さまに思わずありがとと言いた

くなる。撮影を始めて1時間。子どもたちに見せたらどんな反応を見せてくれるか楽しみに思いながら帰宅する。

6月14日(土)

桑の葉を食べることになるかもしれないので、試しに、南体育館裏の桑の葉を私が3枚食べてみた。ゆでて食べただけがいやな苦みがなく、ほのかに甘みもあり、野菜代わりに食べてもいいくらいに意外と食べやすい。その後、体の調子も特に変化なく、インターネットで調べても、桑のアレルギーはないということだったので、子どもたちとも食べられそうと構想を巡らす。

「蚕」との生活を続けていくうちに、教師自身が対象にのめり込み、対象に熱いまなざしを送るようになっていくことが分かる。子どもに探究してほしいと願う以上、まず教師が探究心をもって素材とかかわり、その味わいを知っておくことは、子どもの探究の道すじを描くためには必要不可欠なことである。対象について、その表面を触った程度の教材研究では、およそ教師は自分の構想に子どもをあてがっていきだろろうし、目の前の子どもの学びの深層にせまっていくことやその子の育ちをとらえていくことは難しい。

このことにかかわって、松木健一先生から次のようなお話をいただいた。

子どもの成長と教師の成長、授業の実践の中でこの二つが編み込まれていく話だなと思いますので、先生が書かれたものはそれそのものを表現されていたなと思います。それでいいなあとと思います。生活や総合なんかでいちばん大切にしたいなあと思うのは、子どもに寄り添って、子どもがどう思っていくのかなあって思っていくのと、もう一つ、教師自身の探究心じゃないかなと思うんです。昨日読ませていただいた本の中に書かれていたものの中には、先生自身が探究している姿がたくさん書かれていました。先生自身が不思議に思って、どうしたらいいのかなあって考えていたことがいっぱい書かれていたなって思うんですよね。そういう意味でいくと、両者のベクトルの和が活動の発展への教師の見通しであったり、子どもの発言をどういうところで拾えるかっていうところにかかってくるんじゃないかなと思うんですよね。何が言いたいかという、教師の材への探究心、これがないと活動の発展への読みもないし、あるいは、子どもの発言を拾うこともできないんじゃないかなっていうふうに思うんです。先生自身が蚕を育てることを不思議がって、探究しながらやっていることが、子どもの発言に対しても敏感に反応できるセンスを磨いていくことにもなるなあって思いますし、これからどんな活動の展開が期待できるかなあってことを、イメージを広げていくことにもなるんじゃないかあとと思います。それで、やればやるほど分からないことがいっぱい出てくるので、教師って限りなく探究し続ける、そういう存在なんだろうっていうふうに思いますね。それをやめたら子どもが見えなくなっちゃう、子どもの発言を拾えなくなっちゃうんじゃないかなと思います。

松木健一先生からも示唆をいただいた教材研究が教師のからだにもたらすものについて、6月10日と13日の日記から、武田教諭が、子どもの育ちを願い葛藤していく姿や、子どもの変容からその子の育ちをとらえていこうとする姿として読み解いていくことができる。

6月10日(火)

5時間目の生活科の時間に再びお蚕さまをどうやって分けて育てるかについて話し合う。まだグループで飼いたいという子どもたちがいる。話し合う中で、拓也くんから「名前をつけたい」という発言があり、「一人で飼っていくと一頭一頭名まえをつけて見分けられるほどになるかもしれないよね。」と答える。拓也君の発言は「お父さん、お母さんとしての意識」とつながる発言だと感じたが、私の“出”があいまいでその意識を広めることができなかった。拓也君にどうして名前をつけたいと思ったのか尋ねたら、拓也君の一頭一頭を大切に育てたいという気持ちをもっと明確に引き出せたかもしれない。

確認してみると、22人中6人が1人ずつではなく、グループで飼いたいという思いを持っていることがわかる。特に京汰君や峻司君、空君、敬君という、虫が好きなメンバーがグループで飼いたいと言っているのが、悩みの種である。このまま、子どもたちの気持ちを大事にグループで飼わせることも考えるが、特にこの子たちには、一人一人、しっかりとお蚕さまと向き合いたいと思っているので、「じゃあそれぞれ好きにやろうか」とは言えなかった。



6月13日(金)

瑚都さんが「一頭いなくなっちゃった。」と言ってくる。もう一頭あげることはできるが、簡単に渡すのはどうかと悩む。「蚕は他の虫と違って、逃げ出しても自分では桑の葉をさがしたりできないから、いなくなっちゃったってことは、餌を食べられたくてもう死んじやうってことだよな。おかあさんとして、しっかり見てあげないとかわいそうじゃない？」と尋ねると神妙にうなずいている。

教師は、子どもにこういう姿になってほしいという願いをもって授業を構想し、授業の中にかかわっていく。しかし、子どもには子どもの思いや願いがあり、思うようにはいかない出来事が当然起こってくる。この2つの日記に綴られているように、武田教諭は、「子どもはこうしたいと言っている」、「しかしそれでは本当に大事なことは向き合えないのではないかと」、この思いの間で葛藤していたのである。授業の中で何かを越えようとしている子どもとともに、教師も葛藤しながら同じようにそれを乗り越えようとしている存在として子どもの前に居るのである。子どもと同じまなざしをもって対象と向き合い、子どもが動き出す場の中にそういうからだをもった教師が居ること、そのことが大切であると考えた。

次に、6月12日の日記からである。

6月12日(木)

朝から蚕の様子を見たり、餌をやったりしている。日陽さんが下校の準備をしているときに「フンを触ったら柔らかかったんだけど・・・」と心配そうに声をかけてくる。林先生のお話の中で、フンが固まっていないときは病気の心配があるということを知っていたのかと思われる。その時はバタバタとしていて「フンが出たばかりでやわらかかったんじゃない？大丈夫だと思うよ」と言って流してしまう。フンを自分で触って確かめて、お蚕さまの病気の心配をしている日陽さんの行為の価値をきちんとその場で評価できなかった。他の児童にも日陽さんのお蚕さまへのかかわりの深さを伝えることができたはずであった。下校に間に合うようにという思いが強すぎ、余裕をもって日陽さんの声を聞くことができなかった。

さらに記録写真を見返してみると、最初にお蚕さまを林先生からいただいた日に、日陽さんがお蚕さまのフンを指に乗せうれしそうに見せてくれている写真があった。最初の出会いの場面から日陽さんはフンに対する抵抗感もなく、感動をもって接している。そんな日陽さんだからこそ、お蚕さまの健康のバロメーターとしてのフンのかすかな変化にも気付くことができたのだろう。日陽さんがなぜフンの固さにこだわっていたのか。そこには、日陽さんが一貫して持っていたフンに対する思いとかかわりがあったからではないかととらえることができる。一人一人の意識のつながりという視点をもって子どもを捉えていく大切さが分かった。私も一緒に日陽さんが心配しているフンを触ってその違いを感じてみる、そして心配が必要な柔らかさなのか、いっしょに考える、悩む。そのようなスタンスで子どもと向き合えたらと思う。



武田教諭は、フンを触ってお蚕さまの心配をしている日陽さんの行為に関心を寄せ、日陽さんの前の姿を見ようと記録を見返した。つまり、武田教諭は、フンの変化からお蚕さまの状態を探っていこうとする日陽さんの育ちを、前の姿からの変容としてみようとしているのである。この姿から、武田教諭が、日陽さんの「フンのかすかな変化も見逃さず、それを健康のバロメーターにする」という行為を、一貫したフンに対する思いとフンのかかわりという文脈の中で生み出した知の獲得としてとらえていることが分かる。子どもたちに、新たな問題と直面したり、未知の他者と出会ったりしたときに、自ら考えよりよく問題を解決する力をつけたいと願う私たちにあって、大切なのはどれだけたくさんの知を獲得したのかではなく、どのような出来事を通して知を生み出したのか、である。子どもが学びの主体として、自分の体験と友の言葉をつなぎ、紡ぎ合わせながら知を



生み出していく姿を具現していくために、教師は、具体的な文脈の中での子どもの育ちをみていくことが大切になるのである。

7月2日。子どもたちは、蚕糸博物館の林久美子先生から「繭をきれいに使うためにはお蚕さまの命を止めなくてはならない」というお話を聞いた。そして、翌日の7月3日には、学級で「お蚕さまの命をどうするか」という話し合いを行った。その結論が出たのは、7月7日での話し合いである。その日の日記には、次のように書かれていた。

7月7日（月）

改めて自分の考えをまとめる時間を取る。蛾にするのを諦めていた空くんや蒼士くん、凌くん、諒汰くんは蛾として命を全うさせる道を選んだ。特に、凌君は全てのお蚕さまを蛾にすると決めており、「大人にしたい」という思いを強く持っていたが、500頭も飼えないからと諦めていたことが伝わってきた。一方まだ、「卵を産ませる」と言う意見を変えずに持っている峻司くんや京汰くん、敬くん、航介くんは桑の葉も集められるし、育てられると言っている。一番早く繭を作った愛佳さん、朋子さんは、話し合いの後、「命を止める」という気持ちは変わらないということで命を止める準備を進め、午後に調理室にそれぞれのお蚕さまを持って行き、冷凍庫に入れた。特に私が「こうしたら」ということは言わなかったが、手紙を書いたり、繭を入れる筒を折り紙で作ったりして、お蚕さまを送る準備を2人で話し合いながら進めていた。愛佳さん、朋子さんと私の3人で調理室に向かったが、入り口で冷凍庫への入れ方の説明をして、お別れは一人ずつ冷凍庫の前でするように話をし、私も調理室から出て、一人でお蚕さまと向き合う時間を持てるようにした。こちらが一緒についてどんな顔でどんなお別れをするのか見てみたい気持ちもあったが、私自身も他の人がいたら物を言わないお蚕さまと向き合ってきたらと別れることはできないと思ったので、邪魔をしてはいけないと感じた。「時間かかってもいいから、自分でちゃんとお別れをして、冷凍庫に自分でいれて部屋から出て来てね。」と声をかけて、調理室の前で待った。最初は愛佳さんだったが、いつもは元気でおしゃまな愛佳さんが少し照れつつも神妙な顔で部屋から出て来た。「ちゃんとお別れできた？」と聞くとうなずき、一人で教室に歩いて戻る愛佳さんの後ろ姿が見られた。いつもは走って帰るイメージだが、静かに歩いて帰る後ろ姿に一生懸命育ててきたお蚕さまとの別れを今、受け止め、感じているのかなと感じた。続く朋子さんもお別れをして出てきた。しばらくだまって歩いて戻るが、途中で「朋子さん、いつもよく面倒見ていっぱい餌あげていたよね。お蚕さまうれしかったと思うよ」と声をかけると「うん」と答えが返ってきた。



子どもが命を止めるそのときに、同じまなざしをもって、一緒に乗り越えようとする存在として立ち会う武田教諭の姿がここには書かれている。このような教師の姿が生まれた背景には、次のような出来事があった。武田教諭は、7月5日の日記に次のように書いている。

7月5日（土）

まゆ工作の教材研究のため、前もって自分の育てていたお蚕さまをいくつか冷凍庫に入れ、命を止める。今、手の中にある命を、自分の手で止めてしまうことの重さを感じる。冷凍庫に入れる時、冷凍庫を閉める時が最も切なく罪悪感を持つ時であると感じた。「ごめんね」「これまでしっかり生きてくれてありがとう」という気持ちで別れを告げる。子どもたちとお蚕さまの別れの場面でも、まとめてではなくて、一人一人自分の手を使って自分の別れがもてるようにお別れの時間を大切にもちたい。

教材研究を通して、今、子どもが乗り越えようとするときが、どのようなときなのかを実感している教師だからこそ、その子に寄り添いながら、自分の手を使って別れの時間をもつ子どもを、「あなたのやっていることは、こういうことだよ」と後押ししようとしていることが分かる。そして、子どもたちは、それぞれに自分の願い

を実現するための活動を進めていった。

7月11日。繭を切って蛹を取り出し、繭の中の様子を見たり触ったりする活動に取り組んだ。

7月11日（金）

本時は繭を切る活動と、お蚕さまの家を作る活動に子どもたちの活動が分かれて展開することになった。一匹でも蛾（成虫）になるお蚕さまがいたら、家を作る活動に取り組む子どもたちにとっても、張り合いがでて、成虫の動きを確かめながら、実際のお蚕さまのことももっと考えながら活動することもできていただろうと残念に思う。また、繭を切る子どもたちにとっても、生きている成虫となったお蚕さまの姿を見た上で、命を止めた蛹のお蚕さまを見るのでは、生と死のコントラストがより鮮明となり、感じることも大きく違ってくるのではないかと思った。休み明け、友だちの蛾になったお蚕さまの姿を見て、子どもたちがどう感じるのだろうか。

気付いたことを話し合う場面では、これまでに脱皮した時との皮の様子の違いから、「繭の中のスペース」について考えていく子どもたちの姿に驚かされた。私は、脱いだ皮が出てきたのを見ても、小さくまとまっているなど言うことしか考えなかった。これまでの脱皮と違い、幼虫から蛹に大きく体を変える脱皮なので、脱いだ皮の様子も違ってくるのかもしれないが、狭い繭の中で脱皮をしていくことがあのコンパクトになった脱皮した皮と関係していることも十分に考えられる。お家作りに取り組んでいながらも、蛹になったお蚕さまの姿から考えることができる発想豊かな敬君や京汰君。またその話から、「自分が繭を切ってしまったのは、繭の中のスペースが狭かったから」と自分の体験を友だちの意見から編み直す発言をした日陽さん。狭い繭の中で脱皮をして、成虫になる準備をしていたお蚕さまの姿に近づくことができたことを感じた。

研究会では、お家を作るグループの活動がみんなから認められる場面を作れていなかったことについて、繭の中のお蚕さまについて、子どもたちは繭を切る前にどうとらえていたのかという点について意見をいただき、その通りだなあと足りなかったところが見えてきた。「繭を切ったら蛹が出てくる」ということは、前もって試してみた私からすれば当然のことであるが、子どもたちにとっては、繭の中は全くの未知の世界であり、あの自分が育ててきたお蚕さまがどうなっているのか、想像もつかなかった子どもたちがたくさんいたのだろう。その部分の戸惑いを大事に受け止められるような支援が必要であった。自分が育ててきたかわいかったお蚕さま、触ると柔らかくて気持ちよかったお蚕さまと、大きく変わってしまった蛹になったお蚕さま、命を止められたお蚕さまとの大きなギャップをつなぐ手だてが必要であった。



この授業は、子どもたちが、繭を自分の手で切り、出てきた蛹や繭の中を見つめたり触ったりすることを通して、自分の育ててきたお蚕さまの新たな一面を知り、さらに思いを深めていくことを願い、構想した授業である。教師は、この授業を構想するにあたり、実際に繭を切って蛹を取り出す教材研究を行い、子どもと蛹との心揺さぶるような出会いを思い描きながら本時の場をしつらえてきた。しかし、それでもまだ教師が願う学びの姿と出会うことはできなかった。目の前の子どもたちの教師を越えていく気付きや、豊かな発想に圧倒され、自分の子どもの姿のとらえの未熟さや支援の不十分さを突きつけられた。武田教諭はそう振り返っている。しかし、この問題の本質はそこにあるのであろうか。果たして、子どもの姿をよくとらえて、ここにあるような支援が構想されていれば願う学びの姿は生まれてきたのだろうか。このことについて、畔上一康先生から次のようなお話をいただいた。

先生は、先生と子どもと一本の糸でどうやってつなげていこうか、それを一本の糸をうんと編んで太くしていこうという心がけをしているってのは分かるんだけど、教室の文化っていうか、学びの文化をつくるってのは、先生が横糸になって、縦糸は子どもたち同士でつないでいかないと学習になっていかないの。だから、困



った時には、先生は子どもにイニシアチブを譲渡して、思いきって、「もうどこに行こうと構わない」くらいの思いになって、子どもたちが見つけた事実を、きちんと取り上げて、先生が共感する。または、先生もただの意見者としてそこにいるだけで、全く違う様相が生まれてくる。そこだと思うんだよ。だから思いきって深く子どもを信じて渡せるかっていうか。先生が主流に立ち続けると彼は我流になってどんどん解離していくから、「今回は思い切って蒼士くんを主流にしよう」それくらいの覚悟でやっていくことが、施す教育ではなくて紡ぐ教育って言ったわけです。今日の会ですごく思うんだけど、(子どもは、自分が)出した糸しか織れないです。こちらからどんなに立派なものを持ってきても、子どもたちも全部1本1本糸を持っていて、それをどうやって編んでいるかってのが授業なわけだから、このきれいな糸をどうやってみんなで感動できるかっていうライトを真っ赤にするだけでその糸が糸として見える。そういう丁寧さをどうやって子どもたちのまなざしに立って、どう感動できるかってところをつくっていくことが教師にとってとても重要な、と思いました。思いきってがんばって下さい。歩んでいる方向は間違っていないから。やさしく子どもを受け止める仏さんの私じゃなくて、子どもに寄り添うということは、子どもにこれはおかしいと思ったら意見者としては一応と言っている。子どもたち同士がどうやって意見を絡ませながらやっていくか。必要なのは子どもたち同士がつくりあげていく文化をどうやってつくりだすかが一番大事な。そこんことを子どもたちに任せておいて、私たちはしっかりとした座標軸をもって、「あなたが言いたいのがここなんだね」って言ってあげたい。それが材であり授業構成だと思う。それもなくて、今日気付いて言った時に、先生は座標軸をもってなかったわけでしょ。子どもたちこれだけもっていたから授業やりたいなって思っちゃいました。そういう感じを受けたので。教室に入った時なんて書いたかっていうと、「子どもたちがキラキラしてる」って書いたの。ぎらぎらになったりべたべたになったりしていくことあるかもしれないけど、きらきらの状況をどうやっていくかってことは先生のしつらえ次第かなと思います。積極的に指導していいんですから。だけど子どもの目線に立って。

教師と子どもとの糸をつなぐのが授業ではなく、子ども同士がどう糸を紡ぎ合っていくか。そこに授業の本質がある。そして、そこでの教師の役割は、子ども同士が自ら糸を紡ぎ合っていくための場をどうしつらえていくのか、そこにある。子どもが必要感をもって自ら動き出し、子ども自らが知を紡ぎ出していく学びの背景には、そうなる必然性を生み出す場がしつらえられていて、そして、その学びを責任をもって見とどける教師がその場に居ることが大切なのである。このことを本時の授業で考えると、子ども同士がお蚕さまにもっている感情を差し出しあい、そして、目の前で起こる感動を共有していくような子ども同士のかかわりをどうやって位置付ければよかったのか。そのために教師はどのような場をしつらえればよかったのか。そこが授業の核になっていたのではないだろうか。

さらに、畔上一康先生は、この「ぼくと 子どもと おかいこ日記」について、次のようなお話をされた。

この日記読ませてもらった時に、武田先生本当にご自身リニューアルしてやられようとしているんだってこと。この学年の子どもたちをもった時の向き合い方っていうのは、今まで教員人生十何年かやっている中で、本当に大きな転換を図ろうっていうチャレンジだったんじゃないかなってことを思って、おととい手紙が届いて、手紙に一昨年ここで話したことが、こんなにも武田先生の中に言葉として残っていたというのが、まさに自己改善と向き合っていらっしゃることかなと。責任の重さも感じるんですけど、5月から始めてずっと書かれていてひとつひとつがそれなりに子どもたちとの世界をつくっている重要な部分で、歩みをしているのがよくよく分かりました。いちばんは、今までは、ある答えにたどり着かせようという発想で、もっと言うと、先生の中には、思いにそぐわない子はいらない子。自分が書いた指導案なりに道すじを埋めていくという、それでねらいを達成したという、その間に切り刻まれて捨てられた子どもたちが山ほどいたっていう。おそらくね、極論を言うと、そういうご自身の歩みがどこかにあったことへの懺悔と共に、子どもたちへの向き合い方に新しく歩みだそうというのがよくわかる。

また、松木健一先生は、次のようなお話をされた。

武田先生がお書きになった、この一連の活動の流れを書いたものを昨日いただきました。昨日一晩、ずっとそれを読んで、とても楽しかったです。改めて先生の文章を読ませていただいて、素敵だなあって思ったのは、

子どものこともさることながら、半分はご自身のことなんですね。ご自身の振り返りが半分書かれていました。教育って相互性だから、子どもだけが成長するわけじゃなくて、子どもにかかわりながら教師が成長する話でもあるんで、ああいう文体で書かれても納得できる話だなんて。これでもうひとひねりして、最後に先生がどう思ってこられたのかってことを書いた上で、今度は一人一人の子どもがどんなふうに成長しているのかわかって、子どもの筋でもう一回、例えばもう一回蚕の実践を組み立ててみて表現してみようなんてことができると、今まで見えてこなかった部分がまた見えてくるんじゃないかって気がします。一回一回の実践で先生ご自身が何を考え、何を悩んだかってことがこの間見せていただいた文章には綴られていました。とても正直に書かれていた文章だなと思います。

松木健一先生、畔上一康先生は、武田先生の教師としての自己改革や学級経営へのものがきを受け止め、意味付けてくださっている。この半年間、武田教諭は、教師自身の記録を蓄積しながら自分の姿を内省し、教材研究に没頭しながら授業づくりを進めてきた。それでも、授業の本質がとらえきれない自分がいることに直面し、さらなる変容を願い日々葛藤している。それだけ、教師が変わるということは頭で考えるほど簡単なことではないということである。しかし、武田教諭の目の前の子どもの事実への謙虚さ、そして、素材に自らのめり込んでいこうとする教師のからだ。子どもと共に歩んでいく教師の姿は、自らも学びの主体として探究し続ける教師の姿ではないかと、私たちは考えている。

#### 〈この事例から示唆されたこと〉

- ① 教師が素材を求め、素材に入り込んでいくことは、素材との間柄を変えていくことにとどまらず、同時に子どもに関心を向け、その接点を探ろうとする教師のからだをつくっていく。そして、子どもの姿に関心を向けていく教師は、目で見えて分かる表面的な姿からだけでなく、その子の内に目を向け、どんな思いが生まれ、何を求めようとしているのかにまで思いを巡らせていく。
- ② 子どもに探究してほしいと願う以上、まず教師が探究心をもって素材とかかわり、その味わいを知っておくことは、子どもの探究の道すじを描くためには必要不可欠なことである。対象について、その表面に触った程度の教材研究では、およそ教師は自分の構想に子どもにあてがっていきたくらうし、目の前の子どもの学びの深層にせまっていくことやその子の育ちをとらえていくことは難しい。
- ③ 授業の中で何かを越えようとしている子どもとともに、教師も葛藤しながら同じようにそれを乗り越えようとしている存在として子どもの前に居るのである。子どもと同じまなざしをもって対象と向き合い、子どもが動き出す場の中にそういうからだをもった教師が居ること、そのことが大切である。
- ④ 子どもたちに、新たな問題と直面したり、未知の他者と出会ったりしたときに、自ら考えよりよく問題を解決する力をつけたいと願う私たちにとって、大切なのはどれだけたくさんの知を獲得したのかではなく、どのような出来事を通して知を生み出したのか、である。子どもが学びの主体として、自分の体験と友の言葉をつなぎ、紡ぎ合わせながら知を生み出していく姿を具現していくために、教師は、具体的な文脈の中での子どもの育ちをみていくことが大切になる。
- ⑤ 教師と子どもとの糸をつなぐのが授業ではなく、子ども同士がどう糸を紡ぎ合っていくか。そこに授業の本質がある。そして、そこでの教師の役割は、子ども同士が自ら糸を紡ぎ合っていくための場をどうしつらえていくのか、そこにある。子どもが必要感をもって自ら動き出し、子ども自らが知を紡ぎ出していく学びの背景には、そうなる必然性を生み出す場がしつらえられていて、そして、その学びを責任をもって見とどける教師がその場に居ることが大切なのである。
- ⑥ 教師が変わるということは頭で考えるほど簡単なことではない。しかし、目の前の子どもの事実への謙虚であり、そして、素材に自らのめり込んでいこうとするからだになること。子どもと共に歩んでいく教師の姿は、自らも学びの主体として探究し続ける教師の姿ではないかと考えたい。

#### (2) 対話を通して、教師同士がつながりながら、互いを成長させていく同僚性

武田教諭は、この授業実践の中で、自分が考えたことや感じたことを研究部会はもちろんであるが、同じ学年

の濱教諭との対話を通して、次の構想を練り、授業を進めていった。同じ2学年の濱教諭の学級でも、素材として「蚕」を選定し、生活科の授業を進めていた。毎日、放課後になると職員室で、今日起こった出来事やそこでの子どもの姿を伝え合い、そこからどんなことが見えてきたのか、そして次の日にどう支援をしていけばよいのかを考え合っていた。その時間は、数時間に及ぶこともあった。単元の学習が進んでいるのだが、毎日が教材研究であり、日々変わっていく子どもの意識をていねいに捉えていこうとする姿は、まわりの教師にも強く伝わってきた。そして、濱教諭は、このときの対話について次のように振り返っている。

武田先生からお蚕様の飼育の仕方や活動の様子（桑の葉の場所、葉っぱの種類、子どもたちの様子等）、お蚕様の特徴等を教えてもらったり、お蚕さまの成長について情報交換をしたりしていました。お蚕さまという共通の材を通して一緒に考えたり活動できたりしたことは貴重なことでした。お蚕さまを育てていると、桑をむしゃむしゃ食べ、日に日に大きくなっていくお蚕様への愛着が生まれ、わが子のようにかわいがって育てていた気がします。子どもたちと同じように、繭になってしまうとお世話することが減ってなんだか物足りなさやさみしさを感じたり、繭の中で命をとめてしまう時には悲しくなり、蛾になった時は喜んだり思いを共有することができました。クワコがいたことを教えて頂いたこと、驚きと共に喜びでした。桑の葉をゆでて食べたとき意外とおいしかったこと。お蚕さまが脱皮をした頭の皮を見せてもらったことは、驚きと感動でした。

濱教諭は、日々起きる出来事の感動を武田教諭と分かち合いながら、自分自身も対象とのかかわりに浸り込んでいった。そして、「一緒に考えたり活動できたりしたことが貴重なことだった」と、その対話自体に大きな意味があったことを綴っている。

この教師の同僚性について、松木健一先生から次のようなお話をいただいた。

実際にやってみて、それを何とかして振り返りながら言葉にして、組み立て直しをしてみる。このたゆまない繰り返しの中で成り立つ知の方が、教師の知の中では中心を占めているんじゃないかなと思うんです。そういう意味でいくと、語って初めて身に付くものなんですよ。子どものやっていることを何とかして言葉にしよう、あるいは、自分の経験したことを何とか言葉にして人に伝えようとする中で成り立つ知であって、それは裏を返して言うと、聞いてくれる人がいないと成り立たない知なんだろうと思うんです。つまり、教師って一人では教師になれないってことなんです。同僚がいて、ねえねえ、ちょっと聞いてやって、人の実践に耳を傾けてくれる人がいて、初めて自分の実践の意味が分かってくる。言葉に置き直していくってことができる。そういうことじゃないかなって思うんです。教師がつながっていく、それは教師が育っていくための基本的大前提だと思うんです。同僚同士で、子どものことについて語り合っていく、そういうことをやっぱり前提にしないと、教師は育っていかないし、力もつかないんじゃないかと思うんです。教師のもっている力、あの、熟練した力ってのは何なのかなと考えたときに、自分の経験したことをもとにして、きちんと実践をするってことだと思うんです、まずは。人から借りてきたことを、人に言われて思ったことをそのままやるような実践のやり方は、子どもに対して不誠実だと思うんです。自分が経験して、これがいいなって確信をもってやれることがいちばん重要だなって思うんですが、そうなる、一人一人は自分の経験を越えていけないことになっちゃいますよね。自分が責任をもって子どもに対応するってことは、自分の経験に基づいてやるべきだと。って言ったら、その人の経験は他の人は味わうことはできないわけだから、その人の中だけで閉じちゃうことになっちゃいますよね。そしたら自分を越えていくことができなくなっちゃいますよね。でも、できるんです。その矛盾をどうやって解決するかって言うと、先生方が話し合うってことなんです。同僚と話をしているときに、これも、ここで何度か繰り返し言っていますが、先生方はプロだから、プロの方が語り合っているときって、カウンセラーのような聞き方はしないんです。カウンセラーの話の聞き方は、可能な限り自分を鏡のようにして返していこうとします。そんな聞き方をする人なんて、誰もいないと思うんです。同僚同士で話をしているときはね。どんなふうに聞いているかと言うと、人の話を聞いているのは半分、あとの半分は人の話を聞きながら自分のことを振り返っています。人の話を聞きながら、ああそうだよなあ、それがいいんだよなあって思いながら聞いていたりするわけですよ。ああすればいいよなあって思いながら聞いているってこ

とは、何をしながら聞いているかと言うと、自分の実践を振り返っているわけですね。自分の実践を新しく意味付けし直しているんですよ。過去においてうまくいかなかった実践であっても、思い出したくないって思う実践であっても、今、人の話を聞いた瞬間に、それを補っていくと意味のある実践事例として自分の中に位置付けていくんですよ。失敗した事例で、もう思い出したくないと思う事例で仮にあったとしても、人の話を聞いて、そこを補ってみると、こうすればいいんだっていう実践として自分の中に位置付けていくんです。教師は、自分の実践を超えていくことはできないんです。だけど、自分の経験そのものは、絶えず新しく作り直していくことができます。新しい意味が付与されて、新しい意味付けがなされた実践事例として作り直しをしていくことができます。教師は、そうやって過去をつくり直すことで、明日に向かって歩いていく、そういう専門職です。だから、責任をもって対応していくことができる、だから、先生方はつながっていかなくちゃいけない。語りを聞いてくれる人がいなくちゃいけない。語りを聞くチャンスがなきゃだめ、ということになります。語らないと分からない。経験しただけでは分からない。経験したことを言葉に出そうとしたり、あるいは、言葉で聞いたことをもう一回経験で裏打ちをすることで分かっていく知が、先生方の知の中心なんじゃないかなと思うんです。それは、専門職のコミュニティーができていないと進まない話でもあります。絶えず、みんなが子どものことについて「あのさあ」って言える雰囲気をつくり出していくことが、先生方の成長を支えているって思っています。

私たちが日々語り合っていくことは、自分の実践を意味付け、教師に必要な知を紡ぎ出していくことにつながっていく。子どもたちが、分からないことを言葉にして分かっていくように、教師もまた、自分が出会った子どもの姿を言葉にしていくことで、子どもを理解し、子どもに近づいていくことにつながっていく。まさに、前述した武田教諭の子どもへのまなざしが変わっていったように、自分の実践を言葉にしていくことで、教師のからだも変わっていくのである。そして、そのためには、自分の実践や出会った子どもの姿を語り合う教師の同僚性が重要なのである。

#### 〈この事例から示唆されたこと〉

私たちが日々語り合っていくことは、自分の実践を意味付け、教師に必要な知を紡ぎ出していくことにつながっていく。子どもたちが、分からないことを言葉にして分かっていくように、教師もまた、自分が出会った子どもの姿を言葉にしていくことで、子どもを理解し、子どもに近づいていくことにつながっていく。そして、そのためには、自分の実践や出会った子どもの姿を語り合う教師の同僚性が重要なのである。

### 1 対象と子どもをつなぐ教師のあり様と実感のある教材研究

- (1) 教師が素材を求め、素材に入り込んでいくことは、素材との間柄を変えていくことにとどまらず、同時に子どもに関心を向け、その接点を探ろうとする教師のからだをつくっていく。そして、子どもの姿に関心を向けていく教師は、目で見て分かる表面的な姿からだけでなく、その子の内に目を向け、どんな思いが生まれ、何を求めようとしているのかにまで思いを巡らせていく。
- (2) 子どもに探究してほしいと願う以上、まず教師が探究心をもって素材とかかわり、その味わいを知っておくことは、子どもの探究の道すじを描くためには必要不可欠なことである。
- (3) 授業の中で何かを越えようとしている子どもとともに、教師も葛藤しながら同じようにそれを乗り越えようとしている存在として子どもの前に居るのである。子どもと同じまなざしをもって対象と向き合い、子どもが動き出す場の中にそういうからだをもった教師が居ること、そのことが大切である。
- (4) 大切なのはどれだけたくさんの知を獲得したのかではなく、どのような出来事を通して知を生み出したのか、である。子どもが学びの主体として、自分の体験と友の言葉をつなぎ、紡ぎ合わせながら知を生み出していく姿を具現していくために、教師は、具体的な文脈の中で子どもの育ちをみていくことが大切になる。
- (5) 教師と子どもとの糸をつなぐのが授業ではなく、子ども同士がどう糸を紡ぎ合っていくか。そこに授業の本質がある。そして、そこでの教師の役割は、子ども同士が自ら糸を紡ぎ合っていくための場をどうしつ

らえていくのか、そこにある。子どもが必要感をもって自ら動き出し、子ども自らが知を紡ぎ出していく学びの背景には、そうなる必然性を生み出す場がしつらえられていて、そして、その学びを責任をもって見とどける教師がその場に居ることが大切なのである。

- (6) 教師が自身のもつ教科観を編み直していくきっかけは、1時間の授業を通して、目の前の子どもたちにどんな力をつけていきたいのか、そのことを自分自身に問いかけたときに生まれてくるのではないか。そのことが明確になって初めて、子どもと獲得したい何かが具体的に描かれ、そして、そこに子どもと教師が共に向かっていく道すじが教材研究を通して構築されていくのではないだろうか。
- (7) 私たちが日々語り合っていくことは、自分の実践を意味付け、教師に必要な知を紡ぎ出していくことにつながっていく。子どもたちが、分からないことを言葉にして分かろうとしていくように、教師もまた、自分が出会った子どもの姿を言葉にしていくことで、子どもを理解し、子どもに近づいていくことにつながっていく。そして、そのためには、自分の実践や出会った子どもの姿を語り合う教師の同僚性が重要なのである。

## 2 新たな知を自分たちの言葉で紡ぎ出していく子どもを具現するための支援にかかわって

- (1) 子どもは、うまく言葉にならないものや簡単に言葉にできないものを、言語化していくという行為を通して、これまで考えられなかったことを考えられるようにしていく。このような、言葉にならないものを言葉にしていく行為そのものが言語活動であり、子どもは未知のものを様々な方法で言語化することで理解しようとしていく。
- (2) 対象との実感のあるかかわりが体験として位置付いていることは、友と考え合う必要感を生み出し、その体験にもとづいた根拠を明確にした言語活動が行われ、伝え合いによって新たな知が紡ぎ出されていくことにつながっていく。
- (3) 子どもは、互いに考えを伝え合っている友の言葉を手がかりにし、友の考えと自分の思考とをつなぎながら自分の考えをつくっていく。
- (4) 子どもたちは、いろいろな分かり方が差し出されていく中で、その友の言葉や表現を聞いたり見たりし、その接点を探りながら分かろうとしていく。そして、このような関係性の中でこそ、理解の程度に差があったとしても共に学習できる協働学習の場が生み出されていく。

## 3 自分と他者とのつながりを実感し、自己の学びを意味付けていく子どもを具現するための支援にかかわって

- (1) 1時間の終わりに、その時間の出来事を自分なりに意味付けていくことは、自分の学びを自覚化し、具体的な文脈をもつ出来事として記し、次の学習への意欲を高めていく。
- (2) 自分が今まで獲得してきた知へ新たな意味を付加し、見方や考え方の変容が起きたり、分かり直したという実感をもったりすることが、子どもにとって学ぶ楽しさや喜びにつながっていく。
- (3) 一時間の授業を終えて、今自分が感じていることや考えていることが生まれるに至った道すじの中に、共に学んだ他者の痕跡がはっきりと残されていることを自覚することは、「みんなで考えるっていいな」「一緒に活動するって楽しいな」という協働学習への主体的な態度を培うことにもつながっていく。

## おわりに

武田教諭が綴った「ぼくと 子どもと おかいこ日記」には、7月7日（月）の出来事が次のように記されている。

### 7月7日（月）

朝、泰志君が「先生、お蚕さま、黒い血が出て死んでいたから、お墓作って埋めてきた」と声をかけてきた。「繭を作れなかったお蚕さま？」と尋ねると「そう」と答えた。「やっぱり蛹になれなかったんだ。すぐにお墓作ってあげて優しいね。先生の繭を作れなかったお蚕さまも死んじゃったみたいなんだよね」と話すと、「じゃあ、一緒にお墓作ってあげる」と言ってくれたので、「いいの？お願いね」と休み時間に一緒に行く約束をする。休み時間には、泰志君と二人で、私の死んでしまったお蚕さまを持っていこうとしていると、拓也君、航介君、京汰君が、「どうしたの？」



と声をかけてきた。事情を話すと、「ぼくも手伝ってあげる」といっしょに来てくれることになった。小雨が降る中みんながグラウンドに向かうが、その道中、傘を持っている泰志君が傘を持たずに濡れて歩いていた私に傘をかけてくれようとした。「泰志君が濡れちゃうから先生はいいよ」と声をかけると「でもお蚕さまも濡れちゃうじゃん」と、私がお蚕さまを持って死んでしまったお蚕さまを泰志君が気遣って声をかけてくれた。「そうか、お蚕さま濡らしちゃったらいけなかったよね。ありがとう。じゃ泰志君、お蚕さま持ってくれる？」と聞くと「いいよ」と答えてくれたので、お蚕さまを持ってもらった。6月30日に泰志君と繭を作れなかったお蚕さまについていっしょに悩みを共有したことがこのような泰志君の姿につながっているのかは定かではないが、泰志君のお蚕さまへの心遣いにうれしくなる。グラウンドに着くと、泰志君は私のお蚕さまも自分のお蚕さまの横に埋めてくれた。泰志君が埋めていた場所は石碑の裏側で、「どうしてここにしたの？」と尋ねると、「ここなら雨が降っても流されないから」と答えた。「場所も覚えていられるし、踏まれる場所じゃないし、いい所だね」と声をかけた。泰志君は最後に「ちょっと待って！」と言ってアカツメグサを近くから摘んできてお墓の上に乗せてくれた。お祈りをみんなですて、お別れを告げた。「雨の中、みんなありがとうね」と声をかけ、みんなで教室に戻った。今回自分からお墓を作っていたり、私のお蚕さまのお墓を一生懸命作ってくれたりする姿から、お蚕さまを最後まで大事にしようという優しい気持ちが伝わってきた。

雨に濡れないようにと教師をおもんばかりの子どもと、その行為に心を動かされる教師が、一緒になって雨の中を歩いている姿が書かれている。教師自身が「蚕」という素材にのめり込み、そして子どもと共に探究の道すじを歩んできた。だからこそ、教師は子どもと同じまなざしで、「お蚕さま」との別れのこのときを分かち合うことができたのだと思う。決して平坦な道のりではないのだけれど、思いを込めて活動してきたからこそ、思いがけない出来事に会おう。そういう体験こそが、教師のからだを変え、子どもと共に創る授業を具現していくのだろう。